
IS 《インフィニット・ストラトス》 ～星を見ぬ者～
白さん

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS《インフィニット・ストラトス》く星を見ぬ者く

【作者名】

白さん

【あらすじ】

第81独立機動軍ファントムペイン中尉『スウェン・カル・バヤン』はトロヤステーションにて、GSX-401FW スターゲイザーと戦いヴォワチュール・リュミエールによる超長距離移動に巻き込まれ、そのパイロットの『セレーネ・マクグリフ』と共に地球と金星の狭間を漂う。

スウェンはセレーナの言葉を受け、子供の頃描いた夢を再び追うと決めたその時、彼の視界が光に包まれた。目が覚めたそこは、重力

もあり、空が広がっている自分の居た世界とは違う世界。

女尊男卑のこの世界で、彼はどう生き抜いていくのか……。

オリ設定やオリ展開などあります。

誤字脱字等ありますでしょうが頑張って連載していきます。

プロローグ

宇宙、それはどこまでも続く真っ暗な空間。だが、その空間を大きな光りが照らしていた。純白の機体『GSX-401FW スターゲイザー』は惑星間推進システムヴォワチュール・リュミエールを展開し、今無限に加速を続けている。

スターゲイザーのコックピットの中に二人の男女。白髪の青年と、長い髪を後ろで纏めている女性だ。

二人は寄り添い、寒さで白くなった息を吐きながら呼吸をする。

彼らの目的は一つ、地球圏へと帰還することだ。薬によって、意識がまどろむ中、長髪の女性が青年に

「貴方の名前は？」

そう質問した。青年はこう答えた。

「俺は……スウェン」

「スウェン……良い名前ね。おやすみ……スウェン」

「き、君は？」

「私？ 私は……」

「……？」

スウェンと呼ばれた青年は、女性を見る。静かに眠りについているようだ。ふっ、とスウェンは口端がわずかに緩む。彼も意識が遠のいていく。その時、目の前が少しずつ白く染まっていく。

（俺は……生きるんだ。そして……夢を……ああ、眠くなってきたな……）

そして、女性の方を向き

「……おやすみ」

そう言い、彼は視界が光に包まれながら眠りについたのであった。

第一話『居場所』

スウエンは先程まで遠のいていた意識が、ゆっくりと目覚め始める。

「っ……」

重い瞼を開け、頭を横にしてあたりを見渡す。スウエンは緩やかな斜辺の草むらに寝転がっている形で居る。ふと顔を正面に戻すとそこは彼が予想だにしない光景が広がっていた。

「そ、空……？星……？」

彼の視界に広がるのは、夜空。散りばめられた様に広がる星々だ。スウエンは目を疑う。先程は、意識が完全に覚醒していなかったから気づかなかったが、自分は宇宙にいて、あの機体のコックピットに居たはずだ。こんな草むらに居るはずがない。それに隣にいたあの女性が居ない。

彼は状況がうまく飲み込めていないようだ。これは夢なのか？それとも自分は死んでしまったのか？幾ら考えても答えは出てこない。だが、一つ解ることは、目の前に広がっている星空はとても美しいことだ。このような景色を見たのは初めてだ。スウエンは自然と微

笑んでしまう。

身体に力が入らず、彼は再び意識が薄れていく。これは薬のせいではなく、純粹な睡魔なのだ。彼は気づく。すると、誰かが彼に近づくと。スウェンはそれを気に止めず、そのままゆっくりと眠りについた。

／※／

「……だ……とこ……」

話し声が聞こえ、スウェンは再び目を覚ました。今度は草むらではなく、ベッドの上だ。今度は身体がしっかり動く。彼はそれを確認しベッドから降りる。

「?」

スウェンは何か違和感を感じる。不意に近くの鏡に視線を送ると、そこに居たのは明らか背丈とその顔つきは10代前半の少年の姿だ。僅かに驚いた表情を見せ「ありえない」と一言。スウェンは20歳で、こんな幼さを残す顔や背丈はしていない。一度深呼吸をし、彼は声のする方へ向かった。

スウェンが来たのは居間のようだ。そこにはテーブルを挟んで座っている男性と女性が居る。

「ん？ ああ、起きたのか！」

「あら？」

その二人に近づくスウェン。彼は二人の左手を見る。薬指には同じ指輪がはめられており、この男女は夫妻であるとスウェンは直ぐに解かった。

「君、身体は大丈夫かい？」

「身体の方は問題ない」

「そうか……あんな人気の無い草むらに倒れているから、どこか悪いのか心配したよ。おっと、自己紹介をしなきゃね。僕は『ロイ・グレーデュント』こっちが僕の妻の」

「『ネレイス・グレーデュント』よ。貴方のお名前は？」

「俺は……スウェン、スウェン・カル・バヤン」

「スウェン、良い名前ね」

「……前に同じ事を言われた」

「クスッ、そうなの」

「それで、スウェン。君はどうしてあんなところに倒れていたんだい？」

「その前に聞かせてくれ、ここは……どこなんだ？」

スウェンのその問いに、ロイとネレイスは顔を見合わせて困惑した表情を見せる。

「ここはドイツにあるブレーメンの片田舎だよ」

「ドイ……ツ？ そんな馬鹿な、俺は宇宙に……地球から金星の狭間

を……あのモビルスーツに乗っていたはずだ……」

その時、ロイからスウェンにとって信じられない言葉が放たれる。

「宇宙？ それにモビルスーツとはなんだい？」

「！？モビルスーツを知らないだと！？」

「うん、聞いたことが無いね。君は？」

「いいえ、私も聞いたこと無いわ」

二人の言葉に啞然とする。スウェンは焦りの色を見せながら

「なら、オーブは？ ザフトは？ コーディネイターは？」

「すまない、どれも聞いたことが無いね……」

「そんな……馬鹿な……俺は一体……」

スウェンは混乱し頭を抑える。ネレイスは心配そうに声をかける。

「大丈夫？ スウェン君」

「……問題ない」

持ち前の冷静さを取り戻し、直ぐに表情を戻す。

「どうやら君は疲れているようだね、家はどこだい？ 送っていくよ？」

「家など、存在しない。身内も、両親も。言うなれば天涯孤独と言った言葉が合うだろうな」

ロイとネレイスは言葉を失った。目の前に居る少年は、家族が居ないことを平然と、しかも表情一つ変えず言っている。彼は一体どんな人生を歩んできたのか、二人は想像すら出来なかった。ロイとネレイスは顔を見合わせ頷き

「スウェン、君はどこか行くあてはあるのかい？」

「ないな」

「なら、此処で暮らさない？」

「なに？」

スウエンはネレイスの顔を見る。初めて真正面から顔を見たことで、スウエンは髪の色は違えど、ネレイスは誰かに似てると気づく。

「貴方のような子を一人であても無く居させるのは、私達は耐えられないの。貴方が迷惑でなければ良いの。一緒に暮らしましょう？」

この我が子を心から心配するような優しい表情。誰に似てるかと思えば、とスウエンは気づいた。

(似ているな……母さんに)

これは自分に与えられた、新しい人生なのかもしれない。自分が犯してきたことがどれ程なのか解かっている。それでも、このような優しい人達と人生を送れるのなら……、スウエンはそう思い

「俺には行くあても、居場所も無い。俺に居場所をくれるのなら……俺はここに居たい」

ロイとネレイスは笑顔を見せる。

「よかった、その言葉を聞けて。これからよろしく頼むよ、スウェン」

「こちらこそ、迷惑をかけることになる」

「そう堅苦しくなくてもいいのに。そうだ明日の朝、あの娘にもスウェンを紹介しなきゃね」

「娘？」

「ええ、今は寝ているわ。だから明日紹介するわね。ベッドはさつき貴方が使っていたので寝ていいから」

「わかった。これから……よろしく頼む」

スウェンは浅く頭を下げる。

こうして：スウェン・カル・バヤンの新しい人生が、幕を開けたのだった。彼の行く先にあるのは一体……

第二話『Striker』

「……朝、か。こうしてゆっくりと睡眠をとるのは何時以来だ？」

部屋に差し込む太陽の光りに、スウェンは眩しさを覚ます。そしてベッドから降り、鏡を確認する。

「やはり……昨日のままか」

鏡に映るは、昨日と同じ幼くなった自分。何故このような姿になったのかは検討のつけようがない。どうせ考えても答えが出ないのなら、考える必要は無し。と決め、寝室を後にした。

スウェンが居間に来るとソファーにロイが座っており、ネレイスはキッチンに居て、その他に長い銀髪の小柄な少女が居た。恐らく昨日言っていた、ロイとネレイスの娘だろうとスウェンは判断する。すると、ロイはスウェンが来たことに気づき

「おはよう、よく眠れたかい？」

「ああ、お陰様でな」

「それは良かった」

ロイの横に座っていた少女はスウェンを不思議そうな表情で見る。

「おっと、紹介しなきゃね。リズ、彼はこれから一緒に住むことになった子だよ」

スウェンは一歩前に出て

「スウェン・カル・バヤンだ。よろしく頼む」

「スウェ……ン？」

リズはスウェンに近づき、数秒彼の顔をジッと見つめた後

「……♪」

「？」

スウエンの手を握った。スウエンは何が起きたのか全く解からないが、ロイとネレイスは何故か笑顔になっている。

「あらあら♪ リズ、スウエン君にもう懐いちゃったみたいね」

「そう……なのか？」

「ああ、リズは人見知りが激しくてね。初対面の人には本当だったからこうして手すら触れないんだけど……こうして見れば兄妹みたいだね」

2人の髪の色は同じくらいの色で、しかも瞳の色も紫と同じ。ロイの言う通り、他の人から見れば兄妹のようにも見える。

「兄妹……か」

「どうしたんだい？」

「いや……何でもない」

「そうか。それじゃ、僕達は仕事に行くから。スウェン君、リズを頼んだよ」

「わかった」

「お昼ごはんはテーブルに上がってるから。行ってきます、リズ」

「行って……らっしやい、パパ、ママ」

ロイとネレイスは居間を後にし、仕事へと出発した。スウェンはリズの方を向き

「……あの2人の仕事は何だ？」

「ISの……お仕事」

「IS？」

「知らない……の？」

スウェンは首を縦に振り肯定を示す。

「IS。正式名称“インフィニット・ストラトス”……少し前に女

の学者さんが発表したもので、宇宙空間での活動を想定……開発されたマルチフォーム・スーツ……女の人しか使えない……だって」

「ほう、そんなものがあるのか……しかし、この世界は……」

昨日寝る前に、新聞等を読みこの世界の事がある程度知った。この世界にはMSおろか、ザフト、連合軍すら存在しない。コーディネイターという存在すらも。

(この世界は俺の居た世界とは違う……ということか?)

「スウェン……?」

(ありえない。と良いたいが、現実にこうして俺はここに居る……)

「……」

リズはスウェンの服の袖をクイツと掴む。

「どうした? リズ」

「怖い顔……してた。だいじょう……ぶ?」

「ああ、大丈夫だ」

「良かった……」

笑みを浮かべるリズ。スウェンはその笑顔を見て、自然に微笑んでしまう。

「スウェン、こっちきて……」

「ん？」

袖を掴んだまま、リズは何処かへとスウェンを連れて行く。

／※／

「順調ですね、ロイ博士」

「ああ」

ロイとその助手はコンソールをうちながら言う。

「このシステムが完成すれば、どんな場所、どんな状況でも対応できるISを作る事が出来る」

「これが完成すれば……ロイ博士とネレイス博士の成果、出ることを祈りますよ」

「ありがとう、佐藤君。さあ、夢まではまだ遠いが、頑張るとしよう！」

「はい！」

コンソールのモニターに投影され、格納庫に佇んでいる一機が存在。コンソールにはこう表示されていた。

『Striker Pack System』

第三話『星の少女と天災』

「此処は……」

スウェンがリズに連れて来られたのは、少し広めの書庫だ。動物の本や植物の本、様々な種類の本が置いてある。

「ここ……一番落ち着く」

そう言いリズは近くにあった椅子に座り、机に上がっている本を手にする。

「私、身体弱い……から、お外に出られないの。だから……何時も本読んでるの」

「そうなのか」

スウェンはおもむろに近くにあった本を取る。その本は星座について書かれていた。

「星が好きなのか？」

「うん……たくさんあるキレイなお星様が、線で結ぶと……一つの形になるのが……面白くて」

「……俺も子供の頃、よく星を見ていた」

「スウェンも……お星様好き……なの？」

「ああ」

扉に背を預け、腕を組み

「よく外に出ては、夜遅くまで星を眺めていた。帰ったら両親に何時も心配されて怒られてたがな」

「……羨ましい……な。私、お家の窓からしか……お星様見たときがない……から」

するとスウェンはリズに近づき、頭を撫でる。

「リズ、もしお前の身体が良くなったら、一緒に星を見に行こう。空一面が星で覆い尽くされている場所へ」

「本当……に？」

スウエンは頷く。リズは椅子から降り、スウエンに抱きつく。

「約束……だよ？ お兄ちゃん」

「ああ……？」

一瞬気になる単語が出てきたため、スウエンはリズの方を向き

「今、俺の事を兄と……」

「うん……♪ スウエン、今日からリズのお兄……ちゃん。ダメ？」

「……いや。それで構わない」

「……♪」

リズは満面の笑みになり、スウエンの手を掴み横に立つ。

「お腹すいた……から、ごはんは……しよう？」

「その案には賛成だ。行くでしょう」

食卓へとやって来たスウェンとリズ。そこにはスウェンの顔を引きつらせるほどの珍妙なものが居た。

「何だ……これは？」

スウェンの視線の先にあるのは、もぞもぞと動く人の大きさほどのウサギ？のなにか。それがスウェンに気づくとぴょんと飛び上がり、口が大きく開かれ、中から頭にウサギの耳が装着されたカチューシヤをつけている女性が出てきた。

「はぁ〜い♪ こんにちは〜そして初めまして〜！ 天才ぶりてい篠ノ之 東さんだよ〜！」

「……」

「……………」

静まりかえる空間。リズは隠れるようにスウエンの後ろに行き、スウエンは表情を強張らせ束と名乗る女性を見ていた。

「リズ、この女性は……………」

「えっと……………この……………人は、ISを作った……………」

「そうそう！ この世界のどんなものより、すんごく強いパワー・スーツ、インフィニット・ストラトスを作ったのは、この束さんなのだ！」

胸を張って誇らしげに言う束。スウエンは視線だけリズに送り

「リズ、少し向こうへ行っていてくれ」

「う、うん……………」

コクリと頷き、リズはその場を離れた。スウエンは束に視線を戻し

「それで？ 篠ノ之 東、あんたは一体何の用でここに？」

「ん〜とそれはね、君の事を見に来たの！」

「なに……？」

「君の事を調べさせてもらったよ！ スウエン・カル・バヤン。解かっていることはそれだけで、ドイツおろか、世界に君の国籍は存在しない。東さんの超天才的技術で調べても、君の事は名前以外何一つわからなかった！ 東さんはそんな詳細不明すぎるスー君に興味が湧いたのだよ！！！」

「す、スー君……？」

東から妙な愛称を付けられたスウエンは思わず呆気にとられた表情をする。

「おっと！ 東さんは忙しいからそろそろ行くね！ そうだ！ スー君に面白い事教えてあげるね！ 近いうちに世界のバランスが変わっちゃうよ！ どう変わるかはお楽しみあれ！ それじゃああい♪」

そう言い、何処かへと走っていった東。まるで嵐が過ぎ去った後、スウエンは面食らった表情をしたままであった。

「何だったんだ……一体」

するとリズがやってきて

「お腹……へったよお……お兄ちゃん」

「ああ、そうだな。食事を取るとしよう……」

スウェンは束の言葉を思い出す。

『近いうちに世界のバランスが変わっちゃうよ！ どう変わるかは
お楽しみあれ！』

この世界は自分の居た世界よりも戦争が世界に広がっているわけでもなく平和だ。その平和な世界のバランスが変わる。一体なにが起ころうというのか、スウェンはそれをずっと考えていた。

——そして数週間後、とある事件が起き世界のバランスは……本当に変わるのであった。

第四話『S P P O I』

「本当に良いのか？ 開発最中のISを赤の他人の俺に見せるなんて」

車の中でロイが運転席、スウェンは助手席にいる。スウェンはロイに連れられて、彼の研究所へ向かっているとところだ。因みにリズはネレイスと一緒に家で留守番だ。

「ああ、別に極秘ってわけの物じゃないし、スウェンも前見たいって言ってたからね。研究も少しだけど終わりに近づいたし、余裕も出来たから。それに……」

「？」

「君はもう赤の他人じゃない。僕達の家族だよ」

「……」

スウェンは無言で頬杖をつき、窓の外を見ていた。心なしか僅かに微笑みを浮かべていた。

「しかし、この世は変わりつつあるね。あの事件のせいで」

「……ああ」

数週間前、とある事件が発生し世界の軍事に大きな影響を与えた。

『白騎士事件』

日本を射程距離内とするミサイルの配備された軍事基地すべてのコンピュータが一齐にハッキングされ、2341発以上のミサイルが日本へ向けて発射された。しかし、その危機に現れたのが白銀のIS「白騎士」だ。

白騎士はミサイルを無力化し、その後に捕獲もしくは撃破しようと各国から投入された戦闘機207機、巡洋艦7隻、空母5隻、監視衛星8基を、一人の人命も奪うことなく白騎士は破壊。一夜でISは「究極の機動兵器」として名が広まった。それにともない、ISは「宇宙進出」の為ではなく「兵器」として認識されるようになった。

束が言ったとおり、世界のバランスは変化していていたのだ。

「僕とネレイスの研究も、全部兵器関連へ移行されたよ。そういえばこの前、ネレイスと一緒に特殊部隊からISのメンテナンスを頼

まれてね、いや／＼部隊の皆からの視線が怖かったよ」

「とてもそうには思えないんだがな……」

／※／

「お待ちしておりましたよ、ロイ博士」

2人が研究所へ到着し施設内へ入ると、眼鏡をつけた男性。『笹村隆二』が出迎えた。

「例の部隊の責任者がロイ博士に会いに来てますよ。今応接室にいらっしゃいます」

「そうか、待たせるのは悪いからね。それじゃ、スウェン。彼に施設を案内してもらってね」

「わかった」

ロイはそのまま、応接室へと向かった。

「君がスウェン君か。ロイ博士から話は聞いてるよ。それじゃ、早速ロイ博士の研究室へ行こうか」

「よろしくお願いします」

そうして、スウェンは隆二に連れられ、ロイの研究室へと赴いた。少し大きな扉の前に立つと、隆二は扉のロックを外し、2人は中へと入る。そこは格納庫のような場所で、様々な機材が置いてあり、下手に触るとどうなるか解かったものではない状況があちらこちらに広がっている。

2人は明かりが灯っていないのか、真っ暗な場所の前に立つ。

「これがロイ博士とネレイス博士が今開発しているISだよ」

そう言い隆二はスイッチを押し明かりが灯る。スウェンは眩しさで思わず手で目を覆う。徐々に目が慣れ、前を見ると彼は驚愕した。

「これは……!?!」

頭部には白と黄色の四本のアンテナに、黄色のツインアイ。装甲は基本白を基調としており、胴体のみ青い。佇むそのISの姿。スウェンはそれを知っている。

「ス、ストライク……?」

そう、G A T - X 1 0 5 『ストライクガンダム』が彼の前に佇んでいたのだ。彼は困惑する、何故これが此処にあるのかと。

「博士達が開発した、どんな状況にも対応できるように、何時でも装備を換装出来る『ストライカーシステム』っていうシステムの対応機、私達はS P P O 1と呼んでいるよ」

「……」

「スウェン君?」

スウェンはゆっくりと、まるで呼ばれているようにそれに近づく。

(何だこの感覚は……)

「ちょ！ スウェン君！ 勝手に触っちゃ……」

その時、スウェンがそれに触れた瞬間、光り輝いた。

「な、何が起こったんだい!？」

「ロイ博士!!」

隆二が振り向くとロイと、その隣に眼帯をつけた軍服の女性が居た。

「S P P O 1 が起動しているのか……な、何故!？」

「そんな馬鹿な！ ISは女性しか起動できないはず！」

スウェンはS P P O 1から離れ、光りは消える。スウェンは隆二達の下へ行く。

「スウェン……君は一体何を……？」

「いや……あれにただ触れたただけだ」

「私達が触れても起動しなかったのに……何故？」

「失礼」

ロイの隣に居た女性は一步前が出る。

「私はドイツ軍I S 配備特殊部隊"シュヴァルツェ・ハーゼ"の責任者『シュハイク・オーデイス』大佐だ。少年、君の名は？」

「スウェン。スウェン・カル・バヤンだ」

「ほう……スウェンか、良い目をしている……戦争を知ってる目だ」

「!?!？」

「君の事は覚えておこう……」

鋭い眼光でスウエンを見た後、シュハイクはロイの方を向き

「Drロイ、面白い人物に会わせてもらった。感謝している」

「え？ は、はぁ……」

「これにて失礼する」

シュハイクは敬礼し、出口へと歩んでいった。

「シュヴァルツェ・ハーゼ……か」

「ス、スウエン、君の身体を診査させてもらっても構わないかな？」

「……ああ」

澁々了承したスウエンであった。

第五話『ストライク』

仄暗い何処かの部屋にて、日本人顔負けの艶やかな髪を持つ女性、シュハイクは自分の目の前にモニター出し何かを見ている。

「スウェン・カル・バヤンか……」

モニターに映されているのはスウェンであり、シュハイクは笑みを浮かべながらその情報を見ている。

「失礼します」

ノックの後、一人の女性が部屋に入室し、シュハイクの前に立つと敬礼をする。その女性もシュハイクと同じく眼帯をしている。

「クラリッサか。どうした？」

「訓練終了しました。30分の休憩の後、再開します」

「ご苦労。皆には無理せず頑張ってくれと伝えてくれ」

「はっ！ ……ところで、そのモニターの男は前言っていた……」

「ん？ ああ、彼はスウェン・カル・バヤン。グレーデント夫妻の所に住んでいる少年で、そして……」

「3週間前にD rロイの研究所でI Sを起動させた……」

「そうだ、実に興味深いものだ……」

するとクラリッサはクスツと笑う。

「？ どうかしたか？」

「いえ、隊長がその表情かおをしている時は、何か企んでいる時ですか
らね」

むう、とシュハイクは頬を触り。

「そんなに顔にでるか、考え物だな……」

「それで？ 何をお考えで？」

くると回転椅子を回し、クラリッサに背を向ける。

「彼はまだ、メディア等に取り上げられていないな」

「はい、政府もいきなり現れた、男性でありながらもISを起動させる存在に驚愕しながらも、メディアを抑えて彼の事は公にしている模様ですね」

「ISが「究極の機動兵器」として完全に認識されたこの世界。女尊男卑の世の中が変わっていくこの現状、彼のような存在が現れらうろたえるのも頷ける。政府も時を待つのだろうか、何れ現れる二人目の存在に」

「現れるでしょうか……」

「さあな、そもそもISが何故女性にしか起動できないのか解からないからな。こればかりは私には、な」

「はぁ……で、お考えになっているのはそれだけですか？」

「いやまだある！」

背を向けていたシュハイクは急に180度方向を変え

「彼、スウエン・カル・バヤンの目を見たんだ。あれは普通の人間の目ではなかった、戦いを……戦争を知っている目だ。あの幼い容姿からは考えられない、漂う軍人の気配。私は彼に非常に興味があったんだよ」

「そこまで隊長を言わせるとは……まさか隊長、彼を？」

「ああ！」

シュハイクは椅子から腰を離し、勢い良く立ち上がる。

「彼のような存在は是非、私の手の元において置きたい！ それに彼はISを使える、その才能を無駄にしたくは無い！ 私はスカウトするぞ、我が「シュヴァルツェ・ハーゼ」へ！」

「……私は構いませんが、上層部と他の隊員達が何と言うか」

「そこは私から何とかしておこう！ よし、そうと決まれば！！！」

／※／

「という訳だ！ 是非来てくれないか？」

「待て、何がそういう訳だ」

グレーデュント夫妻宅にて、シュハイクが半ば押しかけに近い形でやってきた。スウェンは呆れた表情をし、ロイとネレイスは困惑する。

「私は君という存在が部隊に欲しい！ 君が居れば部隊をよりよく出来る！ 年齢の方も問題ないはずだ、君より年下の者も居る。Drロイ、Drネレイス。彼を私に預けてくれないだろうか！？」

頭を深々と下げるシュハイク。

「……私は構わないけど」

「僕もだ。スウェンをしっかりとした環境で過ごさせてくれるのであれば何も言うことはないけど……」

「それには及ばない。我が部隊なら健康、食事などしっかり彼には

とらせることが出来る」

「そうか……スウェンはどうなんだい？」

「……俺は」

スウェンは俯いたまま黙り込む。

「スウェン、君はこれから先やりたいこととか有るのかい？」

「いや……」

「それじゃあ、見つければ良いじゃないか」

「？」

頭を上げ、ロイの方を向く。

「せっかくの機会だ、部隊に入隊して君のやりたいことをそこで見つければいい。君なら、必ず見つけられると信じているよ」

「……」

再び黙り込むスウェンだが、直ぐに

「……わかった。申し出、受けよう」

「本当か！？ 二言は無いな！？」

スウェンは肯定の意を見せるため、縦に頷く。シュハイクは立ち上がり

「では、私は戻って君の手続きを済ませよう！ 明日の午前9時迎えに来る！ それでは！」

そう言い残し、シュハイクは居間を出て行き、グレーデュント宅を後にした。

「しかし、あの部隊にスカウトされるなんて……凄いな」

「そうなのか？」

「うん。このドイツ国内にある10機のISのうち、3機を保有していて、実質「最強の部隊」とも言われているんだよ」

「ほう……」

「けど……私達はああ言ったけど、スウェン君は後悔してない？」

ネレイスの言葉にスウェンはああ、と頷き

「いつまでも義父さん達の世話になる訳にもいかない、それに……さっきの言葉が無ければ俺は黙したままだった。感謝している」

「スウェン……ん？ 今義父さんって……」

「ああ……前言ってくれただろう？俺はもう赤の他人じゃない、家族だって」

「スウェン君……」

すると、リズが居間にやってきて、スウェンの元に駆け寄る。

「お兄……ちゃん、軍人さんに……なっちゃうの？」

「さっきの話、聞いてたのか？」

「……………うん」

スウェンはリズと同じ目線までしゃがみ、頭を優しく撫でる。

「大丈夫だ、連絡も出来るし、暇を見つけては会いに来る。心配するところは無い」

「本当……………に？」

「ああ。約束だ」

「……………うん、約……………束♪」

満面の笑みを浮かべるリズ。スウェンは手を離し立ち上がり

「さて、準備をしなければならぬ……………」

「そうだね、それじゃ始めようか」

そうして、スウェンの明日に向けての準備が始まった……………。そんな中、ロイは何処かへと姿を消しており、ネレイスがぶんぶんと怒っ

ていた。

「これで終わりか……しかし、軍か。あのシュハイクという女性を見る限り、ファントムペインのような場所ではないというのは明らかだな……」

ふと昔の事を思い出す。彼が過去に居た部隊、ファントムペインは非人道な行為を、虐殺など平気でしていた。上に立つものが悪意のある考えだと、その部隊は廃れていく。だが、シュハイクの目を見た。あれはそんな非人道なことをしている人間の目ではないとスウエンは気づいた。

「スウエン、少しいいかい？」

「？」

ロイが準備を終えたスウエンの元にやってきた。何故か息切れをしている。

「義母さんが怒っていたぞ？ 義父さんが居ないって」

「ああ、訳を話したら収まってくれたよ」

「訳？」

「これだ」

ポケットから美しい光沢を見せる黒い腕輪を取り出す。

「これは？」

「S P P O 1だよ」

「!？」

スウエンは驚いた表情を見せる。スウエンは前にISの待機状態は、アクセサリーのようなものになると教えられたことがあるのを思い出した。

「ストライカーシステムも完成し、調整も完了した。部隊へ行く君にこれを託そうと思ってね」

「い、いいのか？これは義父さんと義母さんの研究成果で……」

「僕達の研究成果は誰かに使われなければ意味が無い。君ならS P P O 1を、ストライカーシステムの真価を發揮することが出来る
と僕達は思ったんだ」

ロイはスウェンの手を取り、S P P O 1を持たせる。

「これでこれは君の物だ。どのような使い方をしても構わない、存
分に使ってくれ」

「……感謝する」

「良いんだ、僕達にはこれぐらいしか出来ないからね。せっかくだ、
S P P O 1なんて堅苦しい名前ではなくて、君が新しい名前を……
良い名つけてあげて欲しい。おっと、手を止めてしまったようだね。
僕はもう寝るよ、おやすみなさい」

「ああ、おやすみなさい」

大きなあくびをしながら、ロイは部屋の扉を閉める。一人残ったス
ウェンは手にもったS P P O 1を見る。

「……ありがとう、義父さん、義母さん。……こいつの名は既に決

まっている」

そしてこう名づけた

『ストライク』と

第六話『シュバルツェ・ハーゼ』

出発の朝。家の玄関先で、スウエンはロイ、ネレイス、リズに出発の挨拶をしている。

「気をつけてね、何かあったら直ぐに連絡するのよ？」

「ああ、わかっている」

「少し寂しくなるな……けど、もう会えないって訳じゃないからね。頑張ってきて来るんだよ」

スウエンは頷き、リズに視線を移す。

「行ってくる。元気だな」

「うん……お兄……ちゃん……も、元気で……ね」

「ああ。行ってきます」

「行ってらっしゃい」

そうして、スウェンは玄関を出ると、外にはシュハイクが車で待機をしていた。そのままスウェンは車の助手席に座る。

「挨拶はきっちり出来たか？」

「……ああ」

「ならいいんだ。さ、行こうか」

アクセルを踏み、車を進めるシュハイク。スウェンは遠ざかるグリデント宅を最後まで見届けていた。

「ん？ その腕輪は？ 昨日付けていなかったが……」

「義父さんと義母さんの贈り物だ」

「成る程、それが例の……ならば君は専用機持ち、というわけだな。おっと、これは伝えねばな。君は特別境遇ということで、上層部から少尉の階級を与えられた。それと私の補佐を、隊長補佐をしてもらおう」

「貴女は隊長も？」

「ああ、私は隊長であり、責任者をしている。君には訓練に励みつ

つ、私の補佐をしてくれればいい。期待しているぞ？」

「……了解」

「そろそろ着く。降りる準備をしろ」

／※／

車を降りたスウェンとシュハイク。スウェンはまず施設などを見、随分と立派だなと呟く。シュハイクはスウェンの前に立ち

「どうだ？ 立派な施設が並んでいるだろう？」

「ああ」

「フフッ、薄い反応だな。それでは君がこれから住むことになる宿舎へ案内しよう。軍服もそこにある、ついて来い」

シュハイクの言うとおりについていくスウェン。視線だけに移しな

がら辺りの状況を見渡す。

（「最強の部隊」と呼ばれる位だ、これほどの施設があっても不思議ではないか……）

「ど……だろ？……ない……」

（しかし、ISが使えるからという理由で上層部が動くとはな……正直なところ、ISの存在認識を改めなければならないな）

「しかもだな、あそこの施設は隊員達の食堂……って聞いているのか？」

「……考えことをしていた」

「全く、困るぞ。そんなボーっとしているようでは。それと、君はこの敷地内に入った時点で隊員だ。隊長に対しての言葉遣いを直せ」

「了解しました、隊長」

「お、随分と順応するのが早いじゃないか。ほら、ついたぞ」

大きな建物がスウェンの前にそびえ立つ。スウェンは大きいなど一言。シュハイクがまた移動を開始したので、スウェンはそれについていく。

「君の部屋はここだ。軍服は中にある、着替えてきたまえ」

スウエンはその言葉を聞き、部屋の中へと入る。

「ほう、広さもそこまで狭くはないのか。軍人に与えられる部屋にしては良いものだ」

ベッドの上にある軍服を目にしそれに手をかける。そして直ぐに着替え終わると鏡の前に立つ。

「軍服という物ををまた着ることになるとはな……にしても」

スウエンは軍服の色に注目する。「黒^{シュバルツェ}」という名のつくだけあって、軍服は黒い。

「……悪い色ではないな」

それなりに気に入ったスウエンであった。着替えた私服をロッカー

の中に入れ、部屋を出る。外に居たシュハイクはスウエンの軍服姿を見て「おお」と声を出す。

「なかなか様になっているじゃないか。似合っているぞ？」

「恐縮です。隊長、一ついいですか？」

「言ってみろ」

「何故服のサイズが合っているのか質問しても？」

「私を舐めるなよ？」

「いえ、答えになっていないのですが」

「細かいことはいい、早速君と隊員の顔合わせをしましょう」

「了解」

／※／

「本日より「シュヴァルツェ・ハーゼ」に入隊したスウエン・カル・バヤン少尉であります」

スウエンは視界の先に居る「シュヴァルツェ・ハーゼ」の隊員達に敬礼をしつつ自己紹介をする。隊員達は表情を一切崩さず、スウエンを見ている。

「彼はこれから共に訓練をしていく仲間だ。皆、よろしく頼むぞ」

「「はっ！」「」

声を合わせて応答する隊員。スウエンは隊員達に共通する点を見つける。

眼帯だ

シュハイクもそうだったが、隊員全員は左目に黒い眼帯を着用している。シュハイクの隣居る副隊長であろう女性もだ。何か眼帯には象徴的なモノでもあるのであろう、と推測する。すると、一人の少女が手を上げる。

「ん？どうした？」

隊員達の列が割れ、その挙手をしている少女の姿がはっきり見えるようになる。その少女の姿を見て、スウェンは一瞬表情を変える。何故なら、その少女は

（背の高さや目の色は違うが……まるでリズそのものだ）

そう、その少女の外見は多少違えど、リズの生き写しだからだ。

「君は……確か『ラウラ・ボーデヴィツヒ』だったな」

「はい、隊長。私に発言権を頂けませんか？」

「許可しよう。何だ？」

「何故男などという下等種がこの「シユヴァルツェ・ハーゼ」へ？話を伺えば、上層部も動いたとか。私には理解できません」

ラウラの言葉に、シュハイクは顎に手を添える。彼女の隣に居るクラリッサは横目でスウェンに視線を送る。

「成る程、君はそう考えているのか。恐らくだが、他の者もその考えは少なからずある様に見えるな。上層部が動いた理由はごく簡単、彼がISを起動できるからだ」

「なっ!?!」

「まさか……!?!」

「そんなことが……」

ラウラを筆頭に隊員達はざわめく。

「それだけではない、私は彼から特別なモノを感じた。だから私は彼をスカウトしたのだ」

「し、しかし……」

「ならば、彼の实力を見れば問題ないな？ クラリツサ！」

「はっ」

「彼とISで模擬戦をしろ」

「スウェン少尉と……ですか？」

「ああ。お前に勝てなくても、彼の實力をある程度見せれば皆も納得するだろう」

「……了解しました。ところで、スウェン少尉はISの使い方は？」

「知りません」

「なっ!？」

即答するスウェンにクラリッサは思わず声を漏らす。

「模擬戦は今から三時間後に行く。彼には私からISの使い方を叩き込む、良いな？ スウェン少尉」

「了解」

「それまで皆は訓練を5分後に再開だ。それでは準備にかかれ！」

「「はっ!」「」

敬礼し、隊員達は訓練の準備へと取り掛かった。クラリッサはシェイクの方を向き

「私はツヴァイクの調整をしてきます。それでは」

そういい残して、敬礼の後歩き去ってくクラリッサ。「さて」とシユハイクは笑みを浮かべる。

「クラリッサは強いぞ？ IS初操縦の君には分が悪すぎるか？ まあ、少しは緊張しているだろう？」

「いえ」

「そうか、フフフ……これから君には三時間かけてISの基本操縦から何まで叩き込む。準備はいいな？」

「了解」

スウェンは左腕に付けられた、待機状態のストライクを見る。

（やるからには勝つ。お前と俺の実力を見せよう）

そのとき、ストライクは応えるかのように一瞬光を放っていた。

第七話『静かなる衝撃《ストライク》』

「スウエン、ストライクをもう一度展開しろ」

「了解……来い、ストライク」

スウエンは待機状態のストライクの名を呼び念を送る。スウエンの体は一瞬にして装甲に包まれ、頭部にフェイスを装着した。手足の動作を確認するために、スウエンは何度も手を握ったり開いたりしている。

「……」

シュハイクは啞然と脱帽をしていた。その理由はスウエンの成長ぶりだ。

彼はたった一時間でISの展開を1秒から0・6秒まで抑え、部分展開も容易にこなした。そして残りの時間でISの基本操作もすぐさま覚えた。

シュハイクはスウエンの事を元から過大評価していたが、まさかここまで早くもISの操作を覚えるとは思わなかった。スウエンの成長スピードはある意味異常だ、彼は何かしらの処置等を受けていた

のでは？と疑うほどであった。

「全く、お前には驚かされる。さて、残り5分で模擬戦を始めるが……ストライクは形態移行フォームシフトしていないようだな」

「そのようですね」

ISのコアは、操縦者の人体の情報や稼働経験から適性化を行い、機体の形状および装備を操縦者の特性に合わせて変化する。三次移行までであるが、ストライクは一次移行もしていない。

「模擬戦の勝敗は簡単だ。どちらかのシールドエネルギーが0になった時点で終了。スウェン、ストライクの武装面はどうだ？」

「問題ありません、戦闘はできます」

「そうか……そろそろ時間だ。武運を祈る、行って来い！」

「了解」

スウェンはストライクを起動したまま、カタパルトに足を固定する。

(何故か懐かしいな、この感じ……)

不思議な懐かしさを感じ、スウエンは一呼吸入れる。

「スウエン・カル・バヤン、ストライク出る」

カタパルトは火花を散らしながら押し出され、スウエンは模擬戦場へと出る。バーニアを吹かしながら、地面へと足をつけ、前方を見る。手足に黒い装甲が装備され、背部には一対のユニットが浮遊しており、こちらを視線に捕らえているクラリッサが居た。

「あれがあああの男のIS……」

なんて姿だ。ラウラは真っ先にそう呟いた。武装は右腕に持たれたライフルとシールドだけ、背部にはユニットの類すらない。まさに「素体」という言葉が相応しい。

(あんなもので副隊長を？ ああ男がどれほどの技術を持っているかは知らないが、負けを見るのが必然だ。精々あがく姿を見せてみ

ろ)

スウエンの姿を反らさずにラウラは見ていた。

「それがスウエン少尉のIS、しかもフルスキンか……」

「はい、こいつはストライク……義父と義母から託されたISです」

「そうか……自己紹介がまだだったな。私は「シュバルツェ・ハーゼ」副隊長『クラリツサ・ハルフォーフ』、そしてこのISは私の愛機「シュヴァルツェア・ツヴァイク」だ。よろしく頼むぞ」

「俺はもう言ったので……」

「クスッ……そうだな、それでは始めるとしよう！」

クラリツサは右腕に装備していたアサルトライフルの銃口をスウエンに向ける。そして薬莢が排出され、弾丸が撃たれる。スウエンは左方に飛び、銃弾の列を避けるが、クラリツサがそれを予想していないわけではなかった。

直ぐに銃口を再び向けるが、先に動いたのはスウェンだった。手にしていたライフルを構え、トリガーが引かれると緑色の閃光が放たれる。

「くっ！ビーム兵器か！」

予想だにしない光学兵器に一瞬驚きを見せたものの、クラリッサは直ぐに回避行動に移る。

（あの武装……近接戦闘は不向きか？ かまをかけて見るか）

アサルトライフルを振りかざし、銃身の下部から腕の長さはあるブレードが展開された。

「バヨネットか！」

「行くぞ！」

スウェン目掛け、猛スピードで突っ込んでくるクラリッサ。スウェンはビームライフルで応戦するが、クラリッサに一切かすりともし

ない。目と鼻の先にクラリッサが迫った、スウエンはビームライフルを投げ捨て、腰部の装甲を展開させ、そこからナイフニアーマーシユナイダーを取り出し、振り下ろされたバヨネットを防ぐ。

「まさかそんな所に武装があるとはな！　だがその程度でツヴァイクを抑えられるかな」

スウエンの体はクラリッサに徐々に圧されつつある。スウエンは反対側の腰部からもう一本アーマーシユナイダーを取り出し

「ふっ！」

クラリッサに勢いをつけ投擲するが、上体を反らしそれをかわす。そして左腕にプラズマブレードを発生させ

「はああ！！」

「ぐっ！！」

X字に切り裂かれ後、蹴り飛ばされるスウエン。何とか体勢を立て直し地面に足を接着させ、シールドゲージ残量を見る。今の攻撃を

受け、約半分ほど減少した。次にまた受ければ後はない。スウエンは焦りにかられた。

（ストライク……まだか、まだ俺を認めていないのか？）

「どうした、その様か？ スウエン少尉。まあ、形態移行していないそのISで、ツヴァイクと少しは戦えた事は評価しよう。だが次で……」

そう言い、再びスウエンへと迫る。今のストライクの機動力では、あれをかわす事は不可能に近い。「これで終わりか……」とスウエンは呟く。その時、スウエンの目の前に文字が現れる。

「終わりだあ！！！」

振り下ろされるプラズマブレード。それは今にもスウエンの体を切り裂こうとした。だが

「なっ!？」

驚愕の声を上げるクラリッサ。何故なら、振り下ろしたプラズマブ

レードが防がれていたからだ。それは先程のアーマーシユナイダーではなく、桃色に煌くビームの刀身「ビームサーベル」だった。

「……「エールストライカー」装備完了」

スウエンの背部には大型のパックが装備され、それは赤い配色に、大型の主翼と4基のスラスターが搭載されていた。ストライクの形態移行「ストライカーシステム」の起動が完了した。

「武装が増えただけで！」

クラリツサはスウエンを押し切ろうとしたが、エールストライカーのスラスターが起動し、逆に圧され始めた。

「何!?!」

そのままクラリツサを押し飛ばし、スウエンは空中へ飛ぶ。それに伴いクラリツサも飛び、プラズマブレードによる一撃を与えようとしたが、ビームサーベルにそれを阻まれる。互いに一步も譲らない鏖闘り合いが始まる。

「なるほど、"ストライカーシステム"。たかがパッカー一つ付いたぐらいで思っていたが、まさかここまで性能が跳ね上がるとはな」

「自分自身も驚いています」

「とてもそうには思えないがなっ!!」

「くっ!!」

勢いが付けられたプラズマブレードに、スウェンは地面へ叩き落される。

「ッ……残り30%……?」

「これでどうだ!!」

その言葉と共に背部にあったユニットが前面へ出される。それは大型の砲台のようなもので、スウェンは危険を感じ回避しようとしたが

「遅い!!」

銃口に光が灯り、瞬時にしてスウェンの居た場所に大きな爆煙が巻き起こる。クラリッサは一瞬勝利を確信したが、煙の中から5本のビームが現れ、的確にクラリッサに直撃させた。

「な……ま、まさか……!?!?」

「はぁぁぁぁぁ!?!?!?!」

後方より、ビームサーベルを両手に構えたスウェンが高速でクラリッサの眼前へ来ていた。

「しまっ——」

一閃。

先程のビームライフルの直撃とあわせ、ビームサーベルによるクリーンヒットによりツヴァイクのシールドエネルギーは0へとなった。場は静寂に包まれる。

「勝者はスウェン・カル・バヤン少尉だ！」

その静寂を破った、シュハイクの声が模擬戦場に響き渡った。

第八話『ラウラ・ボーデヴィツヒ』

あの模擬戦から一夜明け、現在隊長室にてスウェン、クラリッサがシユハイクの前に立っている。

「二人とも昨日の模擬戦はご苦労だった。中々良い戦いだったぞ？」

「ありがとうございます」

「スウェンはこれからも精進してくれ。以上、下がりました」

「失礼します」

スウェンは一礼し、部屋を出て行く。

「しかしクラリッサ、お前が負けるとはな。手加減していたか？」

「最初は……スウェン少尉のISが形態移行してから、私は全力で戦ったのですが……彼の方が一枚上手だったようです」

「ふむう……あの若さにして……か。やはりあの少年を引き入れて正解だった」

「……隊長、にやけ過ぎです」

「おっと、いかんいかん。今回の模擬戦で、部隊の皆はスウェンへの認識を改めることになったろうな」

「はい。隊長の目は節穴ではなかった、という事ですね」

「……オイ、隊長に何て物言いだ。私は人を見る目だけは誰にも負けないぞ？」

「ええ、そうですね。しかし、本当に彼は何者なんでしょう？」

「さあな。だが解る事は一つ、彼はこの黒ウサギ部隊に何かしらの影響を与えることは確実だ。実に楽しみだよ」

「良いほうに転ぶか、悪いほうに転ぶか、ですね。それでは私は持ち場へ戻ります」

「ああ、引き続き頑張ってくれ」

／※／

「……」

隊舎を歩いていると、隊員の視線がスウェンに刺さる。これがロイの言っていた怖い視線？　なのだろうか。彼にとってこの視線は大事なことがない。すると、スウェンの目の前に一人の少女が仁王立ちしていた。

「スウェン・カル・バヤン少尉」

「確か……」

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ。ラウラで構わん」

「俺もスウェンで構わない」

「ならばスウェン少尉、これから私に付き合え」

「？」



「付き合えとはこの事か」

スウェンとラウラが来たのは隊員の食堂だ。二人は机を挟んで座り、目の前にカレーを置いている。時間も時間であり、これは昼食になるだろう。

「スウェン少尉。私は昨日、お前に失礼な言動を言ってしまった。すまなかった」

頭を下げ、謝罪の言葉を述べるラウラ。スウェンは少し驚きながらも

「いや、絶対的な兵器であるISは女性にしか使えない、女性が尊重されるの当然だ。だから男である俺が、あのようなことも言われなくても当然……俺は気にしてはいない」

「そうか……お前は器が大きいのだな」

「そうでもない」

「……」

スウェンは会話が途切れると、直ぐに食事を始める。何口か食べ、ラウラが何か言いたそうな表情をしていたため、スウェンは手を止めるとラウラはここぞと言わんばかりに

「スウェン少尉、お前に折り入って頼みがある」

「……内容によるな」

「その……私に戦い方を教えてほしい！」

「断る」

「んなっ!？」

あまりの早さで即答されたため、ラウラは面喰らった表情をする。

「な、何故!？」

「俺は他人に戦いを方を教えることは出来ない……というより、俺は他人に教えられるレベルではない」

「ぐ、ぬぬぬ……そこを何とかしてくれないか！」

「無理だな」

そう言い、スウェンは食器を持って立ち上がる。

「い、いつの間に!？」

「軍での食事は迅速に、だ」

スウェンはそう言い残し、ラウラを置いて食器を置きに行った。

それからと言うもの

「スウェン少尉！」

「断る」

訓練が終えてから、直ぐにスウエンの元に来たり。

「頼む！」

「他を当たれ」

早朝、隊舎のスウエンの部屋の前に待っていたり。

「この通りだ！」

「くどいと言っている」

ここ三週間に及び、スウエンはラウラに言い寄られていた。

「随分とラウラ・ボーデヴィツヒに気に入られているようだな。ここ三週間ずっと一緒に居るように見えるが」

「はい……いくら断っても……」

やや疲れ気味にシュハイクに言うスウェン。シュハイクはニヤニヤしながらスウェンの方を向き

「この際だ、もう請け負ったらどうだ？」

「そうは言ってもですね……」

シュハイクは「はぁ…」と軽くため息を吐き、天井を見つめながら。

「……ラウラはIS登場前まで、優秀な成績を収めてきた。それこそ、部隊の中でもトップだった」

「IS登場前までは？」

「ああ、ISが登場してから、私達はISとの適合性向上のために行われた「ヴォーダン・オージェ」と呼ばれる疑似ハイパーセンサーを瞳に移植された。だが、あまりにも性能が良すぎるために普段はこうして眼帯で抑えているんだ」

「成る程、だから……」

「そして、ラウラの左目に移植したが、ヴォーダン・オージェは不適合。よって制御不能となった。今は標準以下の成績しか収めてい

ない」

「……」

「隊の皆はラウラの事を出来損ないと呼んでいる。私はどうにかしたかった。だが、私の言葉ではラウラを少ししか立ち直らせることしか出来なかった。ラウラには誰かが付いてやらないといけない。私は立场上それは厳しいんだよ。ラウラがこうして頼み込んでいるのも、スウエン。お前の強さに惚れ込んだのだろう」

「はあ……それで？ 俺に任せようという魂胆ですか？」

「……すまない、ラウラを立派な黒ウサギ隊の隊員にしたいんだ。私からも頼む！」

シュハイクはスウエンに頭を下げる。たった一人の隊員の為にここまでするシュハイクに、スウエンは感服し

「……頭を上げてください。先程の話を聞いてしまったら、断るのも断れません」

「！？ ということは！」

「ラウラの事は任せてください、俺がどこまでやれるかわかりませんが」

「ありがとう……スウェン」

「いえ、やれるところまではやりますよ。ラウラが途中で挫折しなければ良いんですが……」

／※／

「それは本当か!？」

「ああ、戦い方を教えてやる。だが俺は手を抜けない、怪我の一つは覚悟してもらおう」

「元よりそのつもりです！ スウェン少尉！」

「流石に俺が訓練中は着きつきりには出来ないが、自由演習の時には問題は無いだろう。早速だが今日から始めていくぞ」

「了解です！ スウェン少尉！」

「……どうした、いきなり」

「い、いえ……スウェン少尉は教えていただく立場なので、これは普通かと」

「そうか……可笑しなやつだ」

「お、可笑しいですか？」

「ああ、可笑しい」

スウェンは僅かに微笑みながら言う。

そうして、ラウラはスウェンとの訓練が始まっていった。

第九話『飛来する悪意』

「ふっふっふ。スーくんのストライクが無事形態移行したね〜」

モニターの明かりだけで灯った暗い部屋の、篠ノ乃 束が笑いながら映像を見る。それはクラリツサとスウエンの模擬戦だ。

「ストライカーシステム。グリュージェント夫妻もかなり興味深いモノを作ってくれたね〜♪ お陰で全く飽きないよ♪ それにしても……」

映像をアップさせ、ストライクのフェイスに包まれたスウエンが拡大する。

「形態移行したストライクの武装を瞬時に理解して攻撃に機転、ましてやあの黒ウサギの副隊長を倒しちゃうなんて流石としか言えないね、スーくん！」

束は手元にある、ウサギのマークが付いたスイッチを撫でて満面の笑みを浮かべ

「さあ、スーくん！ この束さんに君とストライクの力を見せてちようだい！」

／※／

「前に義父さんから聞いたが、ドイツが保有する10機のISの内、3つがこの部隊にあるらしいな」

昼の食事中、唐突にスウエンはラウラにそう質問する。

「はい、副隊長の専用機シュバルツェア・ツヴァイク。そして特殊機能の搭載を目的とした試作段階のISがあります」

「^{ツヴァイク}杖か。残りの一つは？」

「シュハイク隊長の持つ「シュバルツェア・ヴォルケ」です」

「^{ヴォルケ}雲？……あの隊長に合っているな」

「え？」

「あの隊長はなかなか考えが掴めない。まるで雲のようにな」

「は、はあ……」

スウエンは時計を横目で見て

「午後は自由演習だ。模擬戦場は予定では、他の隊員は来ない事になってる」

「つまり貸切のようなものですね」

「ああ。ここ連日で疲れているところ悪いが、頑張ってもらおうぞ」

「元よりそのつもりです」

「いい意気込みだ」

／※／

「ラウラ、これを」

スウェンはラウラに黒いブローチのようなものを手渡す。

「これは……」

「お前が先程言った試作段階のISだ。隊長に借りてきた」

「ええ!？」

「試作のテストを兼ねて、ラウラにISの訓練をしたら快く貸してくれた。『近いうちにテストを行う予定だったから丁度良かった』らしいな」

「は、はぁ……」

「起動の仕方は解るな？」

「はい」

ラウラは目を瞑る。するとラウラは光に包まれ、手足に装甲を纏う。

背部のユニット等はないが、その姿はクラリッサのツヴァイクを思い出させる。

「スウェン少尉出来ました」

「よし」

スウェンもストライクを展開し、エールストライカーを装備する。

「まずは空中移動だな。それが間々ならんと戦闘にもなりはしないからな」

「スウェン少尉はたった一時間で出来たとお聞きしましたが？」

「……ストライクが扱いやすかったただけだ。俺は先に飛ぶ、後から付いて来い」

そう言い、スウェンは宙に浮き、そのまま空中へと飛んでいく。あの程度の高度まで来たら、スウェンは下を確認する。不慣れであるが、ラウラがゆっくりと同じ高度まで来た。

「俺が今から攻撃を行う、お前は避ける。いいな？」

「はい！」

スウエンはラウラから距離を話した後、ビームライフルをラウラに向け

「ッ！！！」

銃口から放たれたビームは、ラウラに直撃した。

「避けろと言った。当たってどうする」

「す、すいません」

「もう一度だ」

「はい！」

そこから30分の時間が経過した。

「ふっ！ はっ！」

連続で撃たれたビームをラウラは危なげながらも避けてみせる。
スウェンは一旦攻撃の手を止め

「先程に比べて動きが良くなった」

「本当ですか！？」

「ああ、だが慢心はするな。慢心は人間の心に隙を作る」

「はい！」

「さて、次は——」

突如、基地全体に警報がなる。するとシュハイクからの開放通信が入る。

『スウェン、ラウラ！』

「隊長、何かあったのですか？」

『廃棄された衛星がこの基地目掛けて落下している！ 今基地のミサイルで迎撃する！』

二人は空を見ると、確かに大気圏の摩擦熱で赤みを帯びている衛星が視認できる。そして、基地のミサイル施設から2発のミサイルが発射、衛星に向かっていく。

「直撃コースか……」

スウェンの宣言どおりミサイルは衛星に直撃し、二人の位置からも聞こえる爆音と、衛星は爆煙に包まれた。

「……!?!」

煙から何かが飛び出してきた。それは衛星の破片だ。破片になった事により、落下速度は急激に上昇する。

『ミサイルの発射台が遅れている、第二波が間に合わん！ 二人ともそこから退避しろ！ そこは落下コースだ！』

「なっ!?!」

スウエンはシュハイクの言葉を聞き、方向を変え

「ラウラ!」

「は、はい!」

二人は全速力でそこから退避しようとしたが、ラウラは焦りでうまく飛行調整が出来ず

「!?! うわああああ!?!」

「ラウラ!?!」

そのまま地面へと落下した。ラウラは無事のようにだが今から退避するとして、スウエンは間に合ったとしてもラウラは間に合わない。破片は今そこにもう迫っている。

「くっ!?!」

スウェンは急ぎラウラの元へ行く。

「スウェン少尉！ あなただけでも退避を！」

「断る！！」

迫り来る破片をスウェンは見る。

（エールの武装ではあれを破壊するのは不可能だ……このままではラウラが……何か方法は……！！？）

その時、エールストライカーが光り輝き、スウェンの前に文字が現れる。

「これは……いける！」

そして、エールストライカーは粒子化し、新たに左方に大型の砲台の搭載されたパックが装備され、右肩に複合兵装ユニット「コンボウエポンポッド」が装備される。

「ランチャーストライカー」換装完了！」

バック本体のアームに接続された砲台、超高インパルス砲「アグニ」を腰へと移動させる。ストライクのツインアイの右側に照準枠が表示され

「……」

カーソルが破片に合わさり、ロック音が鳴り

「撃ち抜く！！」

アグニの砲口から放たれた高出力のビームは一直線に破片へと向かう。

「ぐうっ！！」

あまりの反動で後方へ押されるスウェン。すると、スウェンの体を

ラウラが支える。

「スウェン少尉！ 後ろは任せてください！」

「ああ！ このまま消失させる！！！」

照射されたビームは破片全体を覆いつくし、完全に消滅させてしまった。撃ち切ったスウェンはがくりと腕を下げ

「……何とかなった、か」

「は、はい。そうですね……」

『スウェン！ ラウラ！ 何故命令どおり退避しなかった！』

通信からシュハイクの怒声が響く。

『うまくあれを破壊出来たから良かったものを！ ISを起動してるとはいえ、どうなっていたか解ったものではない！』

「待ってください！ スウェン少尉は私を守ってくれる為に行動を！」

「全ての責任は私にあります！」

「ラウラ……」

『……はあ、全く意外に無茶をするんだな、スウェン、お前は』

「……申し訳ありません」

『本来なら命令違反で懲罰ものだが、二人の無事に免じて取り消しにしてやる。後で私の所へ来い』

「は、はい！」

「了解しました」

そして、スウェンはストライクを待機状態にし、ストライクを見る。

（守りたいと思ったから応えてくれたのか？……ふっ、助かったよ
相棒）

撫でるようにストライクに触れたスウェンであった。

第十話『雲のように』

ドイツ I S 配備特殊部隊「シュヴァルツェ・ハーゼ」の基地へ衛星が落下した事件。何故廃棄済みの衛星が落下したのか、基地のミサイルの発射も発射台の謎の故障により第2波が撃てない状況にあった。原因は不明で、現在解決の糸口すら見えていない状況だ。

そして、あの事件より4年。上層部は事件後のスウェンに対する評価を改め、更なる活躍を期待していた。そして部隊の隊員達も、スウェンのことを認め一人の隊員として尊敬の眼差しで見ている。その一方、部隊で変化した事がある。

ラウラだ。

この4年でラウラはスウェンの訓練により良い成績を出せるようになり、他の隊員達もどんなに辛くても頑張るラウラの姿を見て、誰も彼女の事を「出来損ない」等と呼ぶことは無くなり「努力家」と呼ばれるようになり隊員達と良好な関係を築く事が出来た。

「うむ、良い天気だ」

シュハイクは隊長室にて、窓の外を眺めていた。今日は雲一つ無い青空が広がっていて快晴だ。シュハイクの隣に居るクラリッサも頷き

「はい、前まで雨続きでしたから。ジメジメしているよりは何倍もいいですね」

「全くだ。しかし、スウェンが部隊に来てから4年か……早いものだ」

「この黒ウサギ隊の結束力も固まり、ラウラ少尉の問題も見事解決できましたし……全てはスウェン少尉のお陰ですね。いや、今はスウェン「中尉」でしたか」

「ふふっ、そうだな」

そう、スウェンは先日上層部からの令を受け、中尉へと昇格した。本人は差ほど喜んだそぶりも鼻にかける様な事も見せず、今までどおり過ごしていた。その時シュハイクから「相変わらずだな」と言われていた様だ。

「けど……本当に良いのですか？ シュハイク隊長」

「……ああ、上に立つ者は彼のような人間が相応しい。それに――」

「失礼します」

「来たか」

ノックの音の後に、スウエンが隊長室に入室する。シュハイクの前に立ち敬礼する。

「よく来てくれた。待っていたよ」

「お呼びしたのは隊長では？」

「ふふふ……まあ、そうなのだが。今日来てもらったのは他でもない……」

シュハイクは一息置き

「お前にこの部隊「シュバルツェ・ハーゼ」の隊長に任命するためだ」

「!？」

スウエンの僅かに表情が変わる。スウエンが言葉を放とうとする前にシュハイクが遮る。

「上層部も承認済みだ」スウエン・カル・バヤンならば、隊長という位置に居ればより良い部隊の向上に繋がるだろう」だと」

「そんな事……」

「勿論、クラリッサも同意済みだ」

「そうなのですか？クラリッサ副隊長」

クラリッサの方を向き、そう言うのと肯定を示すように頷く。

「私も上層部と同じ考えだ。スウエン中尉ならば黒ウサギ隊の任せられる。そう思っている」

「そう言う訳だ。実質、私は隊長を辞める訳だが……責任者を辞める訳ではない」

「……」

沈黙を続けるスウェン。シュハイクは立ち上がり、スウェンの元に歩み寄り肩にポンッと手を置き

「私達はお前に期待してるんだ。期待に裏切るわけにはいかないだろう？ 一人の男として」

その言葉にスウェンは軽くため息を吐き

「……わかりました、その席、快くお受けしましょう」

「そうか！ お前ならそう言うと思っていたよ。そうと決まれば、スウェン、私は君に隊長として最後の頼みがある」

「？」

／※／

「……」

「さあ、全力で来い！」

スウェンとシュハイクは、模擬戦場でISを展開して向かい合っている。シュハイクの最後の頼み、それは――

「私と戦ってくれ」

隊長として、隊長の位置に座る者の実力を実際に手を合わせ、しかとこの目に刻みたいというものだった。スウェンは勿論承諾し、今に至るのだ。

シュハイクを見る。ツヴァイクと同型のISだが、各所には白いラインがあり、何処か違う雰囲気を出す。

武装面は差ほど大差ないようにも見えるが、何より目立つのは右肩に担がれた全長にも及ぶ、拳大はある刃が並んだ両刃の巨大なブレイド。

「それが隊長の I S “ シュバルツェア・ヴォルケ ” ですか。実際に見るのは初めてです」

「そうか？……まあ、確かにそうだがな。他の者にはあまり見せた事がないからな」

スウェンはあれは近接型の I S と外見判断をする。ここは距離をとりつつランチャー……といたい所だが、外見から相手を判断をしたら手痛い攻撃を受ける事もある。機動性に優れ、武装面も平均的なエールを装備する。

そしてスウェンは動き出す。ビームライフルを粒子展開し、シュハイク目掛け放つ。予測していたとおり、シュハイクはそれをかわすがスウェンは回避方向へ射撃を続ける。

「当たりはしないぞ！」

回避から一変、急激に方向を変え

「はあああ！！！」

「くっ！！！」

突進してきたシュハイクの振り下ろしたブレード。スウエンはビームライフルを粒子化しエールストライカーに搭載されたビームサーベルを抜刀し防ぐ。

両者は一度離れ、再び近づきすれ違いざまにブレードとビームサーベルを振る。スウエンが方向転換すると、シュハイクは右方の肩部にあるレールカノンの砲口を向けていた。

「これはどうだ？」

砲口から放たれる弾丸は爆煙を起こし、スウエンを包み込んだ。直撃かと思われたが

「……ほう」

煙が晴れると、シールドによって銃弾を防いでいたスウエンが現れる。

「やるな、スウェン」

「貴女こそ」

シュハイクは笑みを浮かべながら言う。

（隊長の武装は、まだ手の内を全て出していない事を省くと主に近接寄り、ランチャーで挑まなくて正解だったな）

次の手を考えようとするスウェンだが、シュハイクは直ぐに動く。

「考えている暇など無いぞ！」

「そうでしょうね」

スウェンがビームサーベルを振ろうとした瞬間、ビームサーベルが一瞬粒子化し違う武装が現れる。

「ッ!？」

「これは……!?!?」

シュハイクのブレードを防いだスウエンの手に握られていたのは、彼の身の丈ほどはあるライトブルーの配色の剣、そして左腕に小型のシールド状の武装、左肩にユニットが装備される。

「ふっ!」

スウエンはその剣。対艦刀「シュベルトゲベール」を思い切り振りかぶり、シュハイクと距離を離す。すると、スウエンの目の前に文字が現れる。

「何故「ソードストライカー」が……? まあいい」

シュベルトゲベールを構えると刀身にビームが発生する。

「巨大な実体剣であり、巨大なビームサーベルでもあるか……面白
い、エールとランチャーに以外にそのようなものがあるとはな……
ククク、ハハハハ!」

空へと響きそうな笑い声を上げるシュハイク。

「血がたぎる……私はお前のような奴と戦いたかった！ 初めてだ……このような気持ち、初めてだ！」

「……まるで戦闘狂のような発言ですね」

「フフフ……そう言うな。さて、そろそろ私も手の内を明かそうか……」

するとシュハイクのブレードは突然唸る様に、並んだ刃がチェーンソーのように回転しだした。

「火が点いた私とこの「クロコディール」は止められんぞ？……さあ、もっと私を楽しませてくれ！！」

第十一話『新隊長』

響く金属音、飛び散る火花。模擬戦場の地上では、スウエンとシュハイクによる斬劇が行われていた。

「どうした、それで終わりではあるまい！」

「ちっ！」

シュベルトゲベールでシュハイクの「クロコディール」を防ぐ。だが、刃の回転しているクロコディールの勢いは凄まじく、とても抑えきれぬものではなかった。

辛くもシュハイクから距離を離しシュベルトゲベールを構えなおす。

「面白い武器だろう？ このクロコディール、ようは巨大なチェーンスーみたいなものだ」

「悪趣味ですね」

「ぐっ！……あ、悪趣味とか言われるのは予想外だ……だが攻撃性だけは高いぞ！」

「!?　ぐああああ!」

スウエンはシュハイクにより吹き飛ばされ、壁へと激突する。直ぐに体勢を立て直し、眼前を見るとシュハイクは直ぐそこまで来ていた。

「速いな……!」

左肩のユニットに搭載された「マイダスメッサー」を引き抜き、ビームの刃を発生させ

「これでどうだ!」

手元から離れたマイダスメッサーは勢いのある回転をつけながらシュハイクに向かうが、直進的な軌道から容易にかわされる。すると、シュハイクは不適に笑みを浮かべるとクロコデイルを真っ二つに分け、二刀流へとなる。

「!?」

右手からの斬撃をシュベルトゲイベルで防ぐが、左手に持たれたクロコディールは防げず

「ぐあああああー!!」

クロコディールの回転刃がスウエンの身体を切り裂き、回転された刃により連続でダメージを受け、シールドゲージが急激に減少する。

(一瞬でもいい、隙をつくれれば……)

そしてスウエンはクロコディールの刀身を左腕と身体で押さえ

「ッ……!!」

刀身と身体に密着させ

「ぐうっ!!」

クロコディールの回転する刃を無理やり止める。

「……まさか、そんな方法で止めるとは無茶苦茶な奴だな、お前は。だが、楽しかったよスウェン、もうこれで――」

「まだ……勝負はついてませんよ?」

「何……ッ!??」

シュハイクは背後から迫ってきたものに反応できず、右腕に持っていたクロコデイルを弾き飛ばされる。飛来してきたものの正体、それは先程スウェンが投擲したマイダスメツサーだ。

スウェンは左腕の武装「パンツァーアイゼン」のアンカー射出する。打ち出されるアンカーは左腕のクロコデイルに直撃し、弾き飛ばされる。今のシュハイクは両手の武器が無い、スウェンはこのタイミングを逃さず、シュベルトゲーベルを握りなおし

「でええええやああ!!!!!!」

今まさにシュハイクの身体をシュベルトゲーベルで切り裂こうとしたが

「ちっ……」

その時ストライクのシールドゲージが0へとなった。

「……俺の、負けですね」

「ああ、そうだな」

二人は構えを解き、ISを解除する。

「スウェン、ありがとう。本当に楽しかった、最後のあれには少し驚かされたぞ？」

「まあこればかりは隊長が俺に注意を向けていたからよかったのですが、結局俺は負けましたから」

シュハイクは後ろを向き

「くくく……調子に乗るなよ？ 少年。私から勝利を奪おうなんて10年早い」

「意外と近いんですね」

「……そうかもな。それじゃ、後は任せたぞスウェン"隊長"？」

「了解しました」

シユハイクは手をひらひらさせながら、模擬戦場を出て行った。すると

「スウェン中尉！」

「ラウラか」

慌しく走ってきたラウラ。スウェンの前まで行くと

「どうした、ラウラ？」

「先程シユハイク隊長に会ったのですが、隊長に任命されるというのは本当ですか!？」

「ああ」

その言葉にラウラは笑顔になり敬礼する。

「おめでとうございます！」

「「「おめでとうございます！！」」」

「？」

突然大勢の音が聞こえたので、上の閲覧席を見ると「シュバルツェ・ハーゼ」の隊員達が居た。

「先程の戦い見ました！」

「シュハイク隊長とあそこまで戦うなんて凄いですよ！」

「今度自分に訓練よろしくお願いします！」

「その次に自分にも！」

部隊の皆からそのような言葉を受け、スウェンは不思議な感覚に包まれる。

(何だ……この感覚は……)

「スウェン隊長」

ラウラの後ろからクラリッサがスウェンに声を掛ける。

「先程の戦いお見事でした。これからスウェン中尉の隊長就任を祝って、パーティでもしようと思っています」

「副隊長、別に俺は……」

「却下です、あなたは遠慮し過ぎなんですよ。これくらいの事は受けてください」

「……了解した」

「それでは、黒ウサギ隊！ 今日には盛り上がるぞ！！」

「「「おおおー！！」」」

「おい……」



「はぁ……明日も訓練があるというのに」

スウエンは隊舎にて、自分の部屋へと向かう最中だ。先程のパーティーは騒ぎすぎた、主にスウエン以外が。

「正直疲れたが……悪くないな。ああいうのも」

祝い事をしてもらったのは子供のとき以来だ、そう思いながら自分の部屋へと入ると。

「……」

スウエンのベッドの上に、布団の中に包まってもぞもぞ何かが動いている。

「くんくん、これがスーくんのベッドか〜ふふふ……」

何処かで聞いたことがある声、スウエンは直ぐに思い出しそれに声を掛ける。

「何故そこにあんたが居る」

「むむっ！ その声は！」

布団を跳ね除け中から

「じゃ〜ん！ 久しぶり、スーくん！ 元気にしてた〜？ 勿論してたよね〜！」

「篠ノ之 束……何故あんたがここに？ この警備とロックは固い筈なのだが……」

束は「ちっちっち」と一指し指を左右に振り

「スーくんが地球のどこに居ようが、この束さんには直ぐにわかってしまうのだ！ どう？ 凄いでしょ！」

「いや、質問に答え——」

「そういえばこの部隊の隊長になったんだってね！ 凄いね！ おめでとう！ 君がああ草むらで突然現れた時から目をつけていた時から気にはなっていたけど、まさかここまで上り詰めるなんてね！」

「だから話を……」

スウエンはあるワンフレーズが気になった。

「今ああ草むらと言ったな」

「そうだよ、私はグレーデント夫妻のストライカーシステムに興味があって、監視衛星を使ってあの人達行動をずっと見てたんだ。それで、ふとああ草むらに衛星を向けたら、突然君が現れたんだ！」

「!？」

「あそここの地点を調べたけど何も反応が出なくて、何故君があそこに急に現れたのか、この私の

頭脳を使っても解らなかった。それから君に興味が沸いたんだよ。どうやってあそこに現れたの!? どんな機械使ったの!?」

「……俺にはわからない。何故あそこに居たのか」

「ふくん……ウソはついてないみたいだね。けどいいや、実際君が突然現れたのは何かしらの原因が起きたのは確かだから、少しづつ解明していこう!」

「篠ノ之 束、一つ質問していいか?」

「もう! 束でいいのに! どうせだったらぷりてい束さんで——」

「断る」

束は頬を膨らませ

「むー。それで? 質問って?」

「俺がああ草むらに現れたとき、他に誰か居たか?」

「ううん、どこ見渡してもスーくん一人だったよ」

「……そうか」

「あんまりラボを空けておくのはダメだから。あ！ 困ったときがあつたらいつでも言ってるね！」

束はポケットから電話番号らしきものが書いてあるメモ用紙を取り出し、スウエンに手渡す。

「この束さんは何時でもスーくんの味方だからね！ それじゃ！」

そう言い窓の外へ束は飛んでいった。残されたスウエンは数秒間固まったものの、ため息一つの後布団などを整理してベッドの上に倒れこむ。

「……あの女性はいなかった、か」

スターゲイザーのコックピットに一緒にいた女性。彼女はもしかしたら自分とは違って地球圏に帰れたのだろう、徐々に眠くなっていき、薄れ行く意識の中でそう願った。

第十二話『モンド・グロッソscene1』

「モンド・グロッソ？」

スウェンはクラリッサにそう聞き返す。

「はい」

「上の方の話で何度かは出たが……どういうものかは知らないな」

「隊長でも知らない事が？ モンド・グロッソとは簡単に言えば21の国と地域が参加して行われるIS同士での対戦の世界大会で、様々な部門の競技があるみたいです。今年から開催されたらしくて、一週間前から既に始まっていますよ」

「前者の言葉が気になるどころだが、成る程。ISは兵器として運用されるはずが、何時の間にかスポーツの一環のようになっていな」

モニターの傍にあるコンソールをうつ手を止め、スウェンは傍らにあるコーヒーを一口飲むと、クラリッサの方を向き

「ところで、そのモンド・グロッソが何か？」

「シュハイク責任官がドイツ代表として出場なされるらしいです」

「ほう、ここ最近姿を見ないと思っていたが……」

「それで、今日の12時の試合で総合優勝者が決まるのですが……あと数分程度で始まりますね」

「それに責任官が出ると？」

「はい」

「……責任官も一言言ってくればな」

するとクラリッサは口元に手を沿え、小さい声で

「あの人、ああ見えて結構恥ずかしがり屋なんですよ？ 応援されるとかえって恥ずかしくなってそれどころじゃないですから」

「意外な一面もあるんだな……12時だな」

「恐らく中継で放映してるかと」

スウェンは傍のモニターの表示を変える。そこに映るのはシュバルツェア・ヴォルケを展開するシュハイクと、白を基調としたカラーリングの装甲を身に纏う女性が居た。

「シュハイク責任官の相手は『織斑 千冬』……日本の代表ですね」

「日本か……外装からみても、武装らしい武装はあの剣だけか」

そして開始の合図と共に両者は動き出す。シュハイクはクロコディールを用い、千冬へと切り掛かるが手にしている剣で防がれる。

レールカノンの砲身を千冬に向けるが、上体を反らしレールカノンを蹴り上げる。その後隙のできたシュハイクに、千冬は剣で切り裂こうとするが、左腕で手元を押さえられ攻撃は失敗に。

シュハイクと千冬は距離をとると、レールカノンの砲身を再度向けるシュハイク。放たれる弾は千冬にかわされるが、それでも尚撃ち続ける。

「良い性能だな、あのIS」

「確かあのISは「暮桜」日本が開発したものです。見る限り、機動性はヴォルケよりも上ですね……」

「ああ、あの人がどう出るか……」

モニターの向こうでは激戦が続く。互いに攻撃を受け合い、徐々にシールドゲージが減少していく。その中、動き出したのはシュハイク。クロコディールの刀身を回転させ、千冬に迫る。

振り下ろされたその斬撃は防がれる事なく避けられ、逆にシュハイクに千冬の攻撃が。だが、直ぐさまクロコディールの刀身を分裂させ、右手のクロコディールで防いだ。

シュハイクの剣と千冬の剣がせめぎ合い、左手のクロコディールで一撃を狙うが、シュハイク自身も思わぬ事が起きた。先程まで目の前に居た千冬は姿を消していた。辺りを見渡すが、何処にも居ない。

すると、シュハイクの身体を影が覆う。上空を見るとそこには形状が変化し、エネルギーの刃を形成した剣を握った千冬が居た。

そして――



「……」

スウエンは自室のベッドの上で天井を眺めていた。シュハイクはあの日本代表の織斑 千冬に敗北した。あの戦闘は正直凄まじいものであった。シュハイクは恐らく、スウエンが戦ったときは手加減をしていたのでは？と思うほどの強さを出していた。それ自体にはスウエンは何も言わない。寧ろ、本気を出させるほど強くは無い自分が悪い。スウエンはシュハイクと連絡をとったが

『私の実力不足だ、逆に負けて清々しい気分だよ』

と言っていた。彼女がそこまで言うのだから、織斑 千冬という女性には相当の実力の持ち主だろう。だが、スウエンが気になったのはそれだけではない。織斑 千冬が使用していたあの武装だ。

あの武装がエネルギーの刃を形成している時、彼女のシールドゲージも減少していた。そして一瞬の間を突かれ、あの刃に切り裂かれたシュハイクのシールドゲージは70%もあったのにも関わらず、一瞬にして減少してしまった。

「あの武装……気になるな」

そう言い、スウエンは携帯端末に番号を入れる。プルルと数秒間な
った後、出てきたのは

『ハロハロばんばんわく♪ やっほく！ 皆の天使、篠ノ之 たば
——』

ぶつんと携帯端末の通話を切るスウエン。枕元にそれを置き

「寝るとするか……」

『今にもく飛びぬk——』

「何だ」

着信音の後に、スウエンは通話ボタンを押す。相手は案の定、束だ。

『うえくん、ヒドイよくスーくんく』

「いや、すまない。妙な挨拶が聞こえたものでな。それで、束、あ

「んたに聞きたい事がある」

『なにかな、なにかな！ スーくんの為なら何でも言っちゃおうよ？』

「あんたなら知っているだろう？ 暮桜というISの武装を」

『勿論しってるよ！ あの刀は「雪片」。暮桜の唯一の武器で現存在するISの武装の中じゃトップクラスの武器だよ！』

「ほう……それで？ あのシールドエネルギーを一瞬にして減少させるあの刃は？」

『スーくん、単一仕様能力ワンオフって知ってるよね？アビリティ』

「ああ、ISが操縦者と最高状態の相性になったときに自然発生する能力のことだろうか？」

『そそ。暮桜の単一仕様能力は「零落れいらくびやく白夜」。切り裂いた対象のエネルギー全てを消滅させるというスバラしい能力なのだよ！ 詰まり、ISのシールドバリアーを斬り裂いて相手のシールドエネルギーに直接ダメージを与えられる事が出来るのだ！』

「……だが、自身のシールドゲージも消費するため、日本の言葉でまさに「諸刃の剣」といったところか」

『スーくん良くそんな言葉知ってるね！ エライ、エライ！』

「からかうな……だが感謝する。それではな」

『えー！ もう切っちゃうの？ もっと聞きたい事ないかな、ないかな！ 例えばこの束さんのスリーサイズとかー』

「切るぞ」

そうして通話が終了した。呆れた顔をしながら、スウエンは再び天井を眺める。

「……悪い奴ではないのだがな、あいつも」

／※／

「全員整列したな」

翌日の早朝「シュバルツェ・ハーゼ」の隊員達が、スウエンの前で一寸の乱れも無く整列している。

「今日の訓練は……まあ、昨日と同じだ。気楽とは言えないし、気を抜けとも言えない。だが、いつもどおりにやってくれれば構わん」

「けど向上心忘れる事無かれ、ですね！ 隊長」

隊員の一人が笑みを浮かべて言うので、スウェンも思わず口元が綻ぶ。

「ふっ……ああ、皆頑張ってくれ。それでは始めてくれ」

「「はっ！」「」

隊員達が後ろを向き、訓練に向かおうとしたとき

「この訓練で成績が一番よかった者が隊長の個人訓練を受けられるというのだ！」

「「賛成！」「」

「ちょ！ 待て！ 今日午後から私が……」

ラウラが焦りながら異を唱えるが

「却下！ それでは始めるぞ！」

「人を賭けの対象にするな……」

「良いではないですか、これで隊の向上に繋がるなら」

「そうは言ってもだな……」

「ふふっ、けどスウェン中尉が隊長になってから、前よりも隊が良くなってきてますからね。シユハイク責任官の思惑通りです」

「……それを聞くと何故か気に入らないが……まあ、こういうのも悪くは無いな」

「あれ！？ 今、隊長笑いましたか！？」

「どうかな……」

スウェンは振り向く。

(この隊ならずと居ても良いな。願う事なら、これがずっと続けば良い……)

そう願い、歩いていく。

だが、3年後に開催される第二回モンド・グロツソで起こるとある事件によって、その儚い願いは崩れさるのであった……。

第十三話『モンド・グロッソscene2』

第二回モンド・グロッソ会場にて。

「ふふっ……懐かしい雰囲気だ」

シュハイクは3年ぶりにやってきた会場の空気に胸を躍らせていた。辺りを見ると、以前に知り合った面々が居る。

「シュハイク責任官、少々浮かれすぎでは？」

横から鋭い指摘を入れるスウエン。

何故彼がここに居るのかというと、今回の第二回モンド・グロッソはドイツで開催される事になり、それにもない今回の会場警備はドイツ軍が行う事になった。

勿論「シュバルツェア・ハーゼ」も警備を担当しており、スウエンは公に出来ないものの「シュバルツェ・ハーゼ」の隊長だ。来ない訳にはいかないため、シュハイクの付き人として現場に来ている。

「久しぶりだなシュハイク」

「その声は……」

突然声を掛けられ、シュハイクは声ができる方を向くと流れるような長髪に吊り目の女性が、隣には女性と同じ髪の色少年が居る。

「やっぱりな、この狼娘」

「誰が狼だ。ん？ そっちは……」

「スウェン。自己紹介を」

スウェンは一歩前を出て

「初めまして、自分はスウェン・カル・バヤンと言います」

「スウェン？ ああ、例の……」

「例の？」

「いや、こちらの話だ。私は織斑 千冬、よろしく頼む」

「織斑……千冬」

織斑千冬。3年前に行われた、第一回モンド・グロッソ優勝者であり、シュハイクを負かした女性。スウェンその事から千冬に興味を持っていた。

「貴女が「ブリュンヒルデ」とー」

「その呼び方は止めてくれ。あまり好きではない」

「……申し訳ありません」

「相変わらずだな、千冬。それで？ そちらの少年はお前の弟か？」

「ああ。ほら、一夏」

「お、「織斑 一夏」です！ よ、よろしく願いします！」

少年、織斑 一夏は初対面からか、若干恥ずかしながら言う。

「お前と違って随分と……」

「何だ？」

「いや、何でも無い。そう睨むなよ、ふふっ怖い怖い」

「シュハイク責任官、俺はこれで」

「ん？ ああ、警備の方は頼んだぞ」

「了解」

そう言い、スウェンは千冬に軽く会釈をした後、警備の指導に向かった。

「"シュバルツェ・ハーゼ"の隊長であり、現在この世界における唯一存在……か」

「ああ、良き働き者だよ。どうだ？ 結構良い男だろう？」

「……まあな」

「おお、織斑 千冬にしては随分と普通の反応だな」

「私を何だと思っているんだ……」

「気にするな、気にするな！……さて、今回は負けんぞ？ 3年前

の借りは返してやる」

「望むところだ」

／※／

「隊長、お戻りになられたんですね」

会場の警備本部の休憩室に、スウェンとラウラが居る。

「シュハイク責任官の方はもう大丈夫だろうと思ってな。……しかし予想以上だな、モンド・グロツソというのは」

「21の国が参加しているだけあって中々の規模が」

スウェンは椅子に座り、メーカーで淹れたコーヒーを口にする。コーヒーカップをテーブルの上に置き

「ラウラ、お前はこのモンド・グロツソ、どう考える？」

「唐突ですね……正直、あまり好ましいものではありませんね」

「ほう……何故だ？」

「ISは兵器です。兵器をこのようなスポーツの一環としてとらえる等、私は考えられません」

「成る程、それがお前の考えか」

「スウェン隊長は？」

「俺か？……ISはお前の言ったとおり兵器だ。ここ近年、ISを使つての武力行使等は耳にするか？」

「い、いえ……」

「だろうな。ISと言うのはその性質上、この世界のあらゆる兵器を凌駕した存在だ。その国が保有しているだけで、強力な抑止力となる。だが、人間は他者より優れているものを持ちたがる。よって、より強力な抑止力を持つために研究する。しかしその研究した成果をどうやって他国に見せる？ ISで戦争染みた真似を試みる、被害は甚大だ」

「だからこうして競技で競い合い、どこの国がより強力な力を、技

術を保有しているか決める。と言う訳ですか……」

「あくまでもこれは俺の見解だ。もしかしたら違う意図があって行われているかもしれない。このモンド・グロツソというものを考えた人間は相当のやり手だな……そろそろ始まるか」

耳に響く狼煙の音。第二回モンド・グロツソが開催された。スウェンは立ち上がり、インカムを起動し

「こちら本部、スウェン・カル・バヤン中尉だ。"シュバルツェ・ハーゼ" 隊員に伝達、第二回モンド・グロツソが開催された。我々の任は警備だ。不審な者を見かけたら直ぐに通達、現場へ急げ。これは我々"シュバルツェ・ハーゼ"……いや、ドイツの面子がかかっている。この一週間、何としてもモンド・グロツソを何事もなく終わらせるぞ」

『はっ!』

「……良い返事だ、期待している」

そうして通信を切り、ラウラの方を向く。

「お前も持ち場へ向かえ。俺は本部でモンド・グロツソの状況を把

握する」

「はっ！」

ラウラは敬礼し方向を180度変え、本部を出て行く。スウエンは再び席に座る。

「何事もないのが一番だな……妙な胸騒ぎがするな」

第十四話『決断』

ドイツの地で行われる、モンド・グロッソは「シュバルツェ・ハイゼ」等の警備により、無事最終日、決勝戦を迎える事が出来た。

決勝は前回優勝者、織斑 千冬。対する対戦相手は前回準優勝者、シュハイク・オーデイス。再びこのカードが揃い、会場も大いに賑わい、新聞にも大題的に扱われている。

歓喜に満ちた第二回モンド・グロッソは無事に終わりを迎えるだろうと誰しもが思う……だが、事態は動き出す。

「決勝戦の試合開始の瞬間はもう間近……か」

「いよいよですね。シュハイク責任官もリベンジ果たせば良いのですが……」

「そうだな」

スウェンとクラリッサはモニターを眺めながら言う。

「シュハイク責任官なんて「今回こそ勝ってみせる！」って意気込んでましたから」

「空回りしなければ良いのだがな……」

決勝戦が目前に迫ったその時、緊急通信がスウェンとクラリツサに入る。

『こちらファングA、緊急事態発生。織斑 千冬の弟、織斑 一夏が不審な人物に連れて行かれたとの報告。ドイツ軍はこれを誘拐事件と決定、辛うじて情報入手、これを元にスウェン・カル・バヤン中尉は隊の指揮を』

「こちらスウェン中尉、了解した。"シュバルツェ・ハーゼ"はこれより行動を開始、そちらは本部の指揮に伴い行動を」

『了解』

緊急通信が終わると、クラリツサはスウェンの隣に立ち

「このタイミングでこの事態発生ですか」

「ああ、今すぐ隊の皆に通信を……」

スウェンはインカムを起動しようとするが、携帯端末が振動する。

「これは緊急通話？」

インカムを起動せず、携帯端末の通話をする。通話の相手は、ロイであった。

『スウェン！』

「義父さん？ 一体どうし——」

『リズが、リズが倒れたんだ！』

「なっ!？」

表情を変え、焦りの色を見せるスウェン。ロイは声を慌ただしたまま

『今、ローエンス病院に緊急搬送された！ リズの命が危ないんだ！』

「わかった！今むか……！！！」

スウェンは言葉を止める。自分には誘拐事件の指揮を担当されている。軍よりも身内を最優先させるなどのもつての外。だが、リズは血の繋がっていないとはいえ、大事な家族。スウェンはどちらをとるか、激しい葛藤に見舞われていた。

だが、答えは決まっていた。軍での自分の立場がどうなるかわからない。それでも、大切な家族の下に行く。だが、指揮はどうする？ スウェンはそれに行動を止められていた。

「くっ……！！ 俺は……！！」

「隊長」

クラリッサがスウェンの肩に手を置く。

「通話はこちらにも聞こえていました、あなたは行ってください」

「！？」

「今この現場を離れたら、あなたの身の上がどうなるかはわかりません……ですが、あなたはそれでも行く心算なのでしょう？」

「……ああ」

「でしたら指揮はこのクラリッサが請け負います。安心して、ご家族の下へ行ってください」

「……すまない、クラリッサ！ 義父さん、俺は今から向かう。ここからならそこまで遠くないはずだ。切るぞ！」

『ああ！』

通話を終え、スウエンはクラリッサにインカムを渡し

「後は頼む」

「はい！」

スウエンは頷き、全速力で本部を走り抜けていく。残されたクラリッサはインカムを起動し

「これより指揮はクラリッサ・ハルフォーフが急遽受け持つ。全体

は私の指揮の元で行動しろ！」

／※／

「はぁ……！ はぁ……！」

スウェンは止まることなくローエンス病院たどり着き、受付に向かう。

「リズ・グレーデントが緊急搬送された病院はここだな！」

「え、えっと……少々お待ちを……はい、今は緊急手術を受けているところです」

「場所は！」

「そ、そこを右に曲がったところです」

「感謝する！」

再び走るスウェン。手術中と表示された部屋の前に、ネレイスが座っていた。

「スウェン！」

スウェンに気づき、椅子から立ち上がりスウェンの前へ駆け寄るネレイス。

「リズが……リズが……急に家で倒れて……意識が戻らなかったの
お……！」

「落ち着け、義母さん」

「ネレイス！ スウェン！」

次いでロイも走ってやってきた。研究室に居たまま来たのだろう、服装がそのままであった。

「ネレイス、今のリズの容態は!？」

「あ、危ない状態だって……もしかしたら……うう……」

「大丈夫だ、義母さん。必ず……必ずリズは助かる。信じるんだ」

「スウエンの言うとおりで。今の僕達はリズの無事を祈るしかない」

「……ええ」

ネレイスは徐々にだが落ち着きを取り戻し、椅子に腰を掛ける。スウエンは壁に背を預け、ロイは時計を何度も見ながら、手術中と灯された表示を見つめていた。

そして五時間後……

手術中の表示の明りが消え、手術室から医師がマスクを外しながら出てくる。ロイは医師の前へ行き

「リズは！ リズはどうなったんですか！」

「あと一步遅かったら大事になっていましたが……一命を取り留めました。もう大丈夫ですよ、お父さん」

その言葉に、ロイとネレイスは表情を一変し、喜びに包まれた。

「ありがとうございます！ 本当にありがとうございます！」

「よかった……」

「……」

ロイは医師に握手をし、ネレイスは喜びで涙をながし、スウェンは安堵しゆっくりとその場に座り込む。手術室から、担架で運ばれてくるリズが居た。

「意識も取り戻したようですし、ご家族の方、お話してください」

「はい！ スウェン、先に」

「ああ」

スウエンはリズの傍まで近づき

「リズ、大丈夫か？」

「お兄……ちゃん？ あれ？ お仕事……は？」

「ああ、途中で抜けてきた」

「……ごめん……ね、私のせい……でお仕事の邪魔……しちゃって……」

「いいんだ、お前が無事で。けど良かった、本当に心配したぞ……」

「えへへ……ありが……と」

スウエンはリズから離れた。ロイとネレイスは一緒にリズの近くに行く。スウエンは何より、リズの命が助かった事に安堵と喜びを感じていた。不意に鏡を見ると、微笑んでいる自分の顔が映る。

「俺でも……こういう顔が出来るんだな」

第二回モンド・グロツソ決勝戦の最中で起こった誘拐事件は、ドイツ軍の情報網により織斑 千冬の手で織斑 一夏は無事救出。だが、それに伴い救出するために決勝戦を棄権し不戦敗。優勝者はシュハイクになるという結果になった。

最終日に起こった波乱を越え、モンド・グロツソは終幕したのであった。

／※／

「スウェン・カル・バヤン中尉、貴官は現場の指揮を任されていたのにも関わらず、身内を優先し指揮を放棄したと言う事に間違いはないな？」

「はい」

中将の椅子に座っている男性の目の前にスウェンは直れの姿勢で立っている。

「ならば貴官には然るべき懲罰を与えなければならない……貴官は「シュバルツェ・ハーゼ」の隊長の位を剥奪、そして一年の謹慎とする。以上、何か言う事は？」

「御座いません」

「よろしい、それでは下がりましたまえ」

「はっ、失礼します」

敬礼の後、規則正しい動きで退室していくスウェン。そして数秒後

「失礼します!!」

ドン!!と部屋の扉を開けドカドカと入ってきたシュハイクが居た。

「シュハイク大佐、もう少し静かに……」

「スウェンを隊長を辞めさせるなんてどういふことだ！ 父上！」

鬼のような剣幕のシュハイクを「やれやれ」といった表情で見る男性『ゲルハルト・オーデイス』。シュハイクの父親だ。

「ここでは中将と呼べよ……これでも何とか刑を軽く出来たほうなんだぞ？ 本来だったら軍を去ってもらなければならぬ状態だったし」

「そ、それでも……」

「はぁ……今回ばかりの事はお前でも予想外だったろうな」

「……まさか、スウェンがあそこまで感情的な行動をするなんて思ってもいなかった」

「彼も人の子という事だ。言っちゃあ悪いが、俺は少し安心したな」

「なに！？」

「そう怒った表情するなよ……俺は最初、スウェン・カル・バヤンという人物を見たとき、まるでコイツは感情のない人形のようにだと思ってしまった。だが、今回の一件で彼はしっかりと人間なん

だなど感じたんだよ」

「ッ……」

シュハイクは苦虫を噛み潰したような表情で、窓の外を見る。外は清々しい程の青空であった。まるでスウエンを「シュバルツェ・ハ―ゼ」に迎え入れた日のように。

（くっ！ 今日に限ってこの空が忌々しいよ……スウエン）

第十五話『I S 学園』

「ようやくか……全く、何故か飛行機というのは慣れんものだな……」

白い制服のようなものをきっちり到着込んだスウエンは飛行機をおり、日本の大地に足をつけていた。何故彼が此処に居るのか、それは3ヶ月前に遡る。

／※／

スウエンは隊長を辞めさせられたと同時に「シュバルツェ・ハーゼ」を脱退した。

誰にも告げずに。

そして謹慎を受け、スウエンはグレーデント宅に戻り夫妻との生

活をしていた。ただ、リズは入院中の為家には居ない。容態は安定しているようで、スウェンは毎日のようにリズに会いに行っているとの事だ。

そんなある日の事

ピンポンと家のチャイムがなり、スウェンは玄関へ赴き扉を開けると

「よ！ 元気そうで何よりだ、スウェン！」

笑顔を見せつつそうやってきたシュハイクがそこに居た。格好は軍服ではなく、カジュアルな私服なようだ。

「シュハイク……責任官」

「あら？ お久しぶりですね、シュハイクさん」

玄関の傍を通りがかったネレイスがシュハイクに挨拶をする。

「久しぶりです、Drネレイス。スウェン、少し時間あるか？」

「……義母さん、上がってもらっても構わないだろう？」

「ええ、どうぞ」

「失礼します」

「それで？ お話とは？」

「まあ、待て、茶の一杯は飲ませろ」

居間のテーブルを挟んで、スウェンとシュハイクが向かい合って座っている。

「しかし、懐かしい構図だな。6年前か、お前を「シュバルツェ・ハーゼ」にスカウトしたのは」

「……ええ、まあ」

「お前も随分と成長して……私は嬉しいよ」

現在のスウェンの姿は、スウェンがこの世界に来る前の状態と比べると変わらない姿だ。厳密に言えば、姿が戻ったというのが正しいだろう。

「シユハイク責任官、そろそろお話を」

「せっかちな……まあいい、スウェン。お前の謹慎が解除になった」

「？ どういうことですか？」

「お前も知っているだろう？ “二人目”が現れた事を」

「……はい」

つい数日の事、日本のとある中学生がISを起動したという情報が全世界に広まった。普通なら、そんな話題は世界には広まりはしない。ならば何故広まったのか？ それは起動者が男子だったからだ。つまり、スウェンに次ぐ“二人目”の男のIS起動者が現れたのだ。

「その二人目は日本に存在する、IS操縦者育成特殊国立高等学校。

通称「IS学園」に入学する事に決まった」

「IS……学園」

IS学園とはISの操縦者育成を目的とした日本に存在する教育機関である。スウェンも部隊に居たころは何度かは耳にした事がある。

「そして上層部は、謹慎の解除を申し渡すと同時に、お前にIS学園への入学を指定した」

「俺に？」

「ああ。「二人目」も現れた事だし頃合だった……世界にもう一人、男のIS起動者が居る事を知らしめるためにも、同じIS学園に入学させたほうが上層部も都合が良いだろう」

「成る程……これは絶対事項ですよね」

「ああ、そうなるな。ところでスウェン、お前学校行ったことあるか？」

「……そういうところには行った事は無いです」

「丁度良い機会だ、年齢のほうは……まあ、何とかなるだろう。若

者は本来勉学に励むべきだ、DrロイもDrネレイスも勿論賛成だろう？」

ロイとネレイスは顔を見合わせ、互いに頷く。

「上層部の考えは気に入らないけど、スウェンがそういう学校に行ってくれるとなれば、僕達としても嬉しいね」

「そうね。学校に行って、いろいろ学ぶのも人生じゃ必要だからね」

シュハイクは満面の笑みになり、スウェンの方を向く。

「と、いうことだ。お前の入学は今から3ヶ月後だ。資料や、手続きは軍でやってくれるらしい。お前はドイツ代表候補生として、入学……というより転校という形になるが」

「どちらとしても構いませんよ。まあ、出来るだけ頑張りますよ」

「よく言った！ それでこそ私が見込んだ男だ！ 早速私は戻って上層部に伝える！ それではな！」



そして今に至るのである。

「リズにもしっかりと顔を出してきたから……まあ、問題は無いが」

スウェンは空港を出ると、辺りを見渡す。

「確か、IS学園の教師が迎えに来ると言っていたが……」

「スウェン・カル・バヤンだな」

「？」

背後から声を掛けられ、身体をそちらに向けるとスウェンの知っている人物が居た。

「あなたは……織斑 千冬」

「覚えていたか、まあ、会ったのがほんの前だからな」

「IS学園の教師というのはまさか……」

「私だ。今から学園に向かう、さっさと車に乗れ」

「了解」

千冬が車に乗った後、スウェンは後ろの席に乗る。スウェンが車に入っただけの第一印象

（中々に散らかっているな……）

何の袋かわからないものが車内に散乱している。触ろうと思ったが、絶対何か言われそうと思い踏みとどまる。スウェンは流れていく景色を見る。

「どうだ？ ドイツとはまた違った景色だろう？」

「はい……教師織斑はシュハイク責任官とは仲がよろしいのですか？」

「……まあそうなるかもな、奴とは何かと話が噛み合う。一緒に居て割かし楽しい」

「そうですか」

「では次はこちらから聞くぞ。お前は篠ノ之 束とはどういった関係だ？」

まさかこの場所でその名を聞く事になるとは。スウェンはそう思い口を開く。

「俺は篠ノ之 束の興味の対象……といったところですよ」

「ほう、それはまた珍しい。奴は身内意外にはあまり関心や興味は一切抱かないが……お前のISだけならとも無く、話を聞く限りお前自身にも随分と熱心なようだが。よく話題が出てくるよ」

「そうだったんですか。その口振りからするに、教師織斑は篠ノ之 束の事をよく知っておられるようで」

「……腐れ縁というヤツだ」

「？」



IS学園の廊下を、千冬の後について行くスウェン。

(不思議なものだな、俺が学生になるとは)

歩きながら様々な事を考える。自分は学校と言える場所に行った事がない、自分が行ったのは兵士養成学校という名の地獄だ。一つのミスで身も裂けそうな程の罰を受ける。

スウェン自身もどれだけ傷を負ったのか、とても指で数え切れるものではないだろう。少なからず、あのような思いをするのは御免だ。この学園はそんなものが無いようにと切に願う。

先行している千冬が教室の前で止まる。室名札を見ると一年一組と書かれており、千冬はスウェンの方を向き

千冬の呼ぶ声にスウェンはドア開け、くぐる。教壇の上に立ち

「ドイツ代表候補生、スウェン・カル・バヤンだ。これからの学園生活、よろしく頼む」

軽く会釈をし前を見ると、珍しい物を見るような目で見られているスウェンは

（何だ……これは。別の意味で……堪えるな）

そう思った瞬間

「男子よ!! 二人目の男子!!」

「しかもしかも! 銀髪のイケメン!!」

「かっこいいー!!」

（二回目だが、何だ……これは……!? どう、反応すれば良いのだ……）

突然の女子生徒からの大音量の声に、流石のスウェンでもたじろいでしまった。

「毎度毎度……なんでこう騒がしいんだ。静かにしろ！」

千冬の一喝により、クラスは静まり返る。「ほう……」とスウェンは感心したような声を上げる。

「お前は織斑の席の後ろだ」

「解りました……（織斑？）」

休み時間に入り、自分の席へ向かうスウェンに一人の少年が声を掛けてき、手を差し伸べてきた

「俺は織斑 一夏。よろしくな」

「スウェン・カル・バヤンだ。よろしく頼む」

スウェンも手を差し出し握手をする。すると、一夏はスウェンの顔を見て

「あれ？ どこかであった事ないかな？」

「どうか…しかし、この視線はどうにかならないものか？」

スウェンは横目で教室の外を見る。教室の外からは他のクラスの女子生徒の視線が二人に向けられていた。だが、それだけではない。教室内からも視線を浴びせられている。何度も言うようだが、このような視線は流石のスウェンでも堪えるようだ。

「ははは…まあ、お互い頑張ろうぜ」

「…ああ」

そして次の休み時間

「ちょっとよろしくって？」

「へ？」

「？」

二人は声を掛けられた方を向くと、腰までの長さはあるロールのかった金髪に頭頂部でそれを抑える青のカチューシャをつけた生徒が居る。スウエンはその女子生徒を見て

（これが縦ロールというやつか……クラリッサから借りた漫画本でしか見た事がないが……本物は初めて見た）

少し興味ありげにその女子生徒のことを見るスウエン。

「まあ！ 何ですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるのではないかしら？」

一夏は口をポカンと開けて、スウエンはその言動の後、別の方向を向く。

「ちょっと！ その貴方！ わたくしの話を聞いてるのですか!？」

「すまないが……俺は君の事は知らない。恐らく、織斑。お前もだろう」

「あ、ああ」

「わ、わたくしを知らない!? このイギリス代表候補のセシリア・オルコットを!？」

「ほう……君も代表候補生か」

「そういえば貴方も代表候補生でしたわね」

すると、一夏は話の途中で手を挙げ

「代表候補生って何？」

その言葉にクラス全員がずっこける。もちろんセシリアも。スウェンは頭に手を抑え

「大丈夫なのか……ここは」

ため息混じりに呟くスウエンであった。

第十六話『代表候補生』

授業開始を告げるチャイムが鳴り、一年一組の教室に千冬と副担任の『山田 真耶』が入ってくる。教壇に千冬が立つと最初に

「では、授業を始める……。だが、その前に決めることがある。再来週あるクラス対抗戦に向けてクラス代表を決めなければならない。誰かを推薦するものはいるか？ 自薦でも構わんが」

その千冬の言葉に一人の女子が

「はい！ 織斑君を推薦します！」

「え！？ 俺！？」

突然の推薦により、一夏は思わず声を出す。すると他の女子が

「じゃあ、私はカルバヤン君を推薦します！」

「……俺か」

どンドン二人の名前が女子の口から推薦の言葉が出てくる。千冬は腕を組み

「織斑とカルバヤンか……では他には」

「待ってください！ 納得がいきませんわ！」

バンツと机を叩いて先程まで何も喋らなかったセシリアが勢い良く立ち上がった。

「そのような選出は認められませんわ！ 大体男がクラス代表なんていい恥さらしですわ！ このセシリア・オルコットにそんな屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

怒声を放ちながら、尚止まる事のないセシリア。スウェンは頬杖を付き黙って聞いていた。

「実力からすればこのわたくしがなるのが必然。それを物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！ わたくしはこのよな島国までIS技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

スウェンは横目でセシリアを見た後、ふと一夏を見る。

(……我慢の限界、みたいだな)

「大体！文化として後進的な国で暮らさなければ行けないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で——」

「イギリスだってたいした自慢なんかねえだろ、世界一まずい料理で何年覇者だよ！」

セシリアの言葉を遮り、一夏も机を強く叩いて立ち上がるとそう言い放つ。案の定、セシリアは一夏の言動に反論する。

「あ、あなた！ わたくしの祖国を侮辱すると言うのですか!?!」

「先に侮辱をしたのはお前のほうだろ。イギリスも日本と同じ島国だろ」

「うっ……」

言葉に詰まるセシリア。千冬表情を見ると、まるで一夏を誇って

いるような顔だ。

一方のスウエンは言葉に詰まっているセシリアを見て「ふん…」と鼻で笑った。それを見逃すセシリアではなかった。

「あなた！！　今、鼻で笑いましたわね！！」

「ああ、すまない。気分を害したなら謝罪しよう」

「ええ！　謝って貰おうではありませんか！！　今すぐにでも！！」

「と言いたい所だが、他人の事を見下すような人間に謝罪の言葉を持ち合わせていないものでな」

「！？　ぐぐぐ！！」

拳を震わせ、スウエンの事を思いつきり指を刺し

「あなた方！　この私と決闘なさい！！」

「相手が決闘を望むのであれば、断る理由も無い。そうだろう？
織斑」

「ああ、その決闘受けて立つぜ！」

「決まりだな」

千冬の言葉に、スウェン、一夏、セシリアはそちらを向く。

「ならば来週の月曜日に第三アリーナで総当たり戦を行い、その結果で決める。構わないな」

「はい」

「了解」

「わたくしもそれでいいですわ」

よし、と千冬は応答を受けると、

「では、授業を始める」

／※／

「代表……か。勢いというのは我ながら恐ろしいものだ」

今日の授業が終わり、スウェンは学生寮の中を歩いていた。

「1021……此処か」

自分に割り当てられた部屋の前に立ち、部屋のドアの開け室内に入ると

「？」

スウェンの目の前には、狐……のような着ぐるみを着ている女子が居た。

「あく同じ部屋だったんだね。『布仏 本音』だよー」

随分と間延びした自己紹介であったが、スウエンは

「確か同じクラスだったな。もう知っていると思うが、スウエン・カル・バヤンだ。よろしく頼む、布仏」

「よろしくー、スッチー」

「ス、スッチー？」

妙な呼ばれ方をしたため、スウエンはそう聞き返す。

「うん、スウエンだからスッチー。ダメー？」

「……いや、構わない」

「よかったー。あ、ベッドどっち使うー？」

「まあどちらでも構わないが……あえて言うなら出口側だな」

「わかったー」

どちらのベッドで寝るか決めた後、スウエンは着替えを持ってシャ

ワールームに入ろうとする。

「シャワーはもう使ったか？」

「使ったよー。だから、スッチーは安心してゆっくり使ってねー」

本音は着ぐるみの余った袖を揺らしながら言う。

「感謝する」

礼を言い、スウエンはそのままシャワールームに入る。

基本的に長くは入らないスウエンのため、4、5分で上がった。

「スッチー、スッチー」

「？ うっ……」

本音のベッドの半分以上を占める量の菓子を見て、スウエンは思わず顔を引きつらせる。

「何だその量は……」

「えへへースッチーにもあげるー」

「あ、ああ」

スウエンは本音から手渡された菓子を開け、一口。

「む……いけるものだな」

「そうでしょー？ まだあるから遠慮しないで食べてー」

「悪いな」

スウエンはベッドに腰をかけ、菓子を口に運ぶ。

（菓子と言うものはあまり食べたことがないからな……味も悪くないな、この棒の中にチョコレートが詰まったものは）

そして菓子を幸せな表情で頬張る本音を見て、スウエンは自然に口元が綻び

（この娘と話していて妙な感覚になるな。裏がなく、表しか存在しないような……東とは違ったタイプの不思議な娘だ）

そうこう考えていと、本音が思い出したかのように

「そういえば、セッシーと決闘するんだよねー」

「セッシー？……セシリアの事か。そうだが」

「スッチーはセッシーに勝つ自信はあるのー？」

「どうかな……だが、やるからには勝つ、それだけだ。無論、織斑も同じ考えだろう」

「うーん……じゃー私はスッチー応援するねー」

「ふっ……ああ、ありがとう。そろそろ俺は寝るとする」

「明かり消すねー」

「頼む」

本音が部屋の明かりを消すと、スウエンの方を向き

「スッチーおやすみー」

「ああ、おやすみ」

スウエンと本音はベッドに寝転がる。

（今考えると、男女同じ部屋で一緒に寝ると言うのはどういふものか……せめて一夏と同室なのではないか？ まあいい、考えていても埒があかない、今日は寝るとするか……）

頭の中で直ぐに結論を出し、スウエンは静かに睡眠に入ったのであった。

第十七話『代表決定戦 ストライクVsブルーティーズ』

朝、IS学園学生寮1021室にて：

「スッチー、スッチー起きてー、時間だよー」

本音がスウエンの身体を揺らしながら、起きるように促す。が、スウエンは起きない。本音は「うーん」と悩んだ後、何かを思いついたようにスウエンの耳元まで行き

「ふうー」

「うおっ！！！！！」

耳に息を吹きかけられ飛び上がるように起き、壁に張り付き本音のほうを向く。

「な、何をする……」

「スッチー起きたー♪」

ふと時計を見る。時間は6時半。スウエンは目を瞑りながら

「布仏……俺は7時半に起きると言った筈だが？」

「あれー？……間違えちゃった、ごめんねスッチー……」

落ち込んだ表情をする本音を見て、スウエンは軽いため息を吐き

「まあ、間違いは誰にでもある。気にはするな」

「……ありがとー、スッチー。それと」

「？」

「おはよー」

「ああ、おはよう」



「ぬく……!! うく……!!」

「落ち着け、織斑」

第三アリーナのピットで、一夏は腕を組んだまま同じ場所を行ったり来たりして落ち着きが無い様子。何故なら始めの戦闘が一夏なのにも関わらず、彼の専用機が遅れているからだ。

専用機は本来、国家代表、もしくは企業の所属の者。そして一定の実力を持つ代表候補生にしか与えられない。一夏の場合はその特殊な事情でデータ収集が目的で専用機が与えられる事になった。だが到着が遅れており、一夏は待たされている形になっている。

スウェンはその落ち着きの無い一夏を見る、女子生徒に視線を移す。

『篠ノ之 箒』そう、あの篠ノ之 束の妹だ。彼女とは違い、真面目で堅実な性格の持ち主とスウェンは理解した。

(姉妹でこうも違うとはな……)

「ん？ 何だ？」

「いや、随分と織斑が落ち着き無いと思ってな」

「ああ、全くだ」

腕を組みながら少し怒り交じりに言う筈。すると

『織斑君！ 織斑君！来ました！織斑君の専用機が！』

真耶のアナウンスの後、ピットの壁が開くとそこには一機の白きI
Sが搬送されてきた。

『これが織斑君の専用機……“白式”です！』

「白……式」

一夏は白式に近づき触れる。

「……」

「どうした？ 一夏」

「い、いや、何でもない……」

一夏はそれが何なのか直ぐに理解できた。千冬がアナウンスで直ぐに装着を促すと、一夏は白式を纏っていく。

『Access』

起動音声と共に、一夏の目の前には白式のパラメーターとアリーナ場内にいる、セシリアの専用機「ブルー・ティアーズ」の情報も表示されている。

『時間が無い、フォーマットとフィッティングは実戦でやれ』

「ああ」

『……そこは「はい」だろ。一応言っておくが、勝利したほうがカルバヤンと模擬戦になる』

「スウェンと……」

『まあ、精々頑張る事だ。む、カルバヤン何処へ行く？』

スウェンは一夏が白式を装着し終わるとピットを出ようとする。

「俺は格納庫で模擬戦が終わるまで、ストライクの最終調整をしています」

『わかった、終了しだい山田先生が迎えに行く』

「了解」

そしてスウェンは歩き出そうとすると

「スウェン」

「？」

「勝って来るぜ！」

「……ふっ、ああ」

／※／

スウェンはモニターを開き、目の前に鎮座しているスタンドポジションのストライクを見る。

「お前とは長い付き合いだな、ストライク」

思えば、あの時。スウェンがストライクに触れた事が切欠であった。ストライクを託され、共に戦い、共に苦しんだ。どれもスウェンとストライクにとっても良き記憶とも言えるだろう。

今やスウェンにとってストライクは掛け替えの無い相棒だ。

「義父さん、義母さん。ストライクは今も大切に使っているよ。ありがとう」

ロイとネレイスの事を思い出しながら呟く。スウェンはモニターを切り替え、今一夏と模擬戦をしているであろう、セシリアのブルー・ティアーズのデータを見る。

第三世代ブルー・ティアーズ。遠距離戦を主体としたISで「BT兵器」と呼ばれる兵器のデータをサンプリングするために開発された実験・試作機との事だ。

「遠距離戦は苦手ではないから良いが……ブルー・ティアーズの主武装は「スターライトMk-III」。たいそれた名だ……まあ、アグニヤシュベルトゲベルもいえたことではないな……」

自粛気味に言うスウェン。しかしあれから何分経っただろう。格納庫には時計らしいものが無く、時間を知る事が出来ない。スウェンは体感的に10分は過ぎただろうと予測する。

「スウェン君！」

格納庫内に真那の声が響く。「来たか」とスウェンは真那の方を向き

「教師山田。貴女がここに来たという事は、模擬戦は終わったみたいですね」

「はい！ それじゃあ次はスウェン君の試合が始まるので来てくださいー！」

「了解」



「すまん、スウェン。負けちゃった」

頭をかきながら、一夏はスウェンにそう言う。どうやらセシリアに最後の一撃を加えようとしたところ、白式のシールドエネルギーが0になり敗北したようだ

「全力で戦ったんだろう？　なら気に病む必要は無い」

「あ、ああ」

『カルバヤン、オルコットは既に次の模擬戦の準備を終えている。お前も早くI Sを展開しろ』

「了解」

スウェンは目を閉じ、ストライクを展開しエールストライカーを装

備する。

「全身装甲か……」

「うお！ スウエンのISカッコいいな！」

「そうか？」

「ああ！ アニメとかに出てきそうな見た目でさ！」

『無駄話はいい、さっさと出ろ』

「……了解」

千冬に促され、スウエンはカタパルトまで歩き足を固定する。

『織斑、しっかり見ておけ。カルバヤンの戦い方を』

「え？ お、おう……勝てよ、スウエン」

「解っている。スウエン・カル・バヤン、エールストライク、出る」

カタパルトによりアリーナへと飛び出したスウエンはセシリアと対

峙した。

「来ましたわね……」

「オルコット、織斑との戦いはどうだった？」

突然の問いに、セシリアは一瞬迷ったが。

「正直……考えさせられる事が多かったですわ」

「そうか」

『それでは始めてください』

開始のアナウンスと共に、セシリアは動き出す。

「喰らいなさい！」

青きレーザーはスウェンに向かうが、それをかわしビームライフルで応戦する。

「くっ！」

スウエンからの攻撃はブルー・ティアーズの非固定ユニットアンロックに直撃したが、セシリアの攻撃は一向に当たらない。

「ブルー・ティアーズ！」

その時、セシリアの声とともに非固定ユニットから四つの小型兵器が射出され、スウエンの周りを縦横無尽に飛翔する。

「BT兵器か……」

「これならどうです！」

セシリアの一声にビットの攻撃が激しさを増す。レーザーを回避し反撃の機会を見計らいビームライフルをセシリアに向けるが、一機のビットのレーザーによりビームライフルの銃身を貫通。破壊されてしまった。

軽く「ちっ」とスウエンは舌を打ち、エアーストライカーのビームサーベルを抜刀しようとするがビットのレーザー攻撃により中々思

うようにいかない。

「少しは堪えるでしょう？」

「ああ、そうだな……ッ!!」

エールストライカーの右側のスラストアーにレーザーが被弾し空中で何とか体勢を立て直す。

（この手の特殊武装はどれも苦手だな……仕方ない……同じ土俵で戦うとしよう）

スウェンがそう言い放つと、地面に急降下する。そして、瞬時にエールストライカーを量子化させ別のストライカーに換装する。強大な砲台の装備されたストライカー、ランチャーへと。

「背部の装備を変えた!？」

「機動力はエールほど無いが、このランチャーならば射程は問題ない」

右肩のコンボウエポッドに搭載されたバルカン砲をセシリアに放つ。ビームライフルとは違い、連射性に優れたバルカン砲は弾幕を作り、逆に攻撃の手を止められてしまった。

「このお！ チマチマと！」

無理やりスターライトMk-IIIを構え攻撃を加えようとするが、コンボウエポッドに搭載されたもう一つの武装、ガンランチャーとバルカン砲を放つ。誘導に優れたガンランチャーはセシリアを追尾し、弾幕を作るバルカン砲でビットを狙う。

セシリアはガンランチャーを受けながらも、ビットの操作をしバルカン砲を避ける。スウェンはビットの動きを見て、アグニを構え

「ここだ！」

アグニから放たれた高圧縮のビームは、一瞬だけ動きが重なったビットを3機纏めて破壊した。

「ブルー・ティアーズの動きを読んで！？ くっ！」

ビームを辛くもかわし、装着している残り2基のミサイルビットをスウェンに向けようとするが、既にスウェンは接近し、手にしたアーマーシユナイダーを振りかぶる。

「インターセプター！」

近接ブレードを呼び出し、刃を支えることでアーマーシユナイダーを受け止めた。

「近接武装は一応ある……か」

その時、スウェンの頭上に一つの小さい影。

「残りのか……!!」

レーザーが放たれる前にスウェンはランチャーから即座にソードに換装し、パンツァーアイゼン本体のキャニスターでレーザーを防ぐ。

「また装備を！」

またもやストライクの装備が変わる事に驚くセシリアの尻目に、スウェンはマイダスメッサーを投擲。見事最後のレーザービットを撃破した。そしてマウントされたシュベルトゲーベルに手をかけ

「断ち切る……！」

抜刀。そのまま振り下ろし、セシリアはシュベルトゲーベルの一撃を受けた。

それと同時にブザーが鳴り、試合終了を知らせる。

／※／

「凄いな！ スウェンのIS！」

ピットに着くや否や、一夏が興奮気味にスウェンに言う。

「少し落ち着かんか、馬鹿者」

「いでっ！！」

千冬から振り下ろされた鉄拳は、一夏の頭に振り下ろされ鈍い音が鳴る。

「瞬時に武装を切り替え、防御、そしてそこから攻撃に機転するとはな。だがいかんせん対応に困っていたようだな」

「はい、BT兵器というものが理解できていなかった俺のミスです」

「そうか……だが、織斑もカルバヤンもよくやった。今日はも休め」

「ああ」

「了解」

そうして、一夏、スウェン、セシリアによるクラス代表決定戦はスウェンの勝利となった。

のだが……

／※／

「一組のクラス代表は織斑一夏君に決定しました！ 一繋がりでいいですね♪」

翌朝のSHR、真那は笑顔で言うが納得いかない男が一人。

「あの、先生……どうして俺なんですか？」

「そ、それはですね、スウェン君が辞退したからです」

「え!？」

一夏はその言葉を聞くと、後ろを向きスウェンを見る。一夏のその目は何で辞退したんだよと言わんばかりのものだった。

「俺は決闘目的で試合をしたただけだ。元よりクラス代表には興味が無い、だから辞退した」

「じゃ、じゃあセシリアは……」

「今回の決闘で学ぶ事が多くて、わたくしの不甲斐無さを実感しましたわ。それにあなた方に対してわたくしも大人げなく怒ったことを反省しまして、一夏さんにクラス代表を譲ることにしましたわ」

「そう言うことで、お二人とも辞退して残ったのが織斑君でしたので、織斑君に決定しました」

真那の説明に一夏はただただ啞然とするのみ。だが、千冬は気にすることもなく

「クラス代表は織斑一夏。異存はないな」

「「「はい！！」」」

「なんでだよ……」

女子の声が重なる中ただ一人一夏は肩を落とすし、スウェンはそんな一夏の様子を見て僅かに口を綻ばせていた。

第十八話『苦悩せし少女との邂逅』

IS学園のグラウンドに一年一組の生徒達が千冬の前に整列していた。

「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、カルバヤン、オルコット。試しに飛んでみせろ」

「はい」

「了解」

「分かりましたわ」

三人は千冬の指示により前に出て、スウェンはストライクを。セシリアはブルー・ティアーズをそれぞれ展開する。だが、一方の一夏は白式を展開できていないようだ。

「えっと……あれ？」

「遅いぞ。熟練した操縦者なら展開に一秒とも掛からないぞ」

千冬の言葉に一夏は焦りながらも、右手に装着された白式の待機状態であるガントレットに左手を添え

「来い、白式！」

白式の名を呼び、何とか展開する事に成功した。千冬は「よし」と頷き

「よし、飛べ！」

その合図と共に、セシリアが先に、スウェンはエールストライカーのバーニアを吹かしてから空へと飛ぶ。少し間を置いて一夏も危なげながら飛び、二人の下に到達する。

スウェンはその一夏の飛行を見て

（あのおぼつかない飛び方……ラウラを思い出すな）

まだISを動かし慣れていなかった頃のラウラと一夏の姿がスウェンにとって重なって重なって見えていた。

『織斑、何をやっている。スペック上の出力は白式の方が高いはずだぞ』

「うぐ……」

通信で入る千冬の叱責に一夏は苦虫を噛み潰した表情をする。スウエンとセシリアは一夏と同じ所まで行く。

「確か教科書じゃ自分の前方に角錐を展開させるイメージ……だったけど、正直よくわかんねえ……」

「一夏さん、イメージは所詮イメージ。自分がやりやすい方法を模索する方が建設的ですよ」

「そう言われてもなあ……スウエンはどんな感じでやってるんだ？」

「オルコットの言うとおり、自分でやりやすい方法でやっている。そのやりやすい方法を見つけるまでが少し時間が掛かる。慣れるしかないな」

一夏は「成る程」と呟く。

『お前達、急降下と完全停止をやって見せろ。目標は地表から十センチだ』

「りよ、了解です。ではお二人とも、お先に」

セシリアは一気に加速、地面直前まで行き機動調整を行い完全停止を見事成功させた。

「上手いな……次は俺が行こう」

エールストライカーの全スラスターを吹かし地面が目の前まで迫ると、下部の独立したスラスターを下方に向け、勢いを殺し無事成功。

「お見事ですわ、スウエンさん」

「ああ……?」

「のわあああああ!!」

直後すさまじい音とともに一夏は着地するどころか盛大に墜落、地面に大きなクレーターを作り上げていた。

「……I Sでなければ即死だな」

「何を悠長な事を言ってるんですか！ 一夏さん！」

セシリアは一夏の下へと駆けていき、スウェンは一夏の作ったクレ
ーターの側による。近くにいる千冬は呆れ返った表情をしている。

「全く、グラウンドに穴を開けてどうする」

「ですが怪我が無くて良かったのでは？」

「……一度大きな怪我でもせねば怖さも解るまい」

「そういうものですか……ところで、あれはどうするおつもりで？」

スウェンの視線の先には、セシリアと箒が睨みあっている。

「放っておけ、直に終わるだろう」

「……了解」

そして千冬の出席簿で叩かれるまで二人の喧嘩はおさまらなかった
そうだ。

「カルバヤン」

授業が終わり、教室へ戻るスウェンを呼び止める千冬。

「グレイデント夫妻からお前宛に荷物が届いている。放課後第二
格納庫に行け」

「義父さん達から荷物？……了解」

千冬はスウェンに伝えた後職員室に行った。一夏がやってきて

「千冬姉と何話してたんだ？」

「俺の所に義父さん達から荷物が届いたらしい。放課後に取りに行
く」

「ということは、一夏さんの代表就任パーティーには出席なさらないのですのね」

側にいたセシリアの言葉にスウエンは頷く。他の生徒もそれを聞いており

「そっかく残念だな〜……」

「すまないな、お前達で俺の分も楽しんでくれ」

他の生徒たちはガツカリとした表情になっていた。

／※／

そして放課後。第二格納庫へ来たスウエンは、目の前にある大きなコンテナを見ていた。

「これか」

とりあえず、スウェンはコンテナに一つだけついているスイッチを押す。コンテナはゆっくりと開き、中にあるものを晒し出していく。姿が完全に露になったとき、スウェンは

「!?!?...これは」

ガトリングが搭載されたその機首に、X字型に広がっているポッド状の装備。そしてその橙色の配色。スウェンはこれが何なのか一目でわかった。

彼の目の前に存在するのは「ガンバレルストライカー」有名なのは連合軍の「月下の狂犬」と呼ばれた一人の兵士が105ダガーに装備していたストライカーだ。スウェンはまさかこのような所でこれを見るとは思わなかった。

コンテナの中を見るとブック型の端末機器が置いてあり、スウェンはそれを手に取り操作する。

「装備は俺の知っている物と変わらないか……ん？ AIを搭載しているのか」

端末を操作し、ガンバレルのデータを見ていく。驚く事にこのガンバレルはスウエンの言ってる通り、AIを搭載しておりそれを起動する事でこのストライカー最大の武装「有線式ガンバレル」の操作を手助けするというものだ。操縦者の脳波とAIによる操作で、スウエンが扱えるように設定されている。

「凄いな……義父さんと義母さんは良くここまで技術を……」

データに目を通していくと、ストライクとの接続、認識はスウエン自身でやるしかないみたいだ。ロイからはIS等の整備などを、スウエンはある程度教えられていたので何とかなる。幸い接続の仕方などは端末にある。

「始めるとするか」

そしてそんなスウエンの様子を機材の後ろから見ている、眼鏡を付

けた少女『更識 簪』。彼女は作業をしていたが、スウェンが格納庫へやってきた事により条件反射で身を隠してしまっていた。

「あの人が……本音と同じクラスの……」

簪はスウェンからスタンドポジションのストライクとガンバレルストライカーに視線を移す。どちらも見た事がないタイプのISと装備で、彼女の好奇心を突き動かすには十分のものであった。

「変な……見た目だけど……どういいう装備なんだろう……!？」

ガンバレルストライカーの機首が後部に折れ曲がり、プラグのような物が露出、ストライクの背部に接続された。ふとスウェンの表情を見ると、さっきと変わらないように見えるが心なしか喜んでいるようにも見えた。

コンソールを打ち、作業をしていたスウェン。接続は完了し、残すはストライクとストライカーの認識だが途中まで順調だったが、最終段階で詰まってしまった。何度操作しても、上手くいかない。ス

ウエンは深くため息を吐き、再度作業を再開しようとする

ガチャ

「!？」

「誰だ」

簪はもう少し近くで見たいと動いたが、足下のスパナに足が当たりスウエンに気づかれてしまった。無言で機材の後ろから出て、スウエンの近くまで行く。

「君は？」

「四組の……更識……簪」

「俺はスウエンだ。ところで更識、君は――」

「苗字で呼ばないで」

「……わかった、なら簪。君は何をしていた？」

「これを見てた……」

簪が横を向く。勿論その先にあるのはガンバレルストライカーを装備したストライクだ。

「これに興味があるのか？」

「……うん」

「そうか……動くところでも見せてやりたい所だが、最後に詰まっ
てしまったな」

「見せて……」

「？」

スウェンは言われたとおりに端末を簪に手渡す。端末を数秒見た後、
簪はコンソールを打ち始めた。すると認識が成功し、ガンバレルス
トライカーとストライクは完全に接続された。

「！？ どうやって……」

「簡単だったよ……？」

「……感謝する」

そう言い、スウェンはそのままはゆっくりと背を預け、ストライクを身に纏う。格納庫の少し広いところに行くところと集中力を高め

「……行け」

四基のガンバレルは本体から離れ、有線誘導により動き出す。スウェンはAIによる恩威を受け自由自在に操作でき、有線のため範囲に限界があるが、自分の周りや簪の頭上に移動させたりし動作テストは難なく終えた。ガンバレルは本体に戻り、スウェンはストライクを待機状態にする。

「動作に問題は無し……ありがとう、簪。お陰で難を乗り越えた」

「……別にお礼は……良い。面白いものも見れたし」

簪はそう言い、踵を返し何処かへ行った。

「……さて、そろそろ寮に戻るか」

そうして作業を終えたが、コンテナや機材の片付け、コードが絡まったりしてしまい時間が掛かってしまったスウェンであった。

第十九話『凰鈴音』

「おはよう、織斑君！」

朝、席に着いた一夏とクラスメイトが挨拶を交わす。直ぐ後にスウエンも教室に入ってくる。

「おはよう、スウエン」

「ああ、おはよう」

スウエンはそう言うと、自分の席である一夏の後ろの席に座る。

「そう言えば二人とも聞いた？ 二組のクラス代表が変更になったって聞いている？」

「代表を変更？」

スウエンは少し興味有り気に反応する。

「うん、名前は忘れたけど、中国から来た転校生に変わったの」

「ほう……この時期に、ましてや中国からか……だが二組の話だ、騒ぐ事でも無い。それよりも織斑、お前は来月のクラス代表戦に向けて備えるべきだ」

「そうですわ！ 是非勝っていたただかないと！」

「が、頑張る……」

「けど、今のところ専用機持ってる代表は一組と四組だけだから余裕だよ」

「その情報、古いよ！」

一人のクラスメイトがそう言った瞬間教室の入口のほうから声が聞こえた。その声に反応してか、一夏は誰よりも先にそちらを見る。髪を左右に結び、肩を露出するように改造された制服を身に纏う生徒だ。

「二組も専用機持ちが代表になったの、そう簡単に勝つ事なんて出れないから」

腰に手を当て、自信満々に言うその少女。小柄だがどこか堂々とし

た気迫のある雰囲気醸し出している。

「!? 鈴……? お前、鈴か!」

「そうよ。中国代表候補生『凰鈴音』。今日は宣戦布告に来たってわけ!」

ビシィ!という効果音が鳴りそうな位に一夏の事を指差す鈴音。

「知り合いか?」

「ああ、あいつも幼馴染なんだけど……鈴、お前何恰好つけてるんだ? すげえ似合わないぞ」

「んなっ……!? なんてこと言うのよ、アンタは!」

先程の気迫は何処へやら、一瞬にして消え去る。するとゴツツと鈍い音が鈴音の頭から鳴る。鈴音は振り返り

「何すんのよ!?!」

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

「ち、千冬さん……」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、邪魔だ」

「す、すみません……」

千冬の言葉に顔色を変え、一夏の方を向き

「またあとで来るからね！ 逃げないでよ、一夏！」

そう言い残していった鈴音であった。

「ふっ……」

「何だよ、スウエン」

「いや、お前もつくづく。と思ってな」

「何だよそりゃ……」



そして昼休み。一夏はスウエンを誘い、食堂へ向かった。スウエンだけではなく、箒やセシリア、他のクラスメイトも一緒にいつてきた。

「さて、座る場所、座る場所と……」

「待ってたわよ、一夏！」

一夏は座る場所を探していると、長テーブルに座っていた鈴音が声を掛けてきた。丁度周りには空席が幾つかあるので

「おお、鈴。席いいか？」

「え？ ま、まあ好きにすれば？」

「じゃあ座ろうぜ」

そうして一夏を含めたクラスメイト達は席に着く。スウエンは一夏から離れた端の席に座る。

「それにしても久しぶりだな。ちょうど丸一年になるのか。元気にしてたか？」

「げ、元気にしてたわよ。アンタこそ、たまには怪我病気しなさいよ」

「どういう希望だよ、そりゃ……」

「で、いつ日本に帰ってきたんだ？ おばさん元気か？ いつ代表候補生になったんだ？」

「質問ばっかしないでよ。アンタこそ、なにIS使ってるのよ。ニュースで見たときびっくりしたじゃない」

久しぶりの再会に会話が弾む二人であったが、箒とセシリアが席を立ち二人の前に行き

「一夏、そろそろどうい関係か説明してほしいのだが」

「そうですわ！　もしかして一夏……この方とつ、付き合ってたっしやるんじゃない……」

「べ、べべ、別に私は付き合ってる訳じゃ……」

「そうだぞ。なんでそんな話になるんだ。ただの幼馴染だよ」

「……」

「？　何睨んでるんだ？」

「別に！」

そっぽを向いて明らかに不機嫌そうに堪える鈴音

「織斑君の幼馴染かぁ。まさか二人もいたなんて」

「びっくりだよねぇ」

鈴音と一夏のやり取りを見て、少し遠目の席に座っているクラスメイトが言う。スウエンはそんな二人には視線を送らず、ただ昼食を

とっていた。今日の彼の昼食はカレー。IS学園の料理はどれも絶品であるが、スウェンはいかんせん部隊でカレーばかり食べていたせいか、他のメニューには目もくれずカレーばかりを頼んでいるらしい。

そうこうしているうちにスウェンは既に食べ終えていた。

「スウェン君食べるの早い!？」

「おおくスッチー早食いだねー」

「……食事は迅速に、だ」

スウェンはトレーを持ち席を立つ。

「スウェンもう行くのか？」

「少しやる事がある」

「そっか、じゃあ後でな」

「……ああ」

止めていた足を再び動かして行くスウェン。鈴音は一夏の方を向き

「あれがもう一人の男のIS使用者？」

「ああ、スウェン・カル・バヤンって言ってドイツの代表候補生なんだ」

「へえ〜……なんかくそーなヤツ」

「でもないぞ、実際話せば結構良いやつだし」

「そうなんだ。まあ、強そうに見えるのは確かだけどね……」

／※／

「つくし……風邪でも引いたか？ 健康管理はきちんとしている筈だが……」

スウエンは廊下を歩いていると、一人の生徒とすれ違う。

「君がスウエン・カル・バヤン君ね」

「……？」

立ち止まり振り向くと、その生徒は扇子を右手に持ちスウエンの方を向き

「私はIS学園生徒会長『更識 楯無』よろしくね」

楯無と名乗る生徒の胸元のリボンは黄、つまり二年生だ。スウエンは一つの言葉に注目した

「更識？……まさかだと思うが、簪の……」

「そう、あの子の姉よ」

扇子を開き、そこには「姉」と書かれている。

「それで、俺に何の用だ？」

「そんなに警戒しなくてもいいのに。ただ挨拶をしようと思ってだけ、織斑　一夏君ともう一人の男性 I S 搭乗者の君にね」

「……そうか」

「スウェン君はこれから時間ある？　もしよければちょっと一緒に

――」

「断る」

「……理由を聞いてもいいかしら？」

「お前の言葉には何か裏が有るように聞こえる。俺は聊かそれが不愉快だ、次に会う時はそれを無くしてから来てもらおう」

スウェンはそう言い残し、楯無は一切見ず歩いていった。

「……一筋縄ではないかないという事ね。面白い人……」

第二十話『人々の違い』

放課後のアリーナ。一機のISが10個のターゲットに囲まれている。

「……」

白のIS、ストライクを身に纏っているスウェンはターゲットの位置を確認し、ガンバレルストライカーを装備する。そして動き出す。

ガンバレルを本体から飛ばし搭載されたレールガンを展開、ターゲットを狙う。スウェンの後、6時の方向にあるターゲットを一基のガンバレルが撃ち抜き、次に8時の方向。残り三基のガンバレルも操作し、ターゲットを次々に破壊していく。

「……まだ上手くないか」

全てのターゲットを破壊しガンバレルをスタンバイ状態に戻すと、辺りを見渡す。スウェン自身が破壊したのは4個、残りはAIの補助によって破壊出来た物だ。

「出来る事ならAIの補助無しでも操作出来るようになりたいが…」

スウェンにとってこの手の遠隔操作武装は慣れず、AIの補助があってもそれは変わらない。いや、逆にAIの補助が無ければ二基動かすのにも一苦労だろう。この数日間であろうやく四基同時に動かすようになれたのだから、あることに感謝すべきだろう。スウェンはそう思う。

格納庫に行き、先程の訓練で不具合が出来ていないかどうか、スウェンはメンテナンスをしている。

「問題は無しか…：…どうした？ 簪」

何時の間にか背後に居た簪に、振り返る事無く呼びかけるスウェン。

「さっきの…：…凄かった」

「見てたのか？」

振り向きそう言うと、簪は静かに頷く。

「どうやって動かしてるの……？」

「あまり俺も詳しい事は知らないが、俺の脳波で動いているらしい」

「脳……波？」

「ガンバレルが俺の「目標を撃て」等の指令を脳波で受信、それを行動に移す。だが一度に四基操作するのは難しいが、ガンバレルにはAIが搭載されていて俺の補助をする。俺が撃ち漏らした対象をAIが撃ってくれたりと助かりはするのだが……最終的には補助無しで操作したいものだが、どうにも上手くいかなくてな」

「……スウエンは何でも出来るんだね……ISの事とかも色々出来るようだし、知識だって操作だって出来るし……」

「人には出来る事、出来ない事がある。俺には出来る事があって、簪には出来ない事。簪には出来て、俺には出来ない事。様々ある」

「私に……出来る事？」

「ああ、それを見つければ自分の価値を見出せる。努力を欠かさない事だ」

スウェンは端末を閉じ、スタンドポジションのストライクを待機状態にする。

「それではな簪、何かあったら俺に言ってくれ。力になれることはあると思う」

そう言い、スウェンは格納庫を立ち去る。簪は「別にいい」と言いたかったのだが、スウェンのまっすぐな表情を見て、それが言い出せなかった。

「努力を欠かさない……私にしか出来ない事……」

簪はスウェンに言われた事を思い出す。

「……頑張ってみようかな」

／※／

「スウェンのISってさ、何世代なんだ？」

「……何だ、唐突に」

食堂に来たスウェンは一夏、箒、セシリアとバッテリー会い、一緒に食事をとっている。

「いや、専用機でも第二世代とかあるみたいだしさ、スウェンのは何世代なのかなって」

「わたくしも気になってましたわ。スウェンさんのISに搭載されたストライカーシステム、その戦闘によって特化する武装に次々変えていく画期的なシステムを搭載されているのですから、第三世代かとわたくしは思うのですが」

「いや……ストライクが完成したのは約6年前、世代からいけば実質第一世代だな」

「「ええ！？」」

驚くのは箒とセシリア。一夏は何故か全くわからない様子。

「何でそんなに驚くんのだ？」

「一夏、授業でやっただろう！ 第一世代は試作機段階。今は殆ど使用されていなくて、見る事もあまり無いんだぞ」

「そ、そうだったけ……」

「第一世代の時期にそのようなシステムが作られていたなんて……ドイツも侮れませんわね」

「そういえば、デュノア社がドイツのとあるシステムを作った技術者と共同しているところ最近聞いた事があるな」

「前そんな話をしていたような……よく覚えていないな」

「へえ……つまり、世代が離れても技能しだいでどうにかなるってことか。すげえんだな、スウェンって」

「煽ってもなにも出んぞ」

「わ、わかってるって……」

スウェンの言葉に思わず苦笑する一夏。

食事の手を止め、俺は織斑達を見る。

笑っている

俺には何故このようにして笑っているか未だに解らない。他愛の無い話をして、ここまで笑えるものなのだろうか？ リズが助かったとき、俺は自然的に笑む事が出来た。だがそれきりだ。

「スウェン、大丈夫か？ さっきから飯進んでないみたいだけど…」

「具合でも悪いのですか？」

「……いや、考え事をしていただけだ」

心配そうに声を掛けてきた織斑とオルコットは、俺の言葉に安心した表情を見せる。篠ノ之はこちらを見ずに

「お前が考え事とは珍しいな」

「何か考え事か？ 俺でよければ相談に乗るぞ？」

「大丈夫だ、一人でどうにかなる」

「そ、そっか……」

その織斑の提案はありがたいものだが、こればかりは俺の問題、他人に言う事必要などはない。

「けどさ、何かあったら言ってくれよな？ 俺達は友達なんだからさ」

「……ああ」

満面という言葉が似合うだろう、織斑は俺にそう笑いながら言う。

簪に言った出来る事、出来ない事がある。人は自分が出来ない事を

他人が出来れば、それを羨ましく思う。

こんなにも感情を顔で表す織斑を、俺は羨ましいと思った。この友人と言う輪の中に居れば俺は笑う事が出来るのだろうか。いつか、皆のように……。

第二十一話『クラス対抗戦へ乱入へ』

早朝。スウェンは本音に耳に息を吹きかけられた以来、彼女より早く起きるようにしている。現在、寮の近くの自販機でコーヒーを買いベンチに座ってゆっくり飲んでいた。

「あれ？ あんた……」

「？」

不意に声を掛けられそちらを向く。

「凰鈴音だったな」

「そうよ。あんたはスウェン……でいいのよね」

「ああ」

「隣良い？」

「ああ」

鈴音はスウエンの隣に座る。だがお互い何も話さないため、沈黙が続いていた。それに耐えかねたのか、鈴音が

「……そういえば、一夏のヤツどう？」

「どうとは？」

「えっと……頑張ってるのかなーって」

「頑張っているとは本人から聞いている」

「聞いてるって……あんた一夏と一緒に自主練とかしてないの？」

スウエンは静かに頷く。

「その様子だとお前は織斑とは会ってない様子だな」

「うん……」

「あの昼食の時、凰と織斑は親しい関係だとわかった。それなのにここ最近会っていないと言う事は、織斑と何かあったのか？」

「まあ……話ちょっと長くなるけど良い？」

「構わない」

それから鈴音はあの昼食後の事を語った。

一夏が鈴音との約束を間違えて覚えており、鈴音はそれに激怒。一夏と喧嘩をしたらしく、それで顔を合わせていない様だ。

「……とまあそんな訳で。正直、一夏が悪い——と言いたいけど、私も少し言いすぎたかもだし……」

「ならば言い過ぎたことを謝ればいいだろう」

「そ、そんなの出来るわけないじゃない！」

飛び上がるようにベンチから立ち、怒鳴るように言う。素直ではないな、とスウェンは思いたため息を吐く。

「まあどちらにせよ、嵐も悪ければ織斑も悪い。今日のクラス対抗戦で白黒つけるんだな」

「そうね……一夏にギャフンと言わせてやるわ！　そしてその後……」

スウェンは飲み干したコーヒーの缶をゴミ箱に捨て立ち上がり、ポケットに手をつっ込む。背を鈴音に向けたまま

「だが……そういう関係であるのも、幼馴染の特権……なのかもな」

「何か言った？」

「いや。他のクラスの代表に言うのもなんだが、頑張れ。それではな」

そうしてスウェンは一瞬だけ鈴音を見た後、寮に向かって歩いていた。

／※／

第二アリーナで行われるクラス対抗戦第一試合は、織斑一夏と凰鈴音。

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

アナウンスの合図に二人は距離を縮める。一方のスウェンとセシリアの一組の専用機持ちに箒を加えた三人はアリーナの管制室にいる。

「しかし、なかなかどうして会場が盛り上がっているな」

「それもそうでしょう。なんたって今注目の一夏さんと鈴さんの試合なんですから」

「そう言うものなのか……」

モニターに映された、鈴音のISS「甲龍」にスウェンは注目した。

（中国の開発した第三世代型ISS、甲龍か……）

赤黒い装甲に特徴的な非固定浮遊部位を持つ、その容姿を見て

「龍というのだから、どこか龍の要素があると思ったんだが……」

「何処に期待しているのだ、お前は」

箒の鋭い言葉にスウエンは黙り込む。

『それでは両者、試合を開始してください』

開始の合図と共に、一夏と鈴音は動き出した。一夏の「雪片式型」と鈴音の「双天牙月」。それぞれの武器が重なり合うたびに響く音、走る火花。

鈴音の斬撃に押されながらも何とか受け止めながら後方に飛ぶ一夏。双天牙月をまるでバトンのように軽々と扱い、一夏をどんどん追い詰めていく。

何とか隙を見つけ一旦距離を取ろうとした一夏だが、甲龍の片方の非固定ユニットが光り、空間が爆発するような衝撃に一夏は吹き飛ばされる。

「何ですの今のは!？」

「あれが「衝撃砲」か」

「衝撃砲？」

「ああ、空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃を砲弾として打ち出す兵器。データでは見たが、あれが第三世代兵器「龍砲」か」

「砲身の射角がほぼ制限無しで撃てるようですね……しかも砲弾自体が見えないなんて」

画面前の椅子に座る真那がそう言うと、箒は表情を強張らせる。一方のスウェンは表情一つ変えずに、戦闘を見続ける。するとスウェンは一夏の動きの変化に気づいた。

「織斑君、何かしようとしてますね」

「イグニッション瞬時加速だろう。私が教えた」

「瞬時加速？」

真那の後ろに立つ千冬は頷き

「一瞬でトップスピードを出し、敵に接近する奇襲攻撃だ。出しどころさえ間違わなければあいつでも代表候補生と渡り合える。ただ

し……通用するのは一回だけだ」

その言葉を聞き、スウエンは

（瞬時加速に白式の単一能力の零落白夜……上手く事を運べれば……）

もしくは、という言葉を考えるその瞬間

「「「ッ!?!」」」

すさまじい衝撃がアリーナを襲った。同時にアリーナの中央から発生した爆炎と煙が巻き上げられ辺り一面を覆う。

「な、何が起きましたの!?!」

「システム破損! 何かのアリーナの遮断シールドを貫通してきたみたいです!」

「試合中止! 織斑、凰! 直ちに退避しろ!」

状況を直ぐに判断し、一夏と鈴音に通信をする千冬。

「これは……アリーナに所属不明機を確認！」

その時、煙の中から一夏達に向けて一筋の緑の閃光が放たれ、一夏は鈴音を抱え回避する。煙が徐々に晴れ、その所属不明機が姿を現す。

「何ですの……あれ……」

その姿を見て思わず声を漏らすセシリア。スウェンは目を疑った、何故あれがここにあるのかと。

（……まさか……いや、間違いない。あれは……）

人型の上半身に、下半身は6脚の脚部によって支えられ半人半虫のような外観を持つその容姿。

（ゲルズゲーだと……？）

Y M A G | X 7 F / Y M F G | X 7 D "ゲルズゲー"がモニタ
ーの向こう、一夏達の眼前に居た。

／※／

突如として飛来してきたその存在は、一夏達に牙を向けた。放たれた閃光をかわした一夏はハイパーセンサーの簡易分析によって提示されるデータを見る。

「ビーム兵器かよ……しかも、セシリアのISより出力がはるかに上だ。あんなもの喰らったら……」

ISを纏っていても、間違いなく危険だ。データが一夏にそう告げているのだ。煙の中から現れたその異形な姿に

「何なんだよこいつ……こんな見た目でもISなのかよ……」

さながら蜘蛛のような身体に人の上半身がついたようなその姿。

「お前、何者だ！ 何の目的があって来た！ 答えろ！」

それに対する返答は無い。すると、真那から通信が入る。

『織斑くん！ 凰さん！ 今すぐアリーナから脱出してください！
すぐに先生たちがISで制圧に行きます！』

一夏はその言葉に対し

「皆が逃げるまで時間を稼がないと」

『そ、それはそうですけど……でも！ いけません、おr——』

通信を切り、鈴音に視線を向ける。

「やれるな、鈴」

「だ、誰に言ってるのよ。そ、それより離しなさいってば！」

「わ、悪い……」

一夏と鈴音が離れた瞬間、二人にビームが迫りそれをかわす。

「向こうはやる気満々みたいね」

「みたいだな」

侵入者は地を歩き、空中に居る二人を確認する。

「一夏、あたしが衝撃砲で援護するから突っ込みなさいよ。武器、それしかないんでしょ？」

「その通りだ。じゃ、行くぞ！」

第二十二話『ガンバレルストライカー』

「くそっ！ こいつ！」

一夏はゲルズゲーの攻撃をかわしつつ反撃の機会を伺うが中々隙を見せない。鈴音が龍砲を放つと、地面を猛スピードでその6脚を生かして移動し回避する。

「あゝ！ 蜘蛛みたいで気持ち悪い！！」

鈴音は龍砲の出力を高め、ゲルズゲーに撃つ。すると、突然ゲルズゲーは足を止めると砲弾の方を向き両肩と下半身の中央部が発光。ビームシールドを張り、砲弾を完全に遮った。

「あれを防いだ!?!」

「嘘でしょ……」

一夏と鈴音は目の前で起きたことに驚愕する。ビームシールドが消滅すると、両手のビームライフルは一夏達を再び標的にする。



「もしもし!? 織斑くん聞こえますか? 鳳さん! 応答してください!」

真那は必死に一夏と鈴音に呼びかけているが、応答は無い。

「……だめです。通信できません」

「状況は最悪か……」

「もう! 何故通信出来ないんですの!?!」

「落ち着け、そう慌てるな。そこまで取り乱すとは、糖分が足りてないんじゃないのか?」

そう言う千冬は、コーヒーカップに白い粉末を入れる。だが、それ

は糖分のある砂糖ではなく、容器から出されたのは「塩」とラベルが貼られており、明らかに塩分がある塩であった。

「先生……それ、塩ですけど」

「……」

スウェンはその千冬の様子を見て

（相当焦っているな。無理も無いか……さて、どうしたものか）

モニターの向こうではゲルズゲーと一夏達による攻防が繰り広げられている。戦況は一夏達の不利。攻撃のほとんどはゲルズゲーの陽電子リフレクタービームシールド「シュナイドシュッツSX1021」によってことごとく防がれている。

一夏達はゲルズゲーの武装面などの知識は無い。あるのはこの場でただ一人、スウェンだけだ。彼が加勢すれば、この戦況を覆す事ができるかもしれない。それに、先程からの戦闘を見て気になったことがある。スウェンは直ぐに行動に移した。

「じっとしているなんてわたくしには出来ませんわ！ 今すぐいで

も援護に！」

「だから落ち着けと言っているだろう。カルバヤンを見習え。このような状況でも……」

後ろを向くが、スウエンの姿は既に無かった。

「居ませんわね……あれ？ 箒さんも！？」

「……あの馬鹿共が」

／※／

スウエンは管制室を飛び出し避難する観客の生徒の波を掻き分け、アリーナに向かっていった。

その時、警告音とともに照明が落ち非常用電源に切り替わる。そして前方、ブロック同士の境に隔壁が降りてきた。ようやく人の波を抜け隔壁が降りきる前に、スウエンはスライディングをし、寸前の

所で通過した。

だが、アリーナへ続く隔壁が次々に降りていく。スウェンはストライクを纏い、エールを装備してバーニアを最大稼働させ隔壁を通過していく。

「俺が着くまで持ちこたえろ……織斑、凰……！」

／※／

強固な防御を持つゲルズゲーは鈴音の龍砲を完全に無効化。一夏はそのビーム攻撃によって容易に接近できる状況ではなかった。圧倒的にこちらが不利だ。

「どうすんのよ！ あいつ正面から全く攻撃効かないじゃない！」

「やばいな……これは……ッ!？」

ゲルズゲーは飛び一夏に迫り、前脚部のクローを振り下ろす。雪片式型で一夏は防ぐと、鈴音はこれを好機にとゲルズゲーの後方へ移動し

「これで！」

龍砲を撃とうとしたが、ゲルズゲーの下半身背後に砲台が装備されていた。それが鈴音を射程に捉え

「きゃあー！！」

「鈴！　ぐっ！！」

2連装滑腔砲から放たれた砲弾が鈴音に当たる。一夏はクローによって吹き飛ばされ、距離を離された。ゲルズゲーは鈴音の方向に向き、ビームライフルと前脚部先端に装備されているビーム砲を構え

「鈴！！」

「ッ！！」

四本の閃光は鈴音に飛ぶ。鈴音は腕で身を防ぎ目を瞑る。

間違いなく直撃だ、とい鈴音は思い目を閉じたままにするが、3〜4秒経っても何もおきない。恐る恐る目を開けると赤いウィングのバックを装備した白いISがシールドを構えて鈴音の前に居た。

「無事か、凰？」

「え？……その声まさか、スウエン！？」

「ああ」

スウエンはシールドの構えを解き、鈴音に視線を移す。

「凰、お前はピットへ行け。あそこならば幾分か安全だ」

「な、何言ってるのよ！ 私は……」

「いいから行け、今の直撃でシールドはどれくらい削られた？ 後龍砲は何発撃てる？」

「うっ……わ、わかったわよ！ 一夏、スウエン！ 不本意だけど、ここからは任せるからね！」

鈴音は移動を開始する。ゲルズゲーが追撃すると予想しスウエンは身構えるも、ゲルズゲーは何もしてこなかった。スウエンは少し疑問を持ちながらも、鈴音がピットに戻るのを確認すると一夏の方へ行き隣に並ぶ。

「ありがとう、スウエン。お陰で鈴が助かった」

「何故お前が礼を言う……それよりも目の前の敵に集中しろ」

「ああ……けどさ、あいつ変なんだよ」

「変？」

「俺達が今こうして武器構えてないときは攻撃してこないんだよ」

「……」

スウエンはゲルズゲーを見る。確かに、一夏とスウエンが武器を構えておらずあちらも攻撃してくるそぶりも見せない。鈴音が引くときも、ゲルズゲーは攻撃してこなかった。

「動きも随分と機械染みてるし……もしかしてと思うんだけどアイツ、人が乗ってないんじゃないか？」

「人が乗っていない？……有り得ない、と言いたい所だが奴の動きは普通の人間とは違う」

「だろ？ 仮に人が乗っていないなら、容赦なく全力で攻撃できる……けど問題はあのシールドだな。バリア無効化攻撃も後三回が限度だし……」

「……織斑、少し俺に考えがある」

「え？」

一夏はスウエンの作戦を聞き、不安な表情になる。

「本当に大丈夫なのか？」

「ああ、俺の予想通りならば奴はシールドを張っている時は動けない。そこを狙え」

「……わかった、俺はスウエンを信じるよ。それじゃあ——」

行動を開始しようとした時、スピーカーから大声が響いた。

『一夏あっ！』

声の主は箒、発信源は中継室のようだ。

『男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする！』

肩で息をしながら大声を上げる箒。ゲルズゲーは中継室にビームライフルを向け、引き金を引こうとしていた。

「まずい！ 行くぞ、スウェン！」

「了解」

エアーストライカーからガンバレルストライカーへ換装し、バーニアを噴射し加速する。

「行け……！！」

4基のガンバレルは本体から切り離され、有線誘導による操作が始められた。ガンバレルはゲルズゲーの頭上へと行き、レールガンが展開され、ミサイルハッチが開かれる。

ガンバレルからレールガンの弾丸とミサイルを発射するが、ゲルズゲーはそれを各バーニアを吹かしながら姿勢を変えつつ回避する。

「よくあれをかわす……!!」

初見であれほどの弾幕をかわすのは容易ではない。やはり無人機の線が濃いとスウェンは判断し、攻撃の手を緩めずに続ける。

ゲルズゲーは攻撃の穴を見つけ、ビームライフルを乱射する。

「織斑、回避しろ！」

「わかってる！」

射線に入らないように、スウェンと一夏は回避行動を。スウェンは距離を取り、再びガンバレルを用い攻撃する。縦横無尽に飛び回るガンバレルはゲルズゲーを何処かに誘導させるように移動させる。

そして、ゲルズゲーが地上に移動し脚が地面についた瞬間

「うおおおおお!!!!!!」

一夏は瞬時加速を使いゲルズゲーへ一気に接近、雪片式型を振り下ろす。ゲルズゲーは陽電子リフレクターを展開し一夏の攻撃を防ぐ。

「ぐうう……！！ スウェン！」

一夏の上空へ居たスウェンはガンバレルをゲルズゲーの背後へ向かわせ、脚部に向けて一斉砲火する。ゲルズゲーの足元が崩壊し体勢を崩す。陽電子リフレクターは体勢が崩れた事によって解除される。

「これでどうだああ！！！！！」

ゲルズゲーの右肩から先を斬り上げ、高く飛ばされた左腕は爆散し切断された面から弾けた音がし、ゲルズゲーはがくりと体を落とす。

「やった………のか？」

そう言い、一夏が近づこうとした瞬間

「くっ！」

「うわっ！！！」

一夏はスウェンに突き飛ばされた。金属が強く削られるような音がし一夏がそちらを向くと、ゲルズゲーのクローに切り裂かれたスウェンが居た。

ゲルズゲーは左腕に持っていたビームライフルを投げ捨て、スウェンと殴り飛ばし。アリーナの壁に背を強く打ち付けたスウェンに向けて、クローに内蔵されたビーム砲を放つ。

「ぐあああ！！！」

直撃を受けたスウェンは悲痛な声を上げ、ストライクが強制解除されその場に倒れこんだ。

「このおおお！！！！！」

スウェンが倒された事に怒り、一夏は最後の一撃をゲルズゲーに与える事に成功した。ゲルズゲーのバイザー部は光を無くし、地面へと墮つ。今度こそ機能を停止した。

／※／

「……」

「目が覚めたか」

スウエンはゆっくりと目を覚ました矢先に、千冬の声が耳に入った。辺りを見渡すとそこは保健室のようだ。

「奴は？」

「織斑が止めを刺した、心配するな」

「そうですか……」

「全く、織斑共々無茶をしてくれる」

「……申し訳ありません」

ベッドに寝ているため頭を下げれないが、スウェンは目を閉じながら言う。千冬はため息を吐きながら

「だが……お前等が無事で何よりだ。それにお前のお陰で一夏は助かった……感謝している」

「俺は……友人を助けただけです。礼を言われるような事など」

「そうか。それと、お前には言わなければならないことがある」

「？」

「お前のIS、ストライクのダメージレベルがDを凌駕してしまった。破損状況も酷く、予備パーツを用いてもどうなるか……」

「つまり……」

「ストライクはもう動かない」

第二十三話『転校生』

「ストライクが……動かない」

「ああ」

千冬は深く頷き、スウェンにひびが入り、色がくすんだ黒の腕輪。待機状態のストライクを手渡された。

「一度ドイツに送って修復するにしても、2ヶ月……最悪でも4ヶ月はかかる可能性がある」

「4ヶ月……」

ドイツに送れば、ストライクは修復出来る。だが、4ヶ月という時間はスウェンにとっては長いものだ。スウェンはそれでも言うおうとしたとき、廊下からバタバタと足音が聞こえ、保健室の前で止まり

「ちいいちやああんっ!!!!!!」

扉が開いた瞬間、千冬に向かって満面の笑みで飛び込んで来た束。そのまま千冬に頭を掴まれ

「何をしに来た」

明らかに人の頭から発せられるはずの無い音がギリギリと響く。スウェンは「悶絶ものだな」と若干顔を引きつらせてその様子を見ていた。

「相変わらず容赦ないアイアンクロー！ それでも束さんは耐えてみせ」ならば耐えてみろ」ぐにゅにゅにゅ……」

更に腕に力をこめた千冬は、そのまま束を床に押さえつけた。だが束は直ぐに立ち上がり

「やーやー、改めてやっほー♪ 久しぶりだねーちーちゃん」

「全く、どうやって入ってきたんだが……先程も聞いたが、何をしに来た？」

「うーん、残念だけど今日用があるのはちーちゃんじゃなくてスーくんなんだよね」

「何？」

走りながらベッドの反対方向へ行き

「スーくん良い男の子になったね〜！ もう、東さんが食べちゃいたいくらい！」

「……用件はなんだ？」

「つれないねースーくんは〜。でもそんな所が素敵！」

身体をくねくねさせながら言う東に、スウェンは身体を起こし、呆れ返り言葉を発しようとしたが、人差し指で口元を押さえ

「わかってる、わかってる。今ストライクが大変な状況なんですよ？ スーくんはどうするのかな〜？」

「何故それを知ってるかは知らないが……一度ドイツへ送り、修復作業をしてもらう。最悪4ヶ月かかるらしいがな」

「ほうほう！ 確かにそれだと確実に直るね〜時間掛かるけど」

「うくん」と顎に手を沿え、暫し考える。そして胸に手を当て

「ねーね、スーくん、東さんにストライク任せてみない？」

「お前に？」

「そう！ この天才的東さんなら、4ヶ月どころか一ヶ月！ いや！ 今日から一週間以内に直して見せるよ」

「!？」

東の言葉にスウェンは啞然とする。すると千冬が

「カルバヤン、東はこのような奴だが、腕は確かだ。一週間以内に直す事も造作もないだろう」

「……」

右手に持ったストライクを見つめ、東の方を向き

「……わかった、お前に任せてみよう」

「さっすが！ スーくん話がわかる！ ささ、早速渡してね」

両手をスウエンに差し出し、スウエンは束の両手の平にストライクを置く。束はくるっと後ろを向き、窓の近くへ行く。

「そうだ、ストライクなんだけど、束さんなりにスーくんの使いやすいうように強化してあげようか？」

「使いやすくなるのなら頼もう。武装の方だが……」

「みなまで言わなくても、束さんにはしっかりとわかってるから大丈夫！ それじゃあね、スーくん、ちーちゃん！」

サムズアップをした後、束は窓から外に飛び出した。下の方から「人が落ちてきた！」と悲鳴に近い声が聞こえた気がするが、スウエンと千冬は聞かないふりをする。

「……まるで嵐のようですね」

「全くだ……ともあれ、ストライクはこれで安心と言う事か……私は今日の事について色々やる事がある。お前も身体を休める為に早く自室に戻れ」

「了解」

そうして千冬が保健室を出ようと扉開けると、そこには一夏が居た

「織斑か」

「千冬姉、スウエン……起きてるか？」

「ああ、話したいならさっさとしろ」

「わかった」

一夏は千冬の隣を通り過ぎ、スウエンの居るベッドの下まで来た。
そして頭を下げ

「ごめん！俺がちゃんとあいつが機能停止してるか確認せずに不用意に近づいて、それでお前にこんな目に合わせちゃった……本当にごめん！！」

肩を震わせ、ずっと頭を下げている一夏。

「頭を上げろ、織斑。謝罪する必要はない……ただ」

「？」

「篠ノ之が無事で良かった、鳳が無事で良かった、お前が無事で良かった。それで十分だ」

「スウエン……」

ベッドから降り、スウエンは一夏の隣に立ち肩に手を置く。

「相変わらずお前はお人好しだな。だがそれがお前らしさだ……自分を失うな、自分を信じろ、そして自分にしか出来ない事を見つけてろ」

そう言い、スウエンは保健室の扉の前に立ち。

「これからの訓練だが、一人で自主練というのも限界があるのでな……お前達と一緒にやっても良いか？」

「あ、ああ！ 勿論！」

「そうか、感謝する」

そしてスウエンは保健室を出て行く。

「……」

一夏は触れられた肩を右手で触れる。

俺が無事で良かったとスウエンは言ってくれた。怪我が無かったとはいえ、あんな目に合わせてしまった俺の事を。

初めてあいつと会ったときからだ。何時もポーカーフェイスで何を考えてるか解らなくて、話すらそうな印象だった。でも意外と良い奴で、よく困ったときも助けてくれたりした。

だけど、やっぱりあいつの笑った表情を見たときが無い。時々俺は不安になる、スウエンは俺の事をどう思っているのか。俺の事を友達として見ていないんじゃないかと、俺は不安になった。

今回の無人機の一件で、スウエンと顔を合わせるのが怖かった。もう、前みたいと一緒に話したり出来ないんじゃないかって。けど、向き合わなきゃ前に進めないと思って、会いに行った。そしたら、スウエンは俺が無事で良かったと言ってくれた。あんな目に合わせた俺の事を。しかも、あの時の表情……。

「スウエン……笑ってたな」

／※／

あの無人機の事件の影響で、クラス対抗戦は中止。データ収集を目的に模擬戦を行った事により、事態は比較的穏便にすんだ。あの無人機は何だったのか、何が目的でIS学園へ侵入してきたのか、それがわからぬまま、時間だけが過ぎていった。

そして事件から数日後の、6月始めの月曜日。スウエンは学園に行く前に、寮の掲示板に張り出されたお知らせを見ていた。

6月最終月曜日に、学年別トーナメントというものが行われる。勿論、スウェンもこのトーナメントには出場する予定だが、問題が一つ。

例の無人機乱入事件があり、個人トーナメントからタッグ制に変わった。つまり、ペアでなければ出場できない。スウェンは誰とペアになるかを考えていた。

「織斑は……篠ノ之かオルコット辺りと組むことにはなりそうだな……どうしたものか」

これといって親しい者もない。時間はまだあるため、スウェンは後々考えようと決め、学園へ向かった。

／※／

「やっぱりハヅキ社製のがいいなあ」

「え？ そう？ ハツキのってデザインだけって感じしない？」

「そのデザインがいいんじゃない！」

「性能面なら、ここ最近出た新しいステイティング社が注目よね。着やすいらしいし」

「それならアウル社のも捨てがたいわよ」

クラス中の女子がISスーツのカタログを持ってあれやこれやと意見を交わしている。IS学園指定のスーツである必要はなく自由に選べるのだ。ここ最近、新参の会社が3社も現れ、女子の間では非常に熱が入っている。一人のクラスメイトが、一夏の方を向き

「そういえば織斑君のISスーツってどこのやつなの？ 見たことない型だけど」

「あー、特注品だって。男のスーツがないから、どっかのラボが作ったらしい。えーと、もとはイングリット社のストレートアームモデルって聞いている」

女子達は「へー」などと声を上げる。そして、スウェンが教室にやってきて、一夏達の下に行き

「おはよう」

「おはよう、スウェン」

朝の挨拶を交わす。

「随分と盛り上がっていたみたいだが、何の話題だ？」

「ISスーツの事だよ。スウェン君のはどのやつ？」

「ステラ社のハイモバイルモデルという高機動戦に特化しているスーツを使用している。昔はハヅキだったんだがな」

「ステラ社って、ここ最近増えたところのだね。どうりで見た事がないと思ったよ」

因みに、現在スウェンの使っているステラ社のハイモバイルタイプとは、まだ彼がMSに搭乗していた時に着ていた、パイロットスーツと酷似しているため、スウェンは好んで使用しているとの事。

すると

『一年一組、スウエン・カル・バヤン君、今すぐ第三格納庫まで来てください繰り返します——』

「もう少しでSHRが始まると言うのに……呼ばれたからには行くしかないな」

放送で呼ばれたスウエンは軽いため息を吐き、第三格納庫へ行く事にした。

「何かあったのかな、スウエン君……」

「確かに……」

「諸君、おはよう」

「お、おはようございます！」

教室に入ってきた千冬の挨拶に皆がそう返し、騒がしかった教室が一気に静まり返る。

「今日からは本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるがISを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように。各人のI

Sスーツが届くまでは学校指定のものを使うので忘れないようにな。忘れたものは代わりに学校指定の水着で訓練を受けてもらう。それもないものは、まあ、下着で構わんだろう」

下着はダメだろと思ったのは、一夏だけではないはずだ。千冬は後を真那に任せる。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！」

「え……」

「しかも二名です！」

「「えええええっ!?!?!」」

突然の転校生紹介に静かだったクラスが騒がしくなる。この時期の転校、間違いなく代表候補生か、特別な処置を受けた者、またはかなりの実力のある生徒だろう、そう推測される。

教室の扉が開き、二人の生徒が入室してくる。クラスの全員から、一人の生徒に視線が集まる。何故なら、その生徒は一夏とスウェンと同じく、男子の制服を着ているからだ。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いと思いますが、皆さんよろしくお願ひします」

礼儀正しい自己紹介。クラスの誰かが、ボソリと呟く。

「お、男……?」

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を——」

整った顔立ちに、首の後ろで纏められた濃い金髪はよく手入れがなされている美しさがある。女性と見間違えうほどの華奢な体からみてもまさに「貴公子」というべき姿をしていた。

「き……」

「?」

一夏は前のスウェンの事を思い出し、耳を塞ぐ。案の定、爆弾は

「「「きゃあああああ————ッ!!!!!!」」

爆発した。一夏はスウェンが居たらこう言うだろうと予測した

『まるで前にやったゲームにあった、音〇弾を耳に直接ぶつけられたようなものだ』と。

「男子！ 前代未聞の3人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「しかも織斑君とスウェン君とは違う守ってあげたくなる系！」

「人間に生まれてよかった〜！」

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

若干めんどくさそうに言う千冬。真那は慌てて事態を収めようと

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから〜！」

シャルルの隣に立つ銀髪の長髪に、注目を集めるその左目に付けられた黒い眼帯。そしてその小柄な体から想像もできない気迫と威圧

感。

「……挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教師織斑」

千冬に対する呼び方がスウェンと同じ。一夏はそう思い、ラウラを見ている。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ。これからの学園生活、よろしく頼む」

自己紹介の仕方スウェンと似てると一夏が思った矢先、ラウラは一夏の前に立っていた。

「貴様が……織斑 一夏……貴様のせいで、隊長が……」

「え？」

何処か怒りが混じり、何処か悲しさを感じさせる小さな声が一夏だけに聞こえた。

「ラウラ、何をしている」

「いえ、何も」

「ふん……ではHRを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散！」

クラスの皆はその一声と同時に、慌しく動きはじめたのであった。

第二十四話『衝撃《ストライク》再び』

放送で呼ばれ、第三格納庫へとやって来たスウェン。扉を入ると格納庫内は暗く足元が見えない。ぶつからないように明かりを灯す為のスイッチを探そうとする。

「こうも暗いと危険だな……?」

するとある場所だけにライトが当てられる。そこには腰に手をあてニコニコと笑顔な束が立っていた。

「ふっふっふと待っていたよスーくん！　そして待たせたねスーくん！」

「その様子だと改修は完了したようだな」

「もちろんだよ！　そうでなきゃこうしてスーくんを呼ばないからね。それじゃあ、修復アンド改造が完了したストライクの姿をごらんあれ！」

束が右側の方を指差すとライトが灯る。そこには一機のISが鎮座していた。

そこにあるのは確かにストライク。だが外観が所々違う。胴体の色は暗色に染められ、両肩にはスラスタの様なものが追加。両腰にはアーマーシユナイダーを格納していたホルスタはなく、ハンドガン型の武装が装備され、頭部のアンテナとマスクのダクトにも変更点が見られる。スウェンはそのストライクに歩み寄る。

「束……一体これは……？」

「あまりの変わり様に驚いたかい、スーくん。このストライクは今までのスーくんの戦闘データを元に、装備の変更とサブスラスタ等の追加によって機動力を上昇させた全く別次元のストライク！ その名もストライクT（たばね）スペシャル！」

「その名前だけは却下しておこう」

「えー」

ぶくっと頬を膨らませて不満を見せる束。

「あーそれと、エールストライカーをちょっと改造したんだよ」

「エールを？」

「うん、エールを素体にその機動力とソードの近接性能、ランチャーの火力を混ぜて、更に格闘寄りに特化させた新しいストライカー！」

ストライクの背後に二対の大型のウィングが搭載されたストライカーが現れる。ストライカーはそのままストライクに装備されると、装甲の色が白から黒を基調とした配色に変化した。それにもない、スウェンの表情が僅かに変わる。何故なら、その姿こそスウェンがMSのパイロットとして最後まで搭乗していた機体。G A T - X 1 0 5 E + A Q M / E - X 0 9 S "ストライクノワール"そのものだからだ。

「驚いたでしょ！ このストライクはストライカーによって、装甲の色が変化するという面白い機構を追加したのだ！ 因みにその新ストライカーの説明なんだけど……」

「必要ない、もうこれが何なのか理解した」

「早い！？ スーくんいくらなんでも早すぎるよ！」

「……」

驚く声を上げる束を尻目にスウェンは無言のまま、ノワールから視線を外さない。束は思い出したように

「そうそう、ランチャーとソードなんだけど、ストライクをすっきり別物に改造しちゃったから、色々不具合ができて装備出来なくなっちゃったから、改良してから持ってくるから待っててね」

「……ああ」

ストライクの方を向いていたスウェンは束の方を向き手を差し出す。

「ストライクをこれ程までに仕上げてください感謝する。俺はお前を誤解していた。束、お前は素晴らしい技術者だ。俺はお前のような技術者に出会えたこと、光栄に思う」

きよとんとした表情をする束。すると満面の笑みへと表情が変わり、スウェンの手を取る。

「うんうん！ スーくんにそう言って貰えるなんて束さん凄く感激だよ！ 何かあれば直ぐに言ってね！ 束さんが何でも聞いてから！ それと束さんは何時でもスーくんの味方だからね！」

手を放し、くるっと方向転換すると

「今からラボに戻って、ランチャーとソードの作業してくるから！
またね！ スーくん！」

全速力で走り抜け、一瞬にして姿が見えなくなってしまった。スウ
エンはもう一度ノワールの方へ向きなおし

「まさか、お前と再び会うとはな……運命というものは解らんもの
だ」

そう呟く。

「カルバヤン」

「教師織斑」

格納庫の入り口から千冬に声を掛けられるスウエン。

「先程束が全力疾走で駆け抜けて行ったのだが……何だったんだ？」

「自分には全く」

「そうか……どうやら、ストライクが戻ったみたいだな。SHRも終わった、第二グラウンドに向かえ。早急にだ」

「了解」

千冬が格納庫から出て行くのを見届け、スウェンはノワールに触れ待機状態にする。左腕に装着された腕輪は以前の黒のカラーに加え、灰色のラインが追加されていた。「よし」とスウェンは呟き、着替える為に更衣室へと向かった。

／※／

「そういえば、IS学園にもう一人男の人居るんだよね？」

シャルルはそんな質問を一夏に問いかけていた。

「ああ、スウェンっていう奴なんだけど朝放送で呼ばれたっつきり戻ってきてないな」

「そうなんだ。どんな人なの？」

「なんて言うのかな……基本無表情で、口数少なくて第一印象少し悪いけど、本当は友達思いで優しい奴なんだ。シャルルも直ぐに仲良くなれるよ。けど、訓練の時だけはマジで鬼みたいで――へブツ！」

一夏は突然後頭部に衝撃を受けた。何かと思い、後ろを向くと明らかに手刀を構えていたスウェンが居た。

「誰が鬼だ。ならば鬼らしくもっと過酷な訓練にしてやろうか？」

「え、遠慮しておきます……」

スウェンはロッカーを開け、横目でシャルルの方を見る。

「お前か、先程廊下でクラスメイトが騒いでいた三人目というのは」

「え？ あ、えっと、フランス代表候補生のシャルル・デュノアです。これからよろしく願います」

「俺はドイツ代表候補生、スウエン・カル・バヤンだ」

「ドイツ？」

「……どうした？」

「そう言えば、僕と一緒に転校してきた娘もドイツから来たような……」

「何？」

手を止め、シャルルの方を見るスウエン。

「そうだった、スウエンちょっと聞きたいことがあるんだけどさ」

「何だ？」

「ラウラ・ボーデヴィツヒって娘知ってるか？」

「!？」

まさかこの場所でその名前を聞くことになるとは思わなかったスウエンは、一夏でもわかる位に驚いた表情を見せる。

「何故その名前を？」

「そのドイツから来たのがラウラ・ボーデヴィツヒって娘でさ、スウェンなら何か知ってると思って」

「……時間が無い、さっさと着替えるぞ」

「へ？ うわ！ 確かにヤバイな！ 直ぐに着替えようぜ！」

一夏は焦った声をあげ、制服のボタンを上から一気に外して行く。
一方のスウェンには焦りが見えず、何時もどおり制服を脱いでいく。

「わあっ!？」

上半身裸のスウェンと一夏を見て妙な声をシャルルは上げる。

「シャルル、早く着替えたほうがいいぞ」

「織斑の言う通りだ、一組の担任は時間に厳しい……遅れても良い事はないぞデュノア」

「う、うん。き、着替えるよ？ でも、その、あっち向いてて……」

ね？」

「別に着替えを見る趣味はない、織斑があるかどうかは知らんが」

「いや、俺もないから！」

スウエンの言葉に全力で否定する一夏。そしてそれぞれ背を向けながら着替えを開始する。そんな中、スウエンは

（ラウラ……だと？ ドイツから来たというのだからラウラで間違いないか……これはどうなることやら）

少しばかり妙な胸騒ぎがするスウエンだが、今はそれを振り払い着替えを続けるのであった。

第二十五話『静かなる怒り』

着替えが済んだスウェンは直ぐに第二グラウンドに到着。一夏とシヤルルは未だ来ておらず、その5分後にようやく

「遅い！」

「「すいません！」」

二人は千冬に頭を下げ列の端に並ぶ。一夏の近くには凰とセシリアがおり何か話してるようだが、スウェンの位置は一夏の反対側の列の端、しかも一番後ろだ。会話は当然聞こえない。スウェンはそれよりも気にあり、ある方向へ視線を向けている。それは列の一番前に居る灰色のISスーツを纏う銀色に長髪の少女。

スウェンはその少女に視線を向けていると、一夏達の方から聞きなれた音が鳴り響く。またかとスウェンはため息を吐きそちらを向く。千冬の出席簿の一撃に頭を抑えているのはセシリアと凰。呆れた表情のまま列の前に千冬は立ち

「では、本日から格闘及び射撃を含む実践訓練を開始する」

「「はい！」」

2組も合同していることもあり普段よりも大きな返事が返ってくる。

「さて、まずは戦闘を実演してもらおう。凰！ オルコット！ 専用機持ちならすぐに始められるだろう。前に出ろ」

と名指しされたセシリアと凰だがあからさまにやる気のない様子だ。そんな二人に近づく千冬に、二人は出席簿がまた来ると身構えたが何かを小声で二人に告げている。

「やはりここはイギリス代表候補生。わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」

「実力の違いを見せるいい機会だよねー。専用機持ちの！」

「（ほう、急にやる気を見せたな。教師織斑はあの二人の扱い方を心得ているようだ）」

やる気に満ち溢れていた二人を見ながら内心そう呟くスウェン。

「それでお相手は？ 鈴さんとの勝負でも構いませんか？」

「ふふん。それはこっちの台詞」

「慌てるなバカども。対戦相手は——」

その時、何処からか風切り音聞こえる。それはどんどん大きくなっていきスウェンは空を見る。

「ああああ——ッ!! どいてくださあ〜っ!!」

上空から「ラファール・リヴァイブ」を見に纏った涙目の真那がまっすぐに一夏の方へ落ちてくる。

「のわああああ!!」

叫び声と共に凄まじい音がグラウンド内に響く。一夏の居た場所はクレータが出来ておりスウェンはそれを見て

「死んだな」

「ちょ! 何勝手に殺してんのよ!!」

退避した鈴音が遠くに居たスウエンの言葉を逃さず聞いており、そうツッコむ。そして煙が晴れると白式を纏った一夏が同じく纏っている山田の上に馬乗りになっていた。どうみても一夏が山田を押し倒したようにしか見えない。鈴音は笑顔になり青筋を立て甲龍を展開し

「いいちいかぁー！！！」

両刃形態の双天牙月を一夏に投擲。あわや直撃と思われたが異なる銃声が一発ずつ鳴り、双天牙月の軌道を変え一夏への直撃を避けた。

一夏や鈴音はもちろん、その場にいたほぼ全員が啞然としている。射撃を行ったのは二名で、その一人が真那だった。何時もの穏やかな表情と打って変わり、何時もの雰囲気とはまるで違う。

そしてもう一人はノワールを展開したスウエンだ。両手に持たれたM8F―SBI「ビームライフルシューター」による射撃と真那の射撃により双天牙月の軌道を変えたようだ。

「山田先生はああ見えて元代表候補生だからな。今くらいの射撃など造作もない」

「む、昔のことですよ。それに結局は代表候補生止まりでしたし」

雰囲気がいっつも真那に戻る。眼鏡を両手で戻すしぐさや少し照れくさそうにしている表情は生徒達の知る真那であった。千冬はスウエンの方を向き

「瞬時に展開して精密に射撃をするとは。大したものだ」

「いえ、先に射撃姿勢に入り銃弾を当てたのは教師山田でした。俺はまだまだです」

「フフッ、そうか……さて小娘共、いつまで惚けている。さっさと始めるぞ」

「え？ あ、あの二対一で？」

「いや、さすがにそれは……」

「ふむ、それなら……カルバヤン、せっかくISを展開したんだ。ISチェックも兼ねて山田先生とタッグを組め」

「了解」

スウエンは真那の隣に移動する。

「では、はじめ！」

号令と同時にセシリアと鈴音が空へと昇る。その後にスウェン、山田も飛翔する。

「スウェンさんのIS随分と様変わりしましたわね」

「なんか黒くなってワルっぽい見た目ねー。まあ見掛け倒しじゃないといいんだけど！」

「期待に応えられるようにしよう。教師山田、よろしくお願いします」

「こ、こちらこそよろしくお願いします！」

少しもってはいるが真那の表情は冷静。スウェンはショーティーのトリガーに指を掛け何度も回転させ、右腕は首下に、左腕は下方に向け独特な構えをとる。

「行きますわ！」

セシリアのその声と共にビットが射出され、それと同時に真那とスウェンは回避行動に移る。セシリアの標的は真那ではなくスウェン。ビットで執拗に攻撃をし

「いただき！」

鈴音も龍砲をスウェンに放つ。

「スウェン君！」

龍砲の射線上に真那が移動し、シールドを用いて龍砲の砲弾からスウェンを守る。

「大丈夫ですか？」

「はい、感謝します」

その時、スウェンはノワールストライカーに搭載されている「アンカーランチャー」を射出し、背後に位置していたビットに懸架。身体をそちらに引き寄せることによって上空からのセシリアの狙撃を回避した。

「わたくしのブルーティアーズを移動手段に!？」

「動きが読める……」

スウェンは鈴音の位置を確認し両手のショーティーを構えビームを連射する。真那もそれに合わせセシリアに射撃を行うが、セシリアは難なくかわす。

だがそれは真那の狙いであり、龍砲を展開した鈴の方の方に近づける為に誘導していたのだ。セシリアが鈴音に衝突しそうになるが寸前の所で止まる。

そこにスウェンが迫り二人は慌てて距離を離し、鈴音とセシリアの間を通り過ぎる。そしてスウェンは急停止し、両掌を二人に向けアンカーランチャーを撃ちセシリアの右側の非固定ユニットに、鈴音の左足にそれぞれ懸架する。

「なっ!？」

「何ですの!？」

二人が危険を感じた時はもう遅くスウェンはワイヤーを握り、前に

向かって投げ飛ばしその勢いのままセシリアと鈴音は激突してしまい、真那はそれを逃さずスウェンの上に移動しグレネードを投擲。爆発が起こる。

煙の中からセシリアと鈴音が出てきてそのまま落下。本日二度目のクレーターをグラウンドに作り上げた。真那とスウェンはゆっくりと地上に降り立つ。

「さて、カルバヤン、山田先生の戦闘を見てどうだった」

「攻撃、防御、回避、そして先を見据えた戦い方。とても参考になるものでした」

「そ、そんな事ありませんよ！ スウェン君の戦い方も凄かったですし！」

「いえ、俺もまだまだという事です」

「カルバヤンをここまで言わせるほどだ。諸君にも教員の實力が理解できただろう。以後は敬意を持って接するように」

生徒にそう言い聞かせる千冬。一方クレーターの中でセシリアと鈴音が言い争いをしているが、それは放置する。

「では出席番号順に七つのグループに分かれて実習を行う。各グループのリーダーは専用機持ちがやれ」

その後の授業で三つのグループで黄色い声が上がったのはまた別の話である。

／※／

授業が終わり、教室へ向かっている一夏。丁度角を曲がったところにスウェンが居た。

「よう、スウェー——」

声を掛けようとしたがそれを止め、身を隠す。何故ならスウェンの目の前にはあのドイツからやって来た少女、ラウラ・ボーデヴィツヒが居たからだ。

「お久しぶりです、隊長。お変わりないようで安心しました」

「ラウラ、俺はもう隊長ではない」

「私の中では、隊長は何時までも隊長です」

「……」

その時のラウラの表情は朝のHRで見せた冷たい表情ではなく、まるで兄を見るようなとても優しい表情をしていた。

「そういえば、俺の後任が決まったらしいな。誰だ？ まさかシユ
ハイク責任官では……」

「いえ、私です」

「！？……そうか、お前が部隊の隊長なら皆も納得——」

「隊長」

「？」

「部隊にお戻りください」

「何？」

スウェンは少し表情を強張らせる。

「我がシュバルツェ・ハーゼには隊長が必要なのです！ 部隊の皆もあなたの帰還を待ち望んでいます！ 隊長、部隊にお戻りを！」

そのラウラの言葉に、スウェンは暫しの沈黙。

「……ラウラ、俺はあの時重要な作戦の指揮を放棄し、身内を優先した。感情に流されるような俺はあの部隊の隊長に相応しくはない」

「そ、そんな事……」

「話は終わるか？ もう少しで次の授業が始まる、遅れないようにお前も急げ」

踵を返しスウェンは背をラウラに向ける。

「……隊長、一つ質問よろしいでしょうか？」

「何だ？」

「何故織斑 一夏とあそこまで友好的のですか？ あの男こそ隊長が部隊を離れる原因……あの男という存在が居たから……！」

「ラウラ、あいつは関係ない。それにあいつが居なかったとしても、状況は然程変わりはないだろう。お前が織斑にそのような考えを持つのは間違いだ」

「た、隊長……」

見せた事のないスウエンの怒りにラウラはたじろいしてしまう。スウエンはそのまま歩き去っていき、ラウラはその背中をずっと見ていた。

「……盗み聞きとは感心しないな」

「!？」

気づかれているとは思ってもしなかった一夏はゆっくりとラウラの前に姿を現す。

「……確かに、隊長の言う事に一理ある。だが、私は個人的に貴様

の事が気に入らない」

「どういふことだよ」

「貴様、隊長の事を尊敬しているな？」

「!？」

一夏は驚いた表情を見せ、縦に首を振り肯定を示す。

「スウェンは頭も良くて、ISの技能だってかなり高いし、それに誰からでも認められてる。俺は何時からかスウェンを目標にしてた……スウェンのようになりたいって、俺は思ってる」

スウェンに対する考えを言葉にした一夏。ラウラは変わらず冷たい表情で

「……やはり、昔の私と同じ目だ。だからこそ気に入らん……一つ忠告しておく」

「？」

「貴様は所詮貴様でしかない、あの人のようになるなど到底無理な

話だ。それに気づかないようであれば、貴様はその程度の人間という事だ」

「俺は……スウェンのようになれない……？」

ラウラは一夏を一瞥しその横を通り過ぎていく。残された一夏はラウラの言葉で言いようのない感覚で胸がいっぱいであった。それと同時に、自分がどれ程スウェンのことを知らなかったのか、どれ程遠い存在だったのか。改めて感じた一夏だった。

第二十六話『一触即発』

「部隊の皆……か」

夕方、スウエンは自室に戻りラウラの言葉を思い出していた。

ラウラの事もあって、今日はスウエンにとって中々に多忙な日であった。やや疲れ気味のスウエンはベッドに身を倒そうとしたがドアからノックの音が聞こえ、そちらへ赴く。

「今開ける」

ドアを開けるとそこには千冬が立っていた。

「教師織斑？ いったい何の用でしょうか」

「いや、少しお前に頼みたい事があったな」

「頼み……？」

スウエンがそう聞くと、千冬の後ろから大きなバッグを持ったシャ

ルルが現れた。

「カルバヤン、デュノアの面倒を見てやれ。部屋は空いているだろう？」

「ええ……まあ」

誰も居ない部屋を横目で見てスウェンは言う。ほんの数日前、学園側で部屋の調整が済んだようで本音は別の部屋に移動をしたようだ。

「織斑にはこの事は言ってないのですか？」

「あいつは頼りにならん」

「……わかりました、引き受けます」

「なら決まりだ。カルバヤン、後は頼んだぞ」

シャルルは千冬に一礼した後部屋に入り、それを確認し千冬はドアを閉めた。

「これからよろしくね、カルバヤン君」

「スウエンで構わん」

「え？　じゃ、じゃあ……スウエン？」

「それでいい。適当なところに座ってくれ」

そうスウエンに言われ、傍にあった椅子に腰をかけ荷物を置く。

「紅茶とコーヒー、どちらが良い」

「えっと、コーヒーもらっていい？」

「了解した」

手馴れた動作でメーカーからカップにコーヒーを淹れ、シャルルの前のテーブルにカップを置く。

「熱いから気をつけろ」

「うん」

まずは一口。シャルルは表情を変え

「おいしいね、このコーヒー」

「舌に合うようで良かった、週の始めにドイツから取り寄せているものでな。俺は気に入ってる」

「へえ、そうなんだ……そう言えばスウェンっていつも放課後にI Sの特訓してるって聞いたけど、そうなの？」

「ああ。少し前まで一人でしていたがここ最近は織斑としているな。誰かと訓練を重ねるのも悪くはない」

「僕も加わって良いかな？ 専用機もあるしきつと役に立てると思うんだ」

「ほう、それは是非とも頼みたいものだ。篠ノ之達の教え方で織斑は到底理解はできない、かといって俺自身も人に教えるのはどうも苦手だな……デュノアが加わるなら大いに助かる」

「うん、任せて！」

／※／

「と言う訳だ、教えてもらおう相手が増えてよかったな、織斑」

「お、おう……」

五日後の放課後、解放されたアリーナにスウェン達は居た。勿論、一夏の特訓のためだ。シャルルの姿はまだ見えない恐らく準備中なのだろう。

「早速だが、俺は先に訓練をさせてもらおう」

グラウンドの中央にスウェンが立ち、目の前に『STND BY』と文字が浮かぶ。

「……」

『GO』と次に浮かぶと、地上と空中に幾つものターゲットが現れ、スウェンはシューティーを構える。

腕をクロスさせ、ショーティーにより左右のターゲットを次々に撃ち抜いていき、背後を向く。ノワールストライカーのウイングの一部が稼動し「MAUIM3E4 2連装リニアガン」が現れ、空中のターゲットを狙い打つ。

ショーティーを腰に装着、ウイング外部にマウントされている二対の剣「MR-Q10フラガラツハ3ビームブレイド」を抜刀する。スウエンは空中へ行き、ターゲット目掛けて加速する。

「凄いんだね、スウエンって」

「シャルル？」

何時の間にか一夏の隣に居た、オレンジ色が基調となっているISを身に纏っているシャルル。

「ISに搭載されている武装を全て完璧に把握していて、それぞれを上手に使い分けてる。しかも敵がどう動くかを前提して攻撃と行動をしている……あそこまで行くのはかなりの技量が必要だね」

「そんなに凄いのか……」

一夏は空中でターゲットを破壊していくスウエンを見る。

真下に位置していたターゲットに向けてスウエンは踵からアンカーを発射し懸架、そのまま空中で回転し、その勢いのまま斜め前方に投げ飛ばしそこにあるターゲットに激突させ全てのターゲットを破壊し終えた。スウエンは地上へ降りる。

「デュノア、来ていたのか」

「うん、前の戦闘の時も見ていたけど流石だね、スウエンは。アンカーの様な武装をよくあそこまで使いこなせるよ」

「いや、発射角が3度ずれた。ターゲットなら直撃したが、相手がISならば当たるかどうかも怪しい。まだ訓練を重ねる必要があるな」

「一夏もこれくらい言える様に頑張らないとね」

「うぐっ！……が、頑張るよ」

「さて、シャルル、後は任せる。俺はアンカーの調整をしなければならぬのでな」

「了解、任せてね」

スウェンはノワールを待機状態にし、アリーナの出口の方へ歩いていった。その時、アリーナがざわつく。

「ねえ、ちょっとアレ……」

「ウソっ、ドイツの第三世代型だ」

「まだ本国でのトライアル段階だって聞いてたけど……」

一夏達も注目の的の方へと目を向ける。そこにはISを展開しているラウラ・ボーデヴィツヒが腕を組んで立っていた。ラウラからオーブン・チャンネルで声が飛んでくる。

「織斑 一夏」

「……何だよ」

「私と戦え。同じ人を尊敬するもの同士、どちらの意思が強いかわかここで決めてやろうではないか」

黒きIS「シュバルツェア・レーゲン」の左肩に装備された大型の

砲台を一夏に向ける。

「……嫌だ。お前だってわかるだろ、こんな事で戦ってもあいつは絶対に望まないって」

「……貴様に何がわかる……あの人の事を！」

「!？」

砲口が火を噴いた。一夏のISは戦闘状態にはなっておらず、高速で飛来するそれはまさにぶつかろうとしたとき。

「いきなり撃ってくるなんて、ドイツの人は随分と沸点が低いんだね！」

「ほう……」

間一髪でシャルルは一夏の前に立ち、シールドで弾丸を弾き同時に両腕にアサルトライフルを展開、銃口をラウラへと向ける。

「ふふふ……」

「何が可笑しいの？」

「そのIS……成る程、所詮は模倣品か。どれだけ量産型が良くても技術力が低くても再現も難しいという事か」

「……！？まさか……」

「気づいたようだな、ならば見せてやろう……実物の力を！」

「くっ！」

シャルルとラウラはトリガーを引こうとしたが、互いの顔に緑の閃光が掠る。

「っ！？」

「ス、スウェン！？」

シャルとラウラの中間の位置に、ショーティーの銃口を二人に向けているスウェンが居た。

「何やら騒ぎがあると思って来てみたら、お前等か……双方銃を収めろ、教師が来るぞ」

「う、うん……」

普段とは違う声のスウエンに、シャルルはアサルトライフルを下ろす。だが、ラウラはまだ砲台をシャルルに向けていた。

「ラウラ、下ろせ」

「……隊長がそう仰るなら」

渋々了承したラウラは、レーゲンの戦闘状態を解除して、一夏とシャルルを睨んだ後アリーナゲートへと去っていく。

「……大丈夫か？」

「うん。一夏は？」

「あ、ああ。助かったよ」

シャルルはいつもの人懐っこい顔で一夏の顔を覗き込む。スウエンは再びノワールを待機状態にし、軽いため息を吐き

「二人とも、あまりラウラを悪く思わないでくれ。本来ならば自分から戦闘を仕掛けるような奴ではない、それだけは覚えておいてくれ」

そう言い残し、スウェンはアリーナから立ち去っていった。

「ラウラ……か」

「……」

ラウラの名を呟く一夏、一方のシャルルはスウェンの背中をずっと見ていたのであった。

第二十七話『偽る者優しき者』

第二格納庫にて、スウェンは腕を組ながらスタンドポジションのストライクEの前に立っていた。スウェンは以前からストライクのメンテナンス等を第二格納庫で行っている。

現在、スウェンは何をしているのかというと

「どうしたものか……」

ストライクEの背後にはチェーンに吊り下げられたガンバレルストライカーがあった。先日の訓練を通じ、アンカーの発射角の問題は調整で改善されたが、問題はガンバレルストライカーだ。

束の改造によりソードとランチャーが装備できないというのは本人の口から語られ、現在装備できるように改修を行っていると思われる。だがガンバレルに関しては何も言っておらず、いざ訓練をしようとしたがガンバレルのストライクEの接続に不具合が生じ、装備すら出来ていない状況にある。

そのためスウェンは装備できるように作業をしているのだが、如何せん作業が進まない。スウェンはいつぞやの作業を思い出しながら、コンソールに打ち込む。そして出続けるエラーの表示。

「ちっ……」

舌を打ち、不意に後ろを向く。何時も作業をしていれば居る彼女、簪が今日に限って居ない。もし彼女が居ればもしかしたらと可能性を見出すが、居ないのであればと思いと頼りっぱなしは良くはないという思いが浮かび、コンソールを閉じ作業を止める。そしてスウエンは一つ、気になる事を思い浮かべる。

それはシャルルの事だ。スウエンは以前、箒の言葉の中にあったシャルルの父が社長であるデュノア社について調べていた事がある。その過程でデュノア社の社長には愛人の娘が居るといふ情報を僅かな手がかりから見つける事ができた。

デュノア社の社長に息子がいるという経歴は見当たらなかった。恐らく愛人の娘というのはシャルルなのではないかとスウエンは推測する。だが何の為に娘を態々男装までさせてIS学園に入学させたのか？ それはスウエンにとって自ずと答えが出してしまう事であった。

だが確証は無い。それをシャルルに追求して彼、もしくは彼女を傷つけてしまったら取り返しつかない事になる。スウエンは深く考えるのを止め今の現実に目を向ける。

「……そういえばボディソープが切れていたな、買っておくか」

／※／

ボディソープを買うため購買へ向かうスウェン。途中の角を曲がる。

「しかし何が原因だ……」

スウェンは何が原因かを考えながら歩き続ける。

「スウェン」

「回路の問題は無い筈だ……」

「ちょっと、スウェン」

「やはりプログラムの問題か……」

「スウェン！」

「？」

何度も声を掛けられたスウェンはようやく気づきそちらを向くと鈴音が立っていた。

「凰……か。どうした？」

「どうしたじゃないわよ、何度も呼びかけてんのに無視してると思っ
って近づいてみれば、辛気臭そうな表情してたし。大丈夫なの？」

「大丈夫だ、少し考え事をしていた」

「そう、ならいいんだけど……あんまり心配させないでよね、あんな
たは一応友達なんだから」

そっぽを向きながら言う鈴音。

彼女が素直ではないというのはスウェンも十分にわかっている。鈴音は本当にスウェンの事を心配しているのだろう。

「ありがとう、凰」

「別に礼を言う事じゃないと思うんだけど……まあいいや、ところでスウエンは何してたの？」

「ボディソープが切れていてな、買い足しに行くところだった」

「なら一本余ってるからあげるわよ」

手にぶら下げた袋を前に出しながら鈴音言う。

「良いのか？」

「部屋にまだ結構あったの忘れてて買ったから、無駄にするよりはましかなって。感謝しなさいよね」

鈴音はスウエンにボディソープの入った袋を渡し、一歩下がって

「前負けた借り、近いうちに必ず返すから待ってなさいよね！」

「ああ、リベンジなら何時でも受け付けよう」

「じゃあね」と鈴音はスウエンの横を軽い足取りで歩いていった。

「友達か……悪くないものだな。しかし……」

そう呟くとスウェンは自室へと足を運ぶのであった。

／※／

「……ん？」

自室に戻ると、部屋は電気が付いていなく洗面所の向こうからシャワーの音が聞こえる。シャルルがシャワーに入っていると思い、脱衣所にボディソープを置く事にしたスウェンはドアノブに手をかけ、そのまま開ける。すると向こう側からも同じ音が聞こえたが、スウェンは気づかずそのままドアを全開に開けてしまった。

「デュノア、ボディソープが切れてい……」

「ス、スウエ……ン？」

その光景を目にして固まってしまい思考も止まってしまった。目の前にいるのは顔、髪の色声は間違いなくシャルルだ。だがスウエンは思わずそちらに視線を移してしまった。男性とは違う、明らかに女性であるとわかる身体の一部へ。

「……」

スウエンは静かにドアを閉め、頭を抑える。

「……よし、落ち着いた」

一度冷静になり椅子に座る。それと同時にシャルルが脱衣所から出てくる。シャルルの格好は何時ものジャージであるが、身体のラインがある程度わかるそのジャージでもシャルルが女性であるという事実を鮮明に告げている。シャルルはベッドに腰をかけると。

「えっと……驚いてる……訳でもなさそうだね」

「ああ、デュノアが女である可能性は今までの行動、そして経歴を

見て非常に高かった」

「じゃあ、何で追求しなかったの？」

「憶測で物を言うのは嫌いだな」

「ふふっ……スウェンらしいや」

「デュノアが何故男装をしてまでこの学園に入ったのか……それは男である俺や一夏と接触しやすかった「男」である必要があった」

「……」

「そして、お前の目的は……俺のストライクだろうか？」

シャルルはその言葉に驚いた表情を見せるが、直ぐに苦笑へかわり

「何でもお見通しかぁ……やっぱりスウェンは凄い」

スウェンは腕を組み

「デュノア社については色々調べた。現在デュノア社はドイツのある科学者と共同している。フランスはその科学者の作成したシス

テムを再現しようとしたが、技術力がドイツよりも圧倒的に劣っていたため、システムの再現に難航。そこでオリジナルのシステム……ストライカーシステムを搭載しているストライクのデータを収集するのが目的……違うか？」

「……うん、そうだよ。僕はストライクのデータを収集するために、父に男装することを命じられて今こうしてここにいる。因みにね僕のISの「ラファール・リヴァイルカスタムⅡ」はデュノア社がなんとか作り上げた試作版のストライカーシステムを搭載しているんだ。模造品って言われても仕方ないよね」

天井を見上げ、シャルルは軽いため息をしたあとスウェンの方を向
き

「もう……ここまでかな。スウェンにはバレちゃってたみたいだし、きっと僕は本国へ呼び戻されるだろうね。父の会社も今のままには
いかないだろうけど、僕には関係ないかな」

「……………」

スウェンは黙ったまま、シャルルの言葉に耳を傾ける。

「なんか話したら楽になったよ。最後まで聞いてくれてありがとう。」

それと……ごめんね、今まで嘘ついて」

「……俺は幼いときテロで両親を失った」

「え？」

突然の言葉にシャルルは口を閉ざす。スウェンは俯いたまま

「それから俺は施設に入れられ、親の温もりをまともに受けずに育った。親の声がどうだったのかも覚えていない、親の性格がどのようだったのかも覚えていない。辛うじて覚えているのは顔くらいだ」

「スウェン……」

「そんな俺でも……」

スウェンは一息置き

「親というのはどの様であるべきかは分かる。親というのは子を思い、共に歩んでいくものだ。子の自由を奪って良い権利等……夢を奪って良い権利等……どこにも存在しない」

「それでも僕に権利なんて……」

「ならお前は良いのか？このまま本国へ戻されても」

「良いわけがない！！」

ベッドから立ち上がり、叫ぶシャルル。

「一夏達とも仲良くなってきたのに……ようやく……スウェンが自分のことを話してくれるようになったのに……本国に戻るなんて嫌だ……私^こは……学園に居たい！」

涙を流しその場へ座り込んでしまうシャルル。スウェンはシャルルと同じ視線へしやがみ

「お前の本心をようやく聞けた。安心しろ、俺は他の人間にお前の事は言う心算はない。それにお前には時間がある」

「時間……？」

「IS学園の特記事項第二一、『本学園における生徒はその在学中において、ありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意が無い場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする』これによって、お前には三年間という時間が与えられた。」

これからどうするかゆっくりと考える。頼りないかもしれないが…
…俺も協力する」

「スウェン…：ありがとう。けど…：何で僕の事を…：ずっとスウェンに嘘ついてたのに」

「友人を助けるのに、理由が必要か？」

「え…：…」

スウェンは立ち上がり

「友人というのは支えあうものだ。デュノア、一人では何も出来ない事もある。何時でも俺を…：友人を頼れ」

「う、うん！」

スウェンの事を見つめながら、シャルルは笑顔になりながら頷く。

「ところでデュノア、夕食はとったか？」

「まだだけど…：…」

「なら一緒に食堂へ行こう」

そう言いスウェンは手を差し伸べ、シャルルはその手を握り立ち上がる。

「俺は外で待っている、準備が出来たら来てくれ」

「わかった」

スウェンは食堂へ向かう為にドアへ歩く。

「本当にありがとう……スウェン」

シャルルは一夏の言っていた事が本当であったと思いきスウェンに触れた右手を優しく左手で包んだのであった。

第二十八話『漆黒狂乱』

学年別トーナメントまであと数日と迫り、学園も盛り上がりを見せ始めたこの頃。当のスウェンは未だにパートナーを見つけられていない状態であり僅かながら焦りを感じ始めた。

そして放課後の事

「スウェンさん、少しよろしいかしら」

「？」

廊下でセシリアに呼び止められたスウェンは足を止め、セシリアの方を向く。

「この後お暇ですか？　もしよろしければ模擬戦をお願いしたいのですが」

「すまない、俺はこれから格納庫へ行く予定だ。俺宛に荷物が届いたらしいのでな」

「そうですか……残念ですわ」

「織斑でも誘ったらいいだろう」

ポケットに手を入れたままスウェンは言う。セシリアはその言葉に首を横に振り

「一夏さんも予定があるらしいですの。仕方ありませんわね、私人で特訓をする事にします。それでは失礼しますわ」

「ああ」

アリーナへ向けてセシリアは歩いていった。

「……そろそろ行くか」

セシリアの姿が消えるのを確認すると、スウェンも自分の目的地へと向かう事にした。

／※／

「あら？ わたくしが一番乗り……という訳ではありませんね」

アリーナの入り口へやって来たセシリアであったが、どうやら先客が居たようだ。

「奇遇ねセシリア。あたしはこれから月末の学年別トーナメントに向けて特訓するんだけど」

「あら、本当に奇遇ですわね。わたくしも全く同じですわ」

互いに視線を反らさず睨みあう。そしてゆっくりとアリーナ内へ入って行き

「ちょうど良い機会だし、この前の実習のことも含めてどっちが上かはっきりさせとくってのも悪くないわね」

「珍しく意見が一致しましたわ。どちらの方がより強くより優雅であるか、この場ではっきりとさせましょうではありませんか」

セシリアと鈴音はそれぞれIS展開し互いの武器を構える。

「ほう、中国の甲龍とイギリスのブルーティアーズか」

「！？」

二人は声のする方を向く。そこに居たのは、灰色のISスーツを身に纏ったラウラであった。

「あんた何時からそこに居たのよ」

「始めからだ。貴様等がそれに気づかずにここへ来ただけの事だろう」

呆れ返った声を上げるラウラ。セシリアは一步前に出て

「ラウラさん、貴女のその眼帯、何処かで見たときがあると思って調べましたの。どうやら貴女はドイツの特殊部隊シュバルツェ・ハーゼの隊員だったようですね」

「シュバルツェ・ハーゼ！？ あんたあの部隊の隊員なの！？」

「ああ、そうだ。まさか我が隊の事を知っているとはな、過小評価はしていたが少しは評価を上げてても良さそうだ」

「あ、あんたねえ……」

ラウラの言葉が癩に障った鈴音は「ふん」と鼻を鳴らし

「あんたみたいな頭かたそーな隊員が居る部隊じゃどうせ隊長も大したことないんでしょうね」

「最強の部隊なんて言われてる様ですけど、所詮名ばかりなのではありません？」

「何……?」

先程の二人を見下すかの表情から一変し、何時もの冷たい表情からは考え付かない怒りの形相へと変わっていた。ラウラはレーゲンを展開、装備の最終安全装置を解除し鈴音にレールカノンを放つ。

間一髪で鈴音は空中へと飛び、回避に成功した。

「ちょっと！ 危ないじゃない！」

鈴音は指を指しながら言う。ラウラも鈴音と同じ高度まで飛び

「見せてやろう……私とレーゲンの力を……」

／※／

「あれ？ 一夏と箒だ」

「おう、シャルル」

アリーナへ続く廊下でばったりと鉢合わせたシャルルと一夏と箒。

「お前もアリーナに行くのか？」

「うん、トーナメントも近いしね。特訓しようかと思って」

「私達も同じだ。ところでスウェンは居ないのか？」

「用事があるって言って、格納庫に行ったよ」

「へえ、そうなのか……ん？」

なにやらアリーナの方が騒がしいと気づいた一夏。シャルルと箒もそれに気づき

「何だろう……何かあったのかな」

「わからん。早く行くとするか」

一夏達は走りゲートをくぐり、観客席へと到着した。その時、目の前で爆発が起こった。

「何だ!？」

「一夏! 箒! あれ!」

シャルルの指を指す方向には鈴音とセシリア、そしてその向かいにはラウラが居た。

「じよ、冗談でしょ……」

「まさかラウラさんのISにも「アレ」が搭載されているなんて……」

「どうした？ もう終わりか？」

「くっ！ このおー！！」

双天牙月を構え、ラウラ目掛けて突進する鈴音。ラウラは僅かに笑みを浮かべ

「愚かな……」シュヴェルドストライカー！！」

そう叫ぶと、左肩に装備されているレールカノンが一瞬にして消え、両肩に黒い剣……ソードストライカーの装備。シュベルトゲベールを思わせる大剣が装備される。ラウラはそれを両方抜くと、ビームの刀身を発生させる。

「はぁあー!!」

「ふっ!!」

向かってきた鈴音の振り下ろした双天牙月を両手に持った「ティーア・ナーゲル」で受け止める。

「踏み込みが……甘い!!」

「っ!?! きゃあ!!」

ラウラは一旦後ろへと引き、鈴音は一瞬の隙が生まれそこをティーア・ナーゲルによって切り裂かれた。鈴音は攻撃を受けながらもラウラと距離を離す。

空中に居たセシリアは鈴音がラウラから離れたタイミングを見計らい、スターライトmkⅢをラウラへと放つ。

「ちっ……」

ティーア・ナーゲルは粒子化し、両肩のアンロックユニットには鋭

い形状をしたスタビライザーが付いた大型の、脚部には小型のブースターがそれぞれ装備され、右手にハンドレールガンを手にする。

ブースターで加速し姿勢を変えつつレーザを回避、左腕にプラズマで形成したブレードを展開しそのままセシリアへと接近する。

「たあああ！！！」

「ッ！！！」

プラズマブレードによる薙ぎ払いをかわしたセシリア。だが、ラウラは脚部のブースターを吹かし身体を回転させ勢いの付いたままセシリアを蹴り飛ばす。

「どうだ？「シュツルムストライカー」の加速力は」

「何という力だ……」

「まさか……あれって……」

「間違いない……ラウラのIS、シュバルツェア・レーゲンには”
ストライカーシステム”が搭載されてる」

一夏達はラウラの戦い方とそのISに驚愕する。しかし、ラウラの行動はあまりにも度を越している。ラウラの容赦の無い攻撃は二人を襲い、シールドエネルギーは瞬く間に減少し機体維持警告域を
超えかける。

「もう止めろよ！ 勝負は付いてるだろ！！」

ステージと観客席との間に展開されているエネルギーシールドによって一夏の声はラウラには届かない。

「くっ！ こうなったら！！」

一夏は白式を展開し零落白夜を発動させてアリーナのシールドを破り、ラウラへ迫る。

「このおおお！！！！！！」

「織斑……一夏」

鈴音達への攻撃を止め、シュヴェルドストライカーへと換装。ティーア・ナーゲルと雪片式型との鏖競り合いが繰り広げられる。

「まさか貴様自ら向かってくるとはな。感心したぞ？」

「お前……何でこんな事を！」

「貴様には関係無い事だ！！」

ラウラは一夏を蹴り飛ばし、ティーア・ナーゲルの背を合わせ合体させビームの出力を上昇させる。ラウラは両手でティーア・ナーゲル構え、一夏に振り下ろす。

だがそれよりも先に、ラウラの頭上から銃弾が降り注いできた。ラウラは直ぐに回避行動を行う。

「一夏！ 二人を！」

「ああ！」

一夏はセシリアと鈴音を抱え、瞬時加速によりラウラから一気に距離を離す。シャルルはラウラと対峙する。

「模造品が私の前に再び立つとはな」

ラウラはシュヴェルドからシュツルムへと換装しハンドレールガンを構え、シャルルは両手にアサルトライフルを構える。

「……模造品にだって……意地はあるんだよ!!」

第二十九話『雨V S 風』

飛び交う銃弾、アリーナ上空を舞う黒色と橙色。

「どうした、その程度か！」

「くっ！」

シャルルはアサルトライフルの銃口をラウラへと向けると、ラウラはストライカーのブースターにより加速、シャルルへと迫りシユヴェルドストライカーへ換装する。

「もらった！！！」

勢いを付けたままティーア・ナーゲルを手に持ち振り下ろし、シャルルは左腕に装備されているシールドで一撃を防ぐ。

「やるね……！！」

「ふん。貴様はそうでもないようだな」

「それはどうかな！」

突然シャルルは後方へと移動する。そして両手のアサルトライフルを、背後のアンロックユニットを粒子化させる。

「見せてあげる、僕のラファール・リヴァイヴ・カスタムIIのもう一つの姿」

シャルルの声と同時に、背後のアンロックユニットは再び現れる。だがそれは先程のものとは違い、一対の大型のコンテナ状にバーニアが装備されているものだ。

「な、何だそれは……？」

「これがストライカーの模造品。さっきまでのが「ライトパック」、主に近、中距離で戦う物。そしてこれが「ヘビィパック」」

「遠距離戦用のパック……」

「そうだよ！」

粒子展開したのはシャルルの身体ほどあるガトリング砲「炎の巨人」フランム・ティタン。

それを両手で構え

「ちい!！」

6門はあるそのフランム・ティタンから放たれる数多の銃弾はラウラを襲い、シールドエネルギーが減少していく。

「まだまだ!！」

フランム・ティタンを一瞬で粒子化し次なる武装へと変える。シャルルは4連装ロケット砲^{ティタン・コレール}「巨人の怒り」のトリガーを引き砲門からミサイルが射出される。

ラウラは回避を行おうとするが、ミサイルはその後を追う。

「追尾式か!！」

直ぐに左肩にレールガンを搭載した「カノーネストライカー」に換装し、砲口を迫り来るミサイルへ狙い撃つ。次々とミサイルを撃ち落とし、シャルルへ視線を向けると既に回転式弾倉をもつグレネードランチャーに持ち替えていた。

放たれたグレネード弾は引き寄せられるようにラウラへと行く。

「舐めるなああ!!」

左腕にプラズマブレードを形成し、グレネード弾を縦一閃に切り裂きラウラの側方を通り過ぎる。だがその弾は爆発を起こし、ラウラは爆煙に巻き込まれる。

「くうっ……!!」

煙で視界を遮られ、周囲の状況を把握する事はできない。すると警告のアラートが目の前に現れ、それと同時にラウラ目掛けライトパツクへと装備を変え煙の中を加速するシャルル。左腕のシールドの裏側から鈍く煌くパイルバンカーが現れる。

「シールド・ピアース盾殺し!!?」

「これで……終わり!!」

アリーナの上空でシャルルのグレネード弾によって起きた爆発。シャルルとラウラの二人は煙の中だ。

「中でどうなって……!?!」

煙が晴れると二人の姿がはっきりと見える。だがその状況を見て、一夏は驚愕する。

シャルルの灰色の鱗殻グレー・スケールの一撃はラウラに届いていなかった。ラウラはシャルルへ手をかざしており、シャルルはまるで何かに掴まれているかのように動きが止まっていた。

「こ、これは……」

「ふふ……まさか私に停止結界を使わせるとはな、驚いたぞ」

「まさか「AIC」!? そ、そんな……ストライカーシステムだけじゃなくてこんな物まで……」

「シャルル・デュノア、私はお前への認識を甘くしていたが、それが間違いだったのだと気づいた。お前は優秀な操縦者だ。今までの

非礼を詫びよう。だがこれで……」

A I Cは解除され、シャルルの拘束が解ける。それと同時にシユヴェルドストライカーへとラウラは換装する。

「終わりだ」

／※／

「……完了か。まあ何とかなるものだな」

スウェンは第三格納庫で作業を終え、自室へと行こうかと考えていたところ。

「スウェン！」

息を切らしながら格納庫へ来た一夏にスウエンは歩み寄る。

「どうした織斑。お前が焦っているとは何かあったのか？」

「今すぐ保健室に来てくれ！」

「？」



「別に、助けられなくてもよかったのに」

「あのまま続けていれば勝っていましたわ」

「何だ、この包帯を巻かれて不貞腐れている奴等は」

一夏に保健室へと連れて来られたスウエンは明らかに不満そうなセシリアと鈴音を見て思わず声を漏らす。

「デュノアは大丈夫なのか？」

セシリア達と同じく包帯を巻いたシャルルの方を向きながら言うスウエン。

「うん、僕は大丈夫。こう見えて頑丈だからね」

「そうか……しかし事情は聞いたが……途中で教師が介入して事態を収めたから良かった物の……ラウラが、か」

スウエンは眉をひそめ、俯く。

「悪いスウエン……俺何も出来なかった」

暗い表情で一夏は言うが、スウエンは僅かに笑み

「いや、お前はオルコット達を救出した。それだけで十分出来る事

はできただろう。あまり自分を責めるな」

「スウェン……」

するとセシリアと鈴音が握り拳を作り

「全く！ 何ですのあの人は！」

「突然逆ギレして、あの黒女！」

「黒女とは失礼だな」

「「「!?」」」

何時の間にか保健室の入り口にラウラが立っており、セシリア達に近づく。

「あ、あんた何しにきt——」

言葉を途中で止めた鈴音。何故ならラウラが深々と頭を下げているからだ。

「逆上し冷静さを見失い今回の事態を起こしてしまった……本当にすまなかった。この非礼はいつか必ず詫びる。どうか許して欲しい」

そのラウラの言葉にセシリアと鈴音は一気に沈黙し

「えっと……べ、別に頭下げる事じゃないわよ。それにこっちだつて言い過ぎたかもだし……」

「……わたくしも悪かったです。あなたの部隊を悪く言って……ごめんなさい」

二人も軽く頭を下げ謝罪の言葉を言う。ラウラは頭を上げ、スウェンの方を向き

「それでは隊長、私はこれで」

そう言うとラウラは保健室を後にする。そして保険室内には微妙な空気が流れる。

「何か……拍子抜けって言うか何と言うか……」

「今思うとわたくし達の方が大いに悪かったかもですね……」

「ははは……」

先程までラウラに怒り心頭だったセシリアと鈴音が、まるで鎮火したかの如く沈んだ表情になる。シャルルはそんな二人の表情を見て思わず苦笑いをした。

／※／

自室へそれぞれ向かおうとするシャルルと一夏、そしてスウェンは廊下を一緒に歩いている。

「オルコットと凰、デュノアのISのダメージレベルがC……修復に専念させる為にトーナメントへの参加は認められんか。酷なものだな」

「まあ仕方ないよこればかりは。ところでスウェンは誰と組むの？」

「今考えていたところだが……織斑、俺と出場しないか？」

「え！？ お、俺と！？」

「ああ、お前とならある程度の連携は取れるからな。良ければ構わん」

「いや、そう言ってくれるなら喜んで受けるよ」

「そうか、良い答えを聞いて良かった」

「決まりだね♪」

シャルルとスウェンは自室の扉の前に立ち

「織斑、また明日」

「おやすみ、一夏」

「おう、おやすみ！」

そうして自室へ入り、スウェンは手前のベッドに、シャルルは窓側

のベッドにそれぞれ鞆を置く。

「今日はなんとというか疲れちゃった……」

「俺もだ。色々作業をしていてな」

「あ、先にシャワー浴びてもいいかな？」

「構わん」

シャルルは着替えを持ち脱衣所の扉を開けようとするが途中で止め

「覗いたらダメだからね」

「覗くわけがないだろう。早く入れ」

「うん……ちょっと位前の事思い出して反応してもいいのに」

「何か言ったか？」

「ううん、何も」

そう言い残しシャルルは脱衣所へ入っていく。スウェンは窓の近く

へと行き

「……ペアか。そういうものは昔ならば慣れないものだったが……不思議と嫌ではないな」

ガラスに映っていたその表情は自然な笑みだったのだと、スウエンは気づいてはいなかった。

第三十話『パートナー』

あの騒動から次の日の昼の頃こと、廊下で一夏が歩いていると

「一夏」

「箒？ どうした？」

呼び止められた一夏は箒の方を向く。

「スウェンとタッグを組んだらしいな」

「ああ、何でそんなこと聞くんだけ？」

「うむ」

箒は腕を組み

「私もスウェンと組もうとしていたのだが……先を越されたみたいだな」

組んでいた腕を解き、背を一夏に向け

「トーナメントでは絶対勝つ」

「おう、こっちだって負けないからな」

そうして箒はどこかへと歩いていった。

「気のせいかなピリピリしてたな……箒」

「ここにいたか」

「？」

背後から呼び掛けられた一夏。そこにはスウェンが居た。

「織斑、昼食はとったか？」

「いや、まだだけど」

「そうか、トーナメントについて話す事がある、一緒に食堂にいか

ないか？」

「もちろんいいぜ」

「なら行くでしょう」

／※／

食堂にやってきたスウエンと一夏。一夏は焼き魚等の和を中心としたメニューでスウエンは何時も通りのカレー。二人は向かい合ってテーブルに座る。

「織斑、タッグを組むに当たり互いのISの利点と欠点を確認しよう」

「利点と欠点？」

スウエンは「ああ」と頷く。

「連携をとるということは、互いの利点を活かしながら同時に、互いの欠点を補わなければならない」

「成る程……スウェンから見て白式の欠点は？」

「武装の種類に乏しいことだ」

「いきなりストレートだな!？」

「誰だって先にそれが思い浮かぶだろう」

「ひ、否定は出来ないけどさ……」

「さて、織斑。ノワールの欠点を上げてみる」

「ノ、ノワールの……?」

箸を止め深く考える。今まで見てきたノワールの武装、性能全てを思い出す一夏。

「え、えっと……武装が多い事？」

「……」

「あ、あれ？ 違った？」

無言のスウェンに一夏は焦ってスウェンをみる。

「決定打に欠けることだね」

不意にテーブルの側から声が聞こえる。

「デュノアか…」

「うん、隣いい？」

「構わない」

スウェンの了承を得ると、シャルルはスウェンの隣の椅子に座る。

「織斑、先程デュノアが言ったことがノワールの欠点だ」

「決定打に欠けること？」

「ああ。ノワールほどの戦況にも対応できるように、武装を balan

ス良く搭載されている。だが、ノワールの武装には状況を覆せるようなものはない」

「けどさ、バランスがいいってことはそれが利点になるんじゃないか？」

「そうだ。利点と欠点は表裏一体だ。利点になることは欠点に、欠点になることは利点になることもある」

「なるほど……」

「そしてお前のたった一つの武装、雪片二型は状況を覆せる事の出来る。それこそ劣勢すらな」

スウェンはスプーンを置き

「それ故に相手はお前に注意を向ける。零落白夜発動時に攻撃を受けたら一たまりもないからな。だがこちらとしては片方に注目が集まった方が都合がいい」

「俺に注目が集まってる間に、スウェンが攻めるってわけだな」

「そうだ。実質前衛を任せることになる。お前には負担を掛けてしまふことになるがな」

「わかった、前は任せろ！」

意気込みはよし、とスウェンは僅かに笑みを浮かべる。

「まあ……お前は変なところでミスを犯すからな。油断はしないことだ」

「うっ……ぜ、善処する」

「それでいい。さて、これからの訓練について方針を決めるとしよう」

※

授業が終わりスウェン、シャルルは自室へ戻っていた。

「スウェンって何で何時もカレー食べてるの？」

シャルルの突然の質問にスウェンは表情一つ変えず

「特に意味は無いのだが」

「それにしてもほぼ毎日じゃないかな……」

「食べられればそれで良い。栄養をしっかりと取れていれば種類など気にはしない」

「それじゃダメだよ？ 食事は楽しむものなんだから」

「味……か。気にした事はなかったな」

「スウェンって変なところで常識無いよね……」

「……」

思いもよらぬ言葉に若干表情を曇らせるスウェン。するとノック音が部屋に響く。

「デュノア、ベッドに身を隠せ」

「う、うん」

シャルルは男装をしていない為、スウェンに言われたとおりベッドに体を倒し毛布を深くかぶる。スウェンはそれを確認するとドアへと近づき、ドアノブへ手をかける。

「誰だ」

扉を開けるとラウラが部屋の前に立っていた。

「た、隊長、夜分遅くに申し訳ありません！」

「……まだ夕方なのだがな。どうした？」

「え、えっと……その……」

「？」

珍しく吃るラウラを不思議そうに見るスウェン。ラウラは覚悟を決めたかのような表情で

「タッグトーナメント戦についてなのですが、よ、よろしければ私

と一緒に出ていただけじゃないでしょうか！ 隊長と一緒になら必ず勝てると思うのです」

「すまない」

「え———？」

「折角の誘いだが俺は織斑と出場することにした」

「お、織斑 一夏と……？」

「ああ。本当にすまないな、またの機会よろしく頼む」

「は、はい……そ、それでは失礼します……」

ラウラは軽く頭を下げ、自室の方向へと歩いていった。スウェンは扉を閉め部屋内に戻る。

「誰だったの？」

「ラウラだ。タッグ戦の誘いだったが断った」

「そうだったんだ……ねえスウェン。僕の気のせいだったらでいいんだけど、ラウラの事避けてないかな」

「……どうかな、もしかしたらそうなのかもしれないし、そうではないかもしれない」

「理由は聞かないけど、ラウラはすごくスウェンの事慕ってるよ？
それなのに避けてたら可哀想だよ……」

「……そう簡単にいかないものだな」

「？ 何か言った？」

「いや、何も」



「……隊長」

何故隊長はあの男を選んだ？

何故私を選んでくれなかった？

私があんなに甲斐ないから？

私があんなに勝手な事をしたから？

もうあの人は私を見てくれないのか？

もうあの人の下で役に立つ事は出来ないのか？

嫌だ……そんなのは嫌だ……！！

「隊長……私は……私は……！！」

黒き少女は苦しみ続ける

憧れの男が自分から遠ざかる事に

苦悩を抱えたまま戦いときは迫る。

第三十一話『タッグトーナメント』

6月最後の月曜日、遂に開催された学年別タッグトーナメント。既に会場は盛り上がりを見せ、会場には活気が見える。

「スウェン・カル・バヤン君、準備の方お願いします」

「了解」

アリーナのピットに居るスウェンは教師にそう促され、ノワールを展開する。スウェン、一夏はAブロック一回戦一組目。つまりタッグトーナメントの最初の試合となる。一夏は既にアリーナへ出ており、対戦相手も同じくである。ピットにはスウェンのほかにシャルル、セシリア、鈴音が居る。

「まさかいきなりスウェンさん達がラウラさんと当たるなんて……」

「一夏大丈夫なのかしらね……」

セシリアと鈴音はそわそわしながら言い、シャルルはスウェンの傍に行き

「スウェンと一夏なら絶対勝てるよ！」

「……」

「スウェン？」

「……」

スウェンからの反応は無く、シャルルはもう一度呼びかける。

「スウェン、スウェンってば聞いている？」

「何度も呼びかけるな、聞こえている」

「だったらいいんだけど……頑張ってるね」

「全力は出す心算だ」

スウェンはカタパルトに足を固定する。

「スウェン・カル・バヤン、ストライクノワール、出る」

火花を散らすカタパルトによってアリーナへ押し出されるスウェン。彼は先程の事を思い出していた。

／※／

それは数十分前の事。

「……」

本戦当日という事もあり緊張の色を見せる一夏。スウェンはそれを見兼ねたのか

「織斑、冷静さを見失うな。何時も通りやればいい」

「あ、ああ……わかってはいるんだけど……」

「まあ無理も無いか。今回のタッグトーナメントは各国の政府関係者等の部外者達も来ている。他人に見られるというのも気が気ではないからな」

「スウェンは緊張してないのか？」

「多少なりともしている。無様な真似を他の奴等に見られたくは無いからな」

「してるようには見えないんだけどな……」

「さて、そろそろ俺達の対戦相手が映るな」

二人はそのままモニターへ視線を移す。画面はトーナメント表に変わりスウェンは真っ先に自分の名前を見つける。

「これは……」

「え？ どうした？」

スウェンは黙って指をさす。一回戦目はスウェンと一夏であったが、二人にとってそれは問題ではない。その対戦相手に問題があった。

「まさか早くもぶつかるとはな」

「……ああ」

スウェンと一夏ペアの対戦相手。それはラウラと箒だったのだ……。

／※／

四機のISが二機ずつがアリーナの中央部分かれて位置している。スウェン、一夏ペア。ラウラ、箒ペア。それぞれが自分の武装を手にし開始のブザーを待っている。

「まさかこういう形で戦うとはな、一夏」

「それはこっちのセリフだ。悪いが全力でいかせてもらおうぜ！」

「元より承知だ！」

一夏と箒は互いに言葉を交わすが、一方のスウェンとラウラは互いに視線を反らさずに見ている。そしてスピーカーの音声がアリーナ内に響き渡った。

『開始5秒前！ 5――4――3――』

迫るカウントにスウェン達は武器を握りなおす。

『2――1―― 試合開始！！』

ブザーと共に一夏、箒がアリーナを駆ける。

「うおりゃああ！！！！」

「てゃああああ！！！！」

一夏は下段から、箒は上段から斬り掛かる。

「（攻撃に出たのはこちらが早い！ このまま切り捨てる！！）」
確実に一夏にダメージを与えられる。そう確信した箒はその勢いを殺さずに振りかぶる。

「もらったああ！！！！」

誰もがそう思ったその時、箒の目の前から一夏は消え去った。

「な……に……!?!?」

箒は視線を向けると、一夏の位置は後方に遠ざかり近接ブレードの一撃は完全に外れ、隙が生まれた。

それを見逃すスウエンではない。アンカーによって後方へ引き寄せた一夏の横を通り過ぎ、フラガラッハを抜刀し箒へ迫る。

「もらった」

小さくそう呟く。スウエンが箒にフラガラッハの切っ先を向けた瞬

間

「ッ！！！」

突然スウェンは爆発に飲まれた。ラウラがカノーネストライカーの大型レールガンをスウェンに向けて放ったのだ。

「篠ノ之！ 退け！」

「くっ、わかった！！！」

箒はラウラに言われたとおり、ラウラの傍まで距離を取った。

「スウェン！！！」

爆発に巻き込まれたスウェンは煙の中からゆっくりと姿を現した。

「大丈夫か？」

「ああ、直撃は間逃れたが……ダメージは受けた。それに……」

右手に持っていたフラガラッハはビーム発信基部が破損しており、刀身自体にひびが入っていた。それだけではない、ノワールストライカーを左部分のウィングも損傷している。

「これはもう使い物にならないか……」

片方のフラガラッハをストライカーへマウントしショーティーを構える。

「厄介だな。あちらも俺達と同じ作戦だ」

「え？」

「篠ノ之が前衛、ラウラはそのストライカーを活かした順応な戦闘をする。こちらとほぼ同じ作戦だな」

類似した作戦ほどやりにくいものは無い。それを熟知したスウェンはマスクの中で表情を変える。

「どうする？」

「予測してなかったわけではない。織斑、プランBだ」

「わかった！！」

スウエンはショーティーをラウラへ、2連装リニアガンを箒にそれぞれ向けて放つ。

「くっ！！」

集中的に狙われたラウラはみるみる箒との距離を離されていく。一夏は十分に箒とラウラとの距離が空いた事を確認すると、箒へと迫る。

「分断されたか……！！」

直ぐに援護へ回ろうとするがスウエンがラウラの眼前に立ち阻まれる。

「（何故一対一へと持ち込んだ？……隊長は何が目的で……）」

考えるだけ無駄とラウラは結論し、カノーネからシュヴェルドへ換装しティーア・ナーゲルを手に持ち

「はあっー!!」

スウエンへと接近しティーア・ナーゲルを降り下ろす。スウエンはまだ機能しているフラガラッハを左手に持ち防ぐ。

そこから数回にわたる剣劇が繰り広げられる。スウエンはフラガラッハ一本でラウラのティーア・ナーゲルの攻撃を辛くも防ぎきる。

「強くなったな、ラウラ」

「隊長も……あの時よりも腕を上げられたんですね」

「のうのうと過ごしていたわけではない……!!」

ラウラと一旦距離を取るスウエン。横目で一夏の方を見る。善戦はしているようだが、何時劣勢に立つかわからない。

「（こちらでもラウラの攻撃を長くは防げない……動くなら今か）」

「戦闘中に考え事ですか!!」

動きを止めたスウエンにティーアナーゲルを連結させたラウラが襲いかかる。

「ふっ！」

するとスウエンはフラガラッハをラウラ目掛け投擲する。その直線的な軌道のため、ラウラは難なくそれをかわした。

「武器を投げるとは……我を忘れましたか!？」

「どうかな……手の内はあまり明かしたくはないが……!」

その時、スウエンはノワールストライカーを粒子化させ新たにストライカーを換装する。

ストライカーの左アームに接続された大型のバズーカ。両腰にはシヨーティーではなく左側にはビームライフル、右側にはレールガンがそれぞれ装備されストライクEの色もノワールのカラーリングの

時とは違い全体が漆黒に変化した。

「レーゲンストライカー」換装完了。反抗を開始する」

第三十二話『雨VS雨』

スウエンは両腰にマウントされた武装を両手に持ちラウラへ向け、左手に持ったレールガン「ルドラ」を放つ。

「くっ！」

正確な射撃によりラウラは何度か被弾しかけ、直撃を受ける寸前にAICを展開し、弾丸を全て止める。

「レーゲンストライカー……完成していたのか……」

「ああ、俺も実践で出すのは今回が初めてだ」

ルドラを放ちつつ、右手に持ったビームライフルを放つ。ラウラは表情を変え直ぐに回避に移り、レールガンとビームライフルによる攻撃を避け続ける。

「（ビームライフルのせいで迂闊に停止結界を使えない……まさか隊長は停止結界の性能を把握しておられるのか……？）」

A I Cは確かに強力な武装だ。それこそガトリングの弾丸の雨すら完全に防ぐほどの性能があるが、唯一。エネルギー武装を防ぐことが出来ないという欠点を抱えている。

スウェンは既にそれを把握しており、ルドラによる実弾兵器とビームライフルのエネルギー兵器による攻撃を織り混ぜながら行っている。

「遠距離戦ではこちらが不利……なら！」

シュヴェルドストライカーへ瞬時に換装し、ティーア・ナーゲルを構え、スウェンへと向かう。

レーゲンストライカーの後部に装備されたビームサーベルが起動し、スウェンはルドラとビームライフルを腰へマウントし、両手にサーベルを持つ。

「はあっ！！」

「でえやあ！！」

互いの剣は一步も引くことなく、鋭い一撃を与えようと何度も重なりあう。だがその実力差は歴然、スウエンの二刀による攻撃はラウラを圧倒する。

「甘いな」

「なっ！？　ぐっ！！」

一瞬の隙が生じたラウラに、スウエンはラウラの腕を蹴り上げ、テイアーナーゲルは空へと舞う。

ラウラはシュツルムへと装備を変え、バーニアを最大に使い一気に距離を離す。

スウエンはレーゲンストライカーの左方のアームに接続されたバズーカ。"ゲイボルグ"をラウラへと撃つ。

「この程度の弾速で！」

AICを展開しゲイボルグの弾頭を止めようとするが、スウエンはそれを読んでおりビームライフルも同時に放っていた。思わずラウラは舌をうち、回避行動を取らざる負えない状況へとなる。ゲイボルグとビームライフルの攻撃は未だ止まることはない。

「避けられんぞ」

ゲイボルグから放たれた弾頭がラウラへと迫る。すると弾頭は炸裂し、散弾の如くラウラを襲う。

シュツウルムストライカーを駆使し避けようとするが、その散弾性に全てを回避するのは不可能だった。シールドエネルギーは徐々に0へと近づく。

「このままでは……」

負ける。そう感じた、その時

「おりゃあああ！！！！！」

「ッ！？」

背後から一夏が接近しており、雪片二型による攻撃を回避する。

「織斑 一夏！？ 篠ノ乃は……！！？」

そちらを向くと、既にエネルギーが0へとなり片膝を着いている筈がいる。

「何時の間に……」

「わからないのか？」

「何……！？ それは……！」

一夏の左手に持っていたのはノワールの武装、フラガラツハだった。

「一時的に使用権限を解除していた。忘れたか、先程それを投げたのはお前を狙ったわけではない」

「ま、まさか……」

これはラウラ達が分断された後の事だ……

「ちっ、分断されてしまったか……」

「それも作戦の内だからな」

「ふん……ならば一夏！ お前を倒してあちらと合流するだけだ！」

「できるかな！！」

一夏と箒の両者は駆け、雪片二型と近接ブレードは激しい火花を散らす。

「どうした！ 一夏、お前はその程度なのか！！」

「く、うっ……！！！」

剣の実力なら箒の方が上。一夏はそれをわかっていた。零落白夜も起動しても、箒に直接当てなければ意味がない。一夏はダメージを受けながらも、その時が来るまで耐え続ける。

「とりゃあああ！！！！！」

「っ！！ しまった！！！」

雪片二型を弾き飛ばされた一夏、箒はここと言わんばかりに

「今度こそ、もらったああ！！！！！」

近接ブレードは一夏の体をそのまま切り裂く。

箒だった。

箒は突如として飛来した何かの直撃を受け、大きく怯む。

「な、なんだ……？」

一体何が起きたのか理解出来ない箒は、直ぐに我に帰り一夏の方を向く。だがそこには一夏は居なかった。

すると頭上を影に覆われ、空を見上げる。

「悪いな箒、俺の勝ちだ！！！」

そこに居たのは右手に零楽白夜を発動した雪片二型、そして左手にはフラガラッハを持った一夏が居た。箒が受けた衝撃は、スウエン

が先程投擲したフラガラッハだった。

箒は一夏の攻撃を防ごうとしたが、防御は間に合わず、一夏は雪片二型とフラガラッハでクロスに箒を切り裂いたのであった。

「結構危なかったぞ、スウェン」

「すまない、行動を起こすのが少し遅れた。だが結果は出せた、それで良いだろう」

「ああ、確かにな」

スウェンと一夏はラウラを視界に捉え、一気に接近する。

先に一夏がラウラへの攻撃を始め、ラウラはシュヴェルドに換装し迎撃行動へ移る。だがスウェンが背後から迫っており、ルドラの的確な射撃により一夏の相手をする事に集中できない。辛くも一夏の攻撃を捌き続けるが、スウェンからの攻撃は防ぎ切れない。

「（負ける……私が！？ このまま敗北してしまったら、私は……！！）」

ラウラはスウェンを見つめ、過去の事を思い出す。

／※／

「わ、私が隊長に!？」

「そうだ」

シュハイク責任官に思わず声を荒げながら質問してしまった。

スウエン隊長が居なくなってから、早数週間が過ぎた。この黒ウサギ隊の隊長の後任を決めるか会議が先日行われていて、その後任がまさか私になるとは思わなかった。

クラリッサ副隊長に聞くと、私はスウエン隊長から主に訓練などを受けており、隊長に非常に近い存在のため私が抜擢されたらしい。

そんな事はない、私はあの人とは近くは無い。私はあの人の中を見て、何時からかあの人に私を見てもらいたいと思うようになって、此処まで来れたのだ。決して近い存在なんかじゃない。

「申し訳ありませんが、私では……」

「大丈夫だ、お前なら出来る。スウェンもお前が隊長になると聞いたら納得するだろうよ」

「で、ですが……そういえば、スウェン隊長が日本へと渡ったとお聞きになったのですが」

「ん？ ああ、そうだ。あいつは世界でも例に見ない男のIS操縦者だからな。上層部がスウェンに入学させると騒いだのだよ。む、確かスウェンは特別待遇のドイツ代表候補生だから、もう一人ドイツから候補生を出さねばならないな。さて、誰が出るのだろうか」

顎に手を添え、悩むシュハイク責任官。誰がなろうと私には関係ないのだが……。

待て、候補生というのは確か専用機持ちが主になると誰かから聞いた事がある。それが嘘か真かは知らない、だがもし候補生になれば隊長の下へまた行けるのでは？

隊長の御両親が開発した、レーゲンは次期黒ウサギ隊の隊長が使用する事になる。これは……もしかしたら。

「シュハイク責任官」

「？ なんだ」

「私が隊長なるという件、引き受けます」

「ほう、それは良かった。お前なら安心して隊長を任せられるな。これからよろしく頼むぞ、ラウラ隊長」

「はい、この身を掛けて尽力致します」

シュハイク責任官はさぞ上機嫌に笑う。私が隊長……なりたいたと思った理由はあまり良い物ではない。それにスウェン隊長の後に私が黒ウサギ隊の隊長に勤まるかは解らない。だがここで頑張っていれば、スウェン隊長もきっと私の事を見てくれる。

そう思ったから今まで頑張ってこれた。だけど……

ここで私が敗北したら……無様な姿を晒してしまったら、隊長は二度と私の事を見てくれなくなる。あの眼差しを二度と私に向けてくれなくなる。

嫌だ、そんなのは嫌だ。

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だいやだいやだいやだいやだいやだいやだイヤダイヤダイヤダイヤ……！！！！！！！！

第三十三話『暴走く互いの思いく』

「ラウラ！　ぐっ！！」

「くっ！　うわぁあ！！」

突如として叫び声を上げたラウラから放たれた強い衝撃に、スウェンと一夏は吹き飛ばされ地上へと叩きつけられ、ISが強制解除された。箒は一夏達の下に駆け寄る。

「一夏！　大丈夫か！？」

「あ、ああ……」

「ラウラに一体何が……」

スウェンはラウラの方を見ると、その光景に目を疑った。

レーゲンの装甲は液体のような形状になり、まるで意思を持ったように動き始めラウラを完全に覆ってしまいまた違う形状へと変わった。スウェンはこれが何なのか、遅れてから理解できた。しかも、最悪な状況であると。

「……「VTシステム」」

「VTシステム？」

そう一夏が問うと、スウェンは静かに頷く。

「VTシステム。正式名称はヴァルキリー・トレース・システム。過去のモンド・グロッソの部門受賞者の動きをトレースするシステムであり、現在アラスカ条約でどの国家・組織・企業においても研究、開発、使用全てが禁止されている物だ」

「そんなものがあいつのISに……ッ!？」

それは先程の人型とは言い難い形状から、完全なる人型へと、全身装甲のISへと変化しておいた。一夏はその姿を見て驚愕する。

「あれは……雪片!？」

「何？」

目の前の存在に握られている刀状のブレード。スウェンも一度見た

事がある、間違いなくその形状は過去に千冬が振るっていた雪片と同じ形状をしていた。

「くっ……このおおおお！！！！」

「待て！ 織斑！」

突然一夏が走り出す。スウェンは一夏の腕を掴み静止の言葉を掛ける。

「スウェン離せ！ あいつ、ふざけやがって！！」

「待てと言っている。もう一度見てみろ」

「え？」

ふと我に返り、一夏はそちらを向く。そのISは急にもがき、再び形状を変えていく。特徴的な頭部に、四本のアンテナ、そして先程の装甲とは違い、無機質な装甲へと変わっていく。

「あれって……」

「……ああ」

次にその姿になったときは、スウエンは直ぐにそれが何なのか理解できた。

「ストライクか」

そう、漆黒のISの姿はストライクの形状に変化していたのだ。スウエンは残ったエネルギー残量を確認する。

「まだ戦える」

スウエンはストライクEを展開し、レーゲンストライカーを装備しようとするが

「……レーゲンストライカーは今使えないか。酷使してすまなかつたな」

先程の衝撃で使用不可になってしまったレーゲンストライカーに向けてそう言い、ノワールストライカーを装備する。そして一夏に持

たせていたフラガラッハが地面に突き刺さっており、スウェンはそれを抜く。

すると

『スウェン！』

「デュノアか」

シャルルからの通信に、スウェンは答える。

『今先生達が行ったから、スウェン達は直ぐにそこから退避して！』

「いや、あいつは俺が止める」

『え？ け、けど……！』

「これ以上の会話は不要だ、切るぞ」

『ちょ、スウェー……』

強引に通信を切ると、スウェンはラウラであろうそれに向き直る。

「無茶だ！ ストライクのエネルギーだって少ない、このままでは……シャルルの言う通り教師を待った方がいい！！」

「あいつは俺の部下だ……だから、俺が止めなければならないんだ。俺でなければいけないんだ」

「スウェン……」

流石の一夏でも気づいた、そのスウェンの声には焦りと怒りに近い感情が入り混じっている事に。

「わかった、俺は先生達がこっちに来ないように止めて来る」

「!？」

「なっ！ 一夏!？」

突然の一夏の言葉にスウェン、筈は驚いた表情をする。

「本当は俺がぶん殴ってやりたいところだけどスウェンに任せる。頼むぜ」

「解っている……ありがとう、一夏」

「おう、あれ？ 今……」

「いいから行け」

「あ、ああ！」

一夏はアリーナの出口に向かって走っていく。一方の箒は黙ってスウェンの事を見る。

「……」

「何か言いたそうだな」

「いや……私も一夏の方に行く。しっかりやれよ」

そう言い残すと箒は一夏の後を追う。残されたスウェンはフラガラツハの切っ先を漆黒のISに向ける。

「行くぞ……ラウラ」

スウェンが漆黒のISへと駆けると、腰のアーマーからアーマーシユナイダーと酷似した武装を取り出し、スウェンと応戦。アーマーシユナイダーから繰り出される攻撃はスウェンを圧倒する。

「くっ！ 一撃が重い……」

明らかに先程のラウラの力によるものではない。VTシステムは此処までのものなのか、とスウェンは判断する。一旦距離を取り、フラガラッハを構え直す。

「ラウラ……あの叫びはお前の苦しみから来たものなのか？」

漆黒のISは尚も攻撃の手を緩めない。

「その苦しみを生んだのは俺だ。だからこそ、俺はお前を止めなければならぬ」

スウェンは攻撃の合間を伺い、一瞬で懐へと飛び込んだ。

「戻って来い、ラウラ！ お前は俺が——」

フラガラッハを上方へと振り、漆黒のISを斬り裂いた。ピタリと動きを止めたそれはガクリと腕が下がり、アーマーシユナイダーを落とす。一閃された場所からはラウラが静かに開放される。

「たい……ちょう……？」

「ラウラー！」

弱々しいその声は今にも消えてしまいそうだ。スウェンはラウラを優しく受け止め、抱きかかえる。

／※／

『何故お前は強さを望んだ』

その背中を指すため。その瞳に私を映してほしかったから……。

『そのように言われるほどの人間ではない』

それでも、貴方は私の恩師であり、私の理想です。

……何故貴方はそこまでの強さを持っておられるのですか？

『俺は強くは無い。ただ——』

？

『進むべき道を間違えなかったから……かもな』

進むべき道？

『俺は一度間違えた道を歩いた。だが、そんな俺でも正しく、進むべき道を歩いた事によってここまでこれた。だからお前も自分の信じた正しい道を行け。もしお前が道を誤ったとき、俺が正す。俺がお前を——』

守る

第三十四話『思うが故に』

「……………ここは」

重い瞼を開けるラウラ。真っ先に視界に入るのは夕焼けに染められた天井と白いカーテン。

ラウラはおぼろげな意識の中、自分の状況を把握する。

「私は確か……………」

「目を覚ましたか」

「!?!」

カーテンの向こうからスウェンが姿を現し、ラウラは疲労によって重く感じる身体を無理やり起こす。

「た、隊長……………私は一体……………」

「突然だが、ラウラ、VTシステムについて知識はあるか？」

「確か……………条約で開発などが禁止されているシステムで……………まさか

それがレーゲンに!？」

静かに頷き肯定するスウェン。

「だが今はもう心配は無い、機能が完全に止まったのが確認できた。安心しろ」

「は、はい……」

暗い表情でラウラは顔を伏せる。スウェンはそんなラウラを見ながら覚悟を決めたように

「ラウラ、すまなかった」

「？」

スウェンは当然頭を下げ、謝罪の言葉を口にする。ラウラはいきなりのスウェンの行動に焦りを見せる。

「どうしたのですか、隊長！ 隊長が私に謝ることなど……」

「いや、俺は……俺はお前の事を避けていた」

「え？」

何時も以上の真剣な表情のスウエンはまっすぐにラウラを見つめる。

「軍とは……部隊とはどのようなものであるかは知っていたはずだった。私情を持ち込むなど言語道断、それをわかっていながらも俺は、モンド・グロツソの時あのような行動をしてしまった。俺にとってシユバルツェ・ハーゼは初めて出来た俺の居場所だと感じていた。初めて俺の事を必要としてくれる人間達が居た。俺はそんな場所を壊したくは無かった」

微かに震えるスウエンの拳。搾り出すような声で言葉を続けた。

「俺はあんな行動を犯してしまった。もう、部隊の皆が今まで通り接してくれないのではないかと怖くなった。だから俺は誰にも告げず部隊を去った。そしてラウラ、お前が学園に来るとは予想もしていなかった。何よりも……お前が昔と何ら変わり無く、俺に接してきてくれたことが……嬉しかったんだ。けどそれと同時に最悪な事ばかりを想定してしまい俺は恐怖していた……だが今回の件で気づいた。お前は本当に俺の事を慕ってくれたんだと。そして俺のせいで、お前があんな事になってしまったんだと気づいた。俺は取り返

しのつかない事をした……本当にすまない」

再び頭を下げるスウェン。ラウラはそんなスウェンの姿を見て、どう言葉を掛けてよいかわからなかった。だが

「……隊長、頭を上げてください。私があのようになったのは私の責任です。隊長には非はありません」

「ラウラ……」

「安心してください。私、いえ、私達シュバルツェ・ハーゼは隊長がどのような選択をしてもそれが正しいと信じています。私が言うのもなんですが、隊長は深く考えすぎなのですよ。けど、よかったです。隊長は昔と何ら変わりの無い、私達の『スウェン隊長』だったという事がわかって安心しました。私達は何があっても隊長の名の下にあります」

震えていた手をラウラは優しく包み言う。スウェンは微笑を浮かべながら

「……ありがとう、ラウラ。お前が俺の部下で本当に良かった」

「そ、そんな……そこまで言うてくださるなんて……あ、あの隊長」

頬をほんのりと赤く染め、ラウラは視線を外す。

「あの時言ってくれなかった……その、私の事を『守る』というのは本当ですか？」

その様子は年相応の少女。照れながらに言うラウラをスウェンは新鮮な感覚で見っていた。スウェンの返答は既に決まっていた。

「ああ、俺はお前を守る。絶対にだ……もう二度と、仲間を失いたくはない」

「え？」

最後の言葉が聞き取れなかったラウラだが、スウェンは背をラウラに向け

「すまないが、俺はそろそろ行く。お前も身体を安静にした後部屋に戻れ」

「はい！ 隊長！」

「いい返事だ。それではな」

そう言い残し、保健室を後にするスウェン。残されたラウラはベッドにもう一度身体を倒し

「……………！！！」

先程のスウェンの言葉を思い出し、悶える様に身体を震わせる。

「隊長が……私を守ってください……隊長が私の事を見てくださる……こんなに嬉しい事はない。私も隊長の意志に答えねば！！……スウェン隊長」

ラウラは胸に違和感を感じ抑える。だが痛みなどではなく、不快感も感じない。ラウラがスウェンの事を思うたびにその違和感は続く。

「な、なんなのだ……この言いようの無い感覚は……けど、嫌ではない……な」



保健室から出たスウェンは少し進み、立ち止まる。

「……ネーベル、居るか？」

「此処に」

物陰から一人の少女が姿を現す。

「頼んでいた件についてだが」

「はい、まず結果ですがご安心を。VTシステムがレーゲンに積み
れたのは、夫妻がストライカーシステムを搭載させた後のようです。
夫妻はVTシステムに一切関与しておりませんので」

「わかった……お前達には苦勞をかける」

「……我等、『ガイスト・シユメルツト』を何なりとお使いください。……人が来たようです、私はこれで」

「ああ」

その少女は一瞬にして姿を消し、少女の言葉通り、一人の少年……いや少女がスウエンの方へ来る。シャルルのようだ。

「スウエン、ラウラは大丈夫？」

「ああ、先程まで話していた。身体に異常は無いようだ」

「そっか……ならいいんだ。それよりスウエン！」

突然シャルルはスウエンの手を掴み歩きだす。

「デュノア、一体何のつもりだ？」

「いいから黙ってついてくる！」

「………了解した」

言い様の無い威圧に思わずスウエンは黙りこむ。その道中に一夏が居たが。

「あ、スウエー―」

「一夏！ 後でね！」

「お、おう……」

一夏も同様、シャルルの威圧に圧されて一歩引きながらに静まり返る。

「何なんだ……一体」

※

シャルルに強制的に自室へ連れられたスウエンだが全く心当たりがないため啞然とした表情をする。

「デュノア、一体なんの真似だ。何があったというのだ」

「ほほう、自覚がないみたいだね、スウェン。なら教えて上げる」

シャルルは机をバン！と叩き。

「何である時通信を一方的に切ったの！！僕だって何か手伝えることあったかもしれないのに！」

「……」

スウェンはその程度の事か。と思わず口走ろうとしたが、口は災いの元、喉の手前で押し止める。

「……通信を切った事に対しては本当にすまないと思ってる。だが、こればかりは俺とラウラの問題だ。デュノアが関わることはない」

「うっ……それはそうなんだけど……け、けど！少しは頼ってくれてもいいと思うんだ……確かにスウェンとラウラの問題かもしれないけど……それでも僕にも何かできたかもしれないんだ」

俯き、小さな声でシャルルは続けた。

「前に言ったでしょ、友達は支え合うものだって……スウェンが僕の事を支えてくれるのは嬉しい。だけど僕にも、もっとスウェンの事を支えさせてよ」

「デュノア……」

その言葉を受け、スウェンは

「……俺は確かに考えすぎなのかもしれないな。友人を……失いたくないがために、頼れず、自分一人で抱え込み解決しようとしてきた。俺はもう独りではないというのに……」

「スウェンの気持ちは嬉しいよ。けど頼ってくれないとやっぱり寂しいよ」

「ああ……これからはなるべく抱え込まないよう努力はする。なるべく……友人に頼るようにしよう」

「うん！それが一番だよ！」

満面の笑みでシャルルは言いスウェンはその笑みを見て自然に口を緩ませた。

※

そして同時刻、ドイツのとある施設にて。

「シュバルツェア・レーゲンに搭載したVTシステム、起動は確認できましたが、例のスウェン・カル・バヤンがシステムの起動を停止させたようです」

「ふん、黒ウサギ……シュハイクのお気に入りには随分と余計なことをしてくれる」

悪態をつく白衣の男。男は再び鼻をふんとならし

「まあいい、システムの研究続行だ。政府とてこの施設を認知することはまず不可能……」

その時、耳をつんざくような音が男の襲う。緊急時に発令するサインだ。

「なんだ！何が起きている！」

「施設上空に所属不明の浮遊物体が施設に攻撃しているようです！」

「なに！？」

男はすぐにモニターを見ようとするが、外部のカメラは既に破壊され状況が掴めない。

「どういうことだ！！防衛装置は！」

「ダメです！第三、第四装置も破壊！っ！？ぐわああ！！！！！」

「なっ！？ぎゃああああ！！！！！」

天井が崩れ、二人の男は下敷きとなる。天井が崩れたことにより空が見え、月の光が施設に差し込んだ。

「な、なにがあ……!?!」

意識が途切れるなか、男は目にする。月の光よりも更に輝く、その光に。

「て、『天輪』が何故っ……!」

その言葉を最後に男は意識を閉ざした。そして天に瞬く輝きは何処かへと飛び去っていった。

第三十五話『選ぶ道』

「…………ふむ」

夜、9時を回った辺りにスウェンは端末を見ながら廊下を歩いていた。

端末に記された内容は今回のトーナメント戦についての事項だ。

V Tシステムにより、学園は事故という名目でトーナメントを中止。端末には各個人のデータはとる模様であると記載されていた。

スウェンは端末を閉じ軽く溜め息を吐き

「…………前の代表戦でもトラブルがあって中止。そして今回のトーナメント戦も事故とし中止…………学園として良い物なのか、ここまでの中止の連続は…………」

また今後もトラブルが起きればその開催されたものは中止になるのでは？とスウェンは毒づく。

「まあもっとも、俺が気にしても仕方がない…………か」

「よっ、スウェン」

「？」

不意に肩を叩かれ、一夏が顔を覗かせる。

「一夏か……どうした？」

「山田先生がさ、男子の大浴場が解禁されるって言っててさ。一緒に行かないか？」

「……すまない、今日は気乗りがしなくてな。またの機会にさせてもらう」

「そっかじゃあ仕方ないよな。シャルルの奴にも断られたんだよな
あく」

「（当たり前だろう、デュノアは女だからな。まあこいつは知らないから仕方がないか……）」

残念がる一夏を尻目にスウェンはそう頭で眩く。

「あ、そういやさ、スウエン」

「何だ？」

「何で俺のこと名字じゃなくて名前で呼ぶようになったんだ？」

「……別に深い意味はない。だが強いて言えば……」

スウエンは一夏の隣に立ち、肩に手を乗せ

「信頼できるから……かもな」

「え？」

「それではな」

軽く笑いながら、スウエンは一夏から手を離し廊下を歩いていく。

※

知らず知らずに時間は過ぎていくもの、スウェンは夕食を終えシャワーを浴び、寮の外に来ていた。

「……」

何も言わず、ただ夜空を見ていた。そんなスウェンを見ている少女が1人。

「スウェン……」

木の陰からスウェンの様子をずっと見ていた簪がそこにいた。

「……そこにいるのは、簪か？」

「ひう！」

突然声を掛けられ、簪は恐る恐る木から離れスウェンの前に姿を見せる。

「何でわかったの？」

「そんな気がした」

「ま、まるで私が何時も物陰から見てる人みたいな言い方だね……」

「……気を悪くしたならすまない」

謝罪の言葉に簪は首を横にふる。

「別に……気にしてないから。スウェン、何してたの？」

「星を見ていた」

「?……あ」

簪も空を見ると、そこには散りばめられた様に星が輝いていた。

「綺麗だね」

「ああ。本来なら建物の光等で星はよく見れないのだが、寮の離れの此処はよく星が見える……俺は気づけば何時もこうして此処に来ている」

「星が好きなんだね、スウエンは」

「……」

「スウエン？」

簪はスウエンの顔を覗きこむ。

「……こうして星を見ているときは、昔の事を思い出す。楽しかった事、辛かった事を……」

スウエンは自分の掌を見て

「それと同時に思い起こさせる。自分のしてきた数々の事を……俺は……」

首をふり、スウエンは苦笑し

「すまない、忘れてくれ。そうだ、今度お前に頼みたいことがあるのだが、構わないだろうか？」

「うん、いいよ」

「感謝する。本当にお前には助けられてばかりだ」

「そんなことないよ、私だってスウエンに……」

「？」

「な、何でもない！そ、それじゃ私寮に戻るから！」

そう言うと簪は慌ただしく寮へ歩いていった。

「……更識簪か」

簪の名を呟くと、スウエンも寮に向けて足を運ぶ。

「成る程、スウエン君と簪ちゃんはやっぱり仲が良いみたいね……」

スウエンが過ぎ去った後、1人の少女がそこには居た。

※

「スウエン、どこいったのかな……」

スウエンはたまにこの時間帯になると、外に行ってくるって言って部屋から出てく。もう20分たった。何をしてくるかまでは聞かなかったけど……。

「ま、まさか女の子と一緒に!!」

……そ、そんな訳無いよね!スウエンに限ってそんな夜に会うような娘が居るわけ……

け、けどもし本当にそうだったら……スウエン普通に格好いいし、ちょっと無愛想だけど優しく、何時も気を使ってくれるし、一緒に居るだけで安心するし、絶対モテそうだよね……で、でもスウエンに限ってそんな……

「俺に限って何なのだ？」

「ひゃわああ！！！！！」

背後にスウエンが居たの気づかなくて思わず叫んじゃった……って
声出てたんだ……

「何故そんなに驚く、可笑しな奴だ」

「は、ははは……」

お、可笑しな奴……それ結構ぐさりと来るよお……

「さて、戻って来て早々だが、俺はもう寝る。デュノアはどうする？」

「ぼ、僕もそろそろ寝るよ。明日は普通に授業あるからね」

「そうだな」

スウエンはそのまま自分のベッドに寝転がって、背をこっちに向けて
た。僕もベッドに寝転がって

「電気消すね」

「ああ」

同時に部屋は暗くなり、静かな時間がやってくる。
い、言うなら今だよね？

「ねえ、スウエン。僕決めたことがあるんだ」

「何だ？」

「えっとね……一つは僕、ここに……学園に居ようと思う」

「……」

「スウエンが……頼れって言うてくれたから僕はここに居ようと思えるんだよ」

「……そうか」

スウエンは背中を僕に見せながら、相槌を打つ。

「あと一つは……僕は自分であり方を決めようって思ったんだ。これからは、僕の意志で自分が正しいと思った道を選んでいこうと思う」

「……それが良い。敷かれた道を歩くより自分の意志で、自分の足でしっかりと進む。それが一番良い」

「うん。それとね、僕の本当の名前……『シャルロット』って言うんだ。大好きだったお母さんがくれた、本当の名前」

「シャルロットか……良い名前だ」

「ありがとう。スウェンにもこれからは名前で呼んで欲しいな……な、なんて」

「……」

スウェンが急に喋らなくなっちゃった……ち、調子乗っちゃったかな……

「わかった……シャルロット、これからもよろしく頼むぞ」

「え？……う、うん！」

さっきまで背中を向けていたスウエンが、いつの間にか少し顔をこっちに向けていたのがわかった。

スウエン……ありがとう。今ならハッキリわかる、僕はスウエンの事……

※

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしく願います」

丁寧に挨拶をする、女子制服を着たシャルル改め、シャルロット。真那は疲労感たっぷりの声で

「えっとくそのく……ということですので、み、皆さん。仲良くしてあげてくださいね……はぁ、また部屋割りをしなければなりませんね……」

「改めてよろしくね、スウェン」

常時疲れた表情で言った真那。そして笑顔のシャルロット、そしてスウェンは軽く笑いシャルロットを見ていた。

「カルバヤン君、どういふことか説明してほしいな」

「デュノア……さんと一緒の部屋だったからね」

「……厄介な」

その後弁明するためにスウェンは、真那並みに疲労したというのは別の話である。

第三十六話『恋』

「さて、どういふことか説明してもらおうかな？」

「……」

スウエンの部屋にて、やや恐ろしい笑顔のシャルロット。そして前に座らされているスウエンと、男子制服を羽織り、何故かその雪のような白い肌を惜しげもなく晒しているラウラが居た。

何故彼らがこのような状況になったかと言うと、夕方の事である。

※

「嵐、少しいいか？」

「なに？」

放課後、スウエンは教室から出てきた鈴音を引き留める。

「この後訓練をしたいのだが、相手が欲しい。模擬戦をしてはくれないか？」

「うーん、そうねえ……」

「一夏も居るぞ。あいつにも色々とききやってくれ」

『一夏』という単語に鈴音はピクリと動いた。

「そ、そういうことなら仕方ないわね、付き合うわ。他に誰か来るの？」

「いや、呼ばない方が都合良いだろう。俺も一戦終えたら止める予定だ。その後は一夏と二人で訓練をすればいい」

スウエンの少なからずの気遣いに、鈴音は

「スウエン……あんた、いいやつね」

「どうかな……さて、行くでしょう。アリーナで一夏が待っている」

そうして二人はアリーナへ向かったが、その物影で二人……いや、スウェンを見ている少女が居る。

「……はぁ……隊長」

それはスウェンの後ろ姿を見て惚けているラウラであった。

「い、いかん。黒ウサギ隊、現隊長であるこの私がこのような……し、しかし……むう……」

ラウラはここ最近、スウェンを見るたびに何とも言えない胸の高鳴りに襲われていた。このままではいかんと一言言おうと携帯を取りだし

「……私だ」

電話の相手はというと……

※

「これはラウラ隊長、いかがなされました？」

そう、ラウラの電話をかけたのはシュバルツェ・ハーゼ副隊長、クラリッサであった。

『う、うむ。実は相談があつてな』

「ほう、ラウラ隊長が相談とは御珍しい、一体どのような相談で？」

『そ、それはここ最近――ののだ』

「は？ 隊長、よく聞こえませんでした」

肝心な後半の部分が聞き取れず、クラリッサはラウラに聞きなおす。

『だから……ここ最近、スウェン隊長の事を思ったり、お姿を見る』

たびにこう、胸が締め付けられるような感覚が襲ってくるのだ』

「……ふむふむ」

『クラリッサ、これは何かの病気なのだろうか？』

「ええ！ これは重大な病です！」

『な、なっ！？』

電話の無効ではラウラは驚愕した声を出す。クラリッサは一息つき

「ラウラ隊長、その病はずばり！！」

『ず、ずばり……？』

「恋の病です！！」

傍から見れば背後から「ドーン」という効果音がなりそうな勢いでそう言ったクラリッサ。勿論ラウラは呆然としていたが、すぐに我にかえる。

『こ、恋……こ、この私がスウェン隊長に！？』

※

「ノワールの調子も悪くない、もう少し訓練の質を上げるべきか…
…」

放課後の訓練を終えたスウェンは自室へ戻っている途中であった。タッグ戦で負ったノワールのダメージは完全に修復しており、更なる訓練の向上をしようか考えているスウェン。

そうこうしているうちに自室の前にやってきた。そしてドアノブに手をかけたが

「……開いている？」

鍵が開いており、ドアノブが回る。スウェンは鍵はしっかりとかけており、さらにシャルロットも購買に行った。スウェンは警戒し、ゆっくりと部屋に入る。

「……」

部屋は暗く、閉められたカーテンの隙間から光が漏れているだけだ。静かに扉を閉じ、数歩前に進むと

「……誰だ」

背後に気配を感じ、スウエンはすぐさま振り向く。そこで姿を現したのは

「ラウラ……?」

どうやらラウラが扉の後ろに隠れていたようだ。ラウラはスウエンへと近づき

「なぜお前がここにー」

「隊長!」

突然ラウラは飛びつき、スウエンはそのまま体制を崩して倒れこむ。

「っ……ラウラ、一体何の真似だ?」

「隊長、突然のご無礼をお許してください。隊長、これから……」

そしてラウラは服を脱ぎ

「既成事実を作らせていただきます！！」

「……は？」

スウェンは思わず呆気にとられた表情をし、冷静に現在の状況を把握した。

「さてラウラ、お前は自分の言っている意味が……」

最後まで言葉をつなげようとしたが、ラウラの真剣な表情を見て

「（まずい、ラウラは本気だ……まで考えろ、あのラウラが突然このような行動をとるか？ ありえない、裏に誰かがいると見た）」

頭で冷静に判断するが、ラウラは刻一刻とスウェンへと迫る。

「隊長……」

「（やるか……）」

スウェンは呼吸を整え

「ラウラ・ボーデヴィッヒ！！」

「！？ は、はい！！」

急なスウェンの気迫のある一声に、ラウラはスウェンから離れ待機姿勢をとる。

「お前に既成事実などを教えた人物は誰だ！」

「はっ！ クラリッサ副隊長であります！」

「なるほど、あいつか」

「……あっ!？」

ラウラは自分の口にしたことに気づき

「た、隊長……」

「すまん、自分を守るためだ。色々とな。さて、さっさと服をき
ー」

「スウェンもう戻ってたのー?……ええ?」

運が悪く、シャルロットが購買から戻って来、その光景を目にした。

そして冒頭に戻るのである。

「シャルロット、弁明の余地を与えて欲しい」

「何かな？」

「ラウラが一方的に襲ってきた」

「んなぁあ！？」

「すまん、ラウラ。俺の威厳を守るためだ」

「そ、そんなぁ……」

するとシャルロットは何かを察したように

「……ねえスウェン、少し席はずしてもらえないかな？」

「？……ああ」

スウェンは立ち上がり、シャルロットに言われたとおりに部屋を出て行く。残されたのは気まずい雰囲気。に呑まれたラウラとシャルロットだけ。

「ラウラ」

「な、なんだ！」

「もしかしてラウラってき、スウェンの事好きなの？」

「え？」

その問いにラウラは戸惑いを隠せない。が、こくりとうなずき肯定を示した。

「そうなんだ、ラウラもなんだ」

「も、だと？ デュノア、お前も隊長の事を？」

「うん。何でラウラはスウェンの事が好きなの？」

「それは……隊長は私にとって恩師で、私に全てを与えてくれた人だ。だが、あの時……私が暴走して助けてくれた時から、私の感情は変わっていた。私は隊長を異性としてみるようになり、更に隊長を思ったりしているところみ上げて来るこの感情は、恋なのだと感じた」

「そっか……お互い、スウェンに助けられて好きになっちゃったん

だね」

シャルロットは笑顔になりながらラウラに言う。

「ってことは、僕とラウラは恋のライバルってわけだね♪」

ラウラはきよとんとしていたが、軽く笑い

「くくく……いいだろう、私と隊長の間にお前が入ることが出来ないということを知らしめてやろう！」

「負けないよ！ 僕だってスウェンに対する気持ちならラウラに負けないから！」

※

「ふふふ、あのまじめなスウェン中尉だ。ラウラ隊長と既成事実が出来てしまえば責任をくと言って二人が結ばれることは間違いない。今頃どうなっているかいるか楽しみだ」

さぞ上機嫌なクラリッサに隊員が

「そううまくいってますかねえ……」

「問題ないだろう、あのラウラ隊長ならーむ」

携帯がなり、クラリッサは手にとる。先ほどの上機嫌な表情から一変、凍りつくような表情に変わった。何故なら相手は……

「こ、これはこれは、スウェン隊長、い、いかがなされました？」

電話の相手は恐らく内面般若のような形相をしているスウェンであった。

「要件はひとつだ、クラリッサ」

電話の向こうのスウェンはまるで静かなる鬼の如くの声で

「ドイツに戻ったら覚えておけ」

そこで電話は切れた、隊員は恐る恐る

「スウェン隊長はなんと？」

クラリッサはゆっくりと隊員のほうを向き

「私、死ぬかもな」

「ええええええええ！？」

爽やかな笑顔でそう言ったのであった。

番外編『レーゲン scene1』

私はラウラ・ボーデヴィツヒ。ドイツ軍IS配備特殊部隊、シュヴァルツェ・ハーゼの……現隊長だ。

先日、シュハイク責任官より隊長に任命され、今日初めて部隊の皆に公にする。

今、私は皆が居る訓練場へと足を運んでいるのだが……

「……」

恐らくこれは緊張というものだろう、心なしか足が重く感じる。それもそうだ、スウェン隊長がこの部隊から去り、日本へと渡り部隊の皆はショックを受けていた。そんな中、私が新たな隊長となり皆の前に立つ。

いくらシュハイク責任官と上層部の推薦とはいえ、元々私は落ちこぼれだ。快く思っていない事も少なからずあるだろう。そう考えるとまた足が重く感じる。

「ラウラ隊長、そんなに固くならずともいいのですよ」

「はい……」

そんな私を見かねたのか、クラリッサ副隊長は笑みを浮かべながら言う。私の口から出たのは覇気の籠っていない応答だけだ。

そして訓練場

「本日よりスウェン隊長に代わり、シュバルツェ・ハーゼの新隊長に任命された、ラウラ・ボーデヴィツヒであります。隊のために全身全霊をかけて尽力していく所存でありますので、これから……改めてよろしくお願いいたします」

そのまま頭を下げる。しかし私は頭を上げることが出来なかった。皆と顔を合わせるのが怖い、どのような眼で私を見ているのか想像もしたくない。だがそんな私の思いを裏腹に、微かに笑う声が聞こえた。

「なるほど、スウェン隊長の後任はラウラだったか」

「スウェン隊長が居なくなっていて、この隊はどうなるのか心配だったけど」

「ラウラが隊長なら安心ね」

「え……?」

ふと顔を上げると、部隊の皆は笑顔で私のことを見てくれた。この時、心の中にある雲は一気に晴れていった。

「しかしあのラウラが隊長ね」

「わからないものだ」

「こらこら、新隊長になんて物言いだ。それにこれから訓練があるんだから気を引き締めろ」

クラリッサ副隊長は一步前に出てそう言うと、皆は表情を変える。そしてクラリッサ副隊長こちらに視線を移し

「それではラウラ隊長、指示を」

「は、はい！」

一息置き

「これから訓練を行う。まあ訓練はいつも通りだが、スウェン隊長の教え、向上心忘れる事無かれを忘れずに行って欲しい。それでは始めてくれ」

「「はっ！」」

そして皆は敬礼の後、訓練に向かった。

「ふふ、隊長らしさがでてきましたね」

「か、からかわないでください……」

「これは申し訳ありません、ラウラ隊長。あ、この後グレーデュント夫妻のところへいきますのでお忘れなく」

「わかりました」

「それでは少し私は席をはずしますので」

そういい残すと、クラリッサ副隊長は隊舎の方へ向かった。グレーデュント夫妻……。スウェン隊長の義理の両親で、ストライクの……ストライカーシステムの開発者。私が呼ばれたということ

はつまり……

「ラウラ」

「？」

不意に呼ばれそちらを向く。そこに居たのは赤髪を型まで伸ばした
隊員……

「ヴェッター……」

『ヴェッター』。シュバルツェ・ハーゼの実行部隊、『^{ヴァイントソルダート}風の兵士』
と呼ばれるチームに所属している。ヴァイント・ソルダートとはスウ
エン隊長、クラリッサ副隊長の推薦で選ばれた三人で構成されてる。

「あたしは認めない！」

「？」

ヴェッターは体を震わせ

「あんたがこの部隊の隊長だなんて絶対に認めない!!」

「ヴェッター……」

怒りの感情がはっきりわかる表情で、何処かへと歩いてくヴェッター
し。

ヴェッター、一体なぜ……ん？

「お前たち……」

「おはよう、ラウラ」

「朝から難儀ね」

茶色の髪に、頬にソバカスがある隊員と、腰まで伸ばした黒い髪の
隊員。この二人もヴェッターと同じくヴィント・ソルダートのメン
バー、『レーレ』と『シュトース』だ。

「シュトース、レーレ……」

「まああの娘の気持ちも解らなくもないわ。ヴェッターだってラウ
ラと同じでスウェン隊長のお陰で変われて、ここまでこれて、尊敬

以上の感情を持つてる」

「そんなスウェン隊長が突然居なくなって悲しいだと思っよ。しかもラウラがいきなり隊長だなんて、心の準備もできてなかったんだよ」

「そ、そうだろうか……」

「こればかりはヴェッターと話合うしかないわね。まあゆっくりとやっていけばいい」

「そうそう、焦る事なんてないんだよ」

「ありがとう、シュトース、レーレ」

やはりシュトースとレーレは優しい、こんな仲間と共に居れて、同じ隊に居れて私は幸せだ。

※

「ここが夫妻の……」

グレーデュント夫妻が居るであろう研究所へとやってきた。すると研究員の一人が私の下にやって来る。

「ラウラ・ボーデヴィツヒさんですね」

「はい」

「お待ちしております、それではこちらへ」

研究員に言われるとおりにその後を追う。この研究員は日本人か、顔つきがそうだからな。

「こうしていると昔を思い出しますよ」

「昔？」

「ええ、昔こうしてスウェン君を案内したことがあるんですよ」

「そうですか……」

「……あ、すいません、嫌なこと思い出させてしまいましたね」

そう謝ったが、私は別に……

「いえ、気にしていません」

「そうですか、よかった……さて、つきました、この部屋に博士たちが居ますので」

「案内ありがとうございます。それでは」

私は一瞥しその扉をくぐった。そこは機材が散らばっており、少しほの暗い。その先には一人の男性が機器の前に居た。あの方がスウェン隊長の義父、D r r o i か。足元に気を配りながら男性に近づく。

「D r r o i」

「ん？」

D r r o i はこちらに気づいた。

「えっと、君がラウラさんだね」

「はい」

「よく来てくれたね、歓迎するよ」

D rロイは笑いながらに言う。すると

「こうして直接話をするのは初めてになるね。君の話はスウェンから色々聞いてるよ」

「た、隊長から？」

肯定を示すようにD rロイは頷く。

「とても素直で、真面目で、何時も自分について来てくれた自慢の部下だって言ってたよ」

そんな……隊長がそんな事を……気づけば私は口元が緩んでいた。いかんいかん……。

「しかし……」

D rロイは少しこちらに近づき顔を覗き込んでくる。

「本当にリズの生き写しだねえ」

「リズ？ 確かD rロイの」

「うん、娘だよ。ラウラさん……リズの生き別れの姉って事はないよね」

「違います」

思わず即答した。そんなに似ているのか？ そのリズという娘に……

…

「おっとごめん、こんな詰まらない話をしに来た訳じゃないんだよね。準備は出来てるよ」

「ではもう完成が？」

「うん」

D rロイは近くの機器へと歩み寄る。

「これが君の専用機になる、S P P 0 2 / N S。『シュバルツエア・レーゲン』だ」

ライトが灯るとそこには黒を基調とした装甲に二対の非固定ユニットを装備したI Sが鎮座している。これが……。

「ストライクの戦闘データを元にし、ストライクのように背部直接装備ではなく、非固定ユニットにストライカーを装備することが可能となった試作機だ。見た目と名前は違うけど、れっきとしたストライクの兄妹機になるね。あとこれ」

D rロイはブック型の端末を手渡す。

「それにレーゲンのデータが入ってる。しっかり目を通しておいてね」

「はい、これ程までのI Sを私に託してくださり感謝します」

「いいんだよ、君にこれを託すのは僕達の意味だ。スウェンが信頼している君にならこれをしっかりと使いこなしてくれる。僕はそう信じている。」

「D r r o i ……」

託された。私はこの言葉が胸に響く。

そうだ、私は託されたんだ。シュハイク責任官や皆から誇りを、D r r o i 達には信頼を。

私は立派な隊長になって見せる。スウェン隊長が安心してこの部隊を戻って来れるように、部隊の皆が正しい道へ進めるように、私は……頑張らなければならないんだ。ヴェッター……私は……

第三十七話『呼ばれる由縁』

第二アリーナにて空に飛翔する4つの影、片や

「ぬおおおお!!!」

雪片を構え突進をかける一夏。片や

「突っ込みすぎだ、一夏!」

打鉄を身に纏い、一夏に制止の言葉をかける筈。そして片や

「猪突猛進か……あいつらしい」

「隊長、ここは私が!」

向かってくる一夏を迎撃体制に入る、スウエンとラウラだった。

「おりゃあっ!!!」

「無駄だ！」

雪片の一撃はラウラのティーンナーゲルが阻む。箒は一夏に助太刀しようとするが、そこにスウェンが

「させると思うか？」

「くっ！なら推し通るのみ！！！」

箒はブレードを握りしめ、スウェンへと向かう。スウェンはフラガラッハを引き抜き、繰り出される斬撃を受け止める。

「これでどうだ！」

「……ちっ」

勢いに押され、スウェンは退きつつ

「ふっ」

ノワールストライカーからアンカーを射出し後方へと飛び退くとすれ違うように

「私が相手だ！」

まるで弾丸の如く、アンカーによって引き寄せられたラウラが箒へと斬りかかる。

「箒！っ！？」

「余所見をしている暇があるのか？」

「ぐあっ！？」

一夏は勢いよくスウェンに首を捕まれ、そのまま地面へと連れて行かれ叩きつけられる。一夏は体を起こそうとするがフラガラツハのマウント部に腕を掛けられ、地面に深々と突き刺し両腕を拘束された。

「終わらせる」

フラガラッハのグリップが引き抜かれると、そこからビームサーベルが出現した。一夏は思わず声を上げる。

「ってえ！そんなのありか!？」

「そういう武装だ」

スウェンはそう論破するとそのままビームサーベルを振り下ろした。

「甘いぞ！」

「なかなかやる……!！」

一方の箒はラウラの攻撃を受け止めつつ、反撃の機会を伺う。一瞬だけでも一夏の方を向こうとすると、ラウラからの鋭い攻撃がそれを阻害する。ラウラはティーアナーゲルを合体させ強く握りしめ

「せいっ!！」

「お、重い……」

振り下ろされた一撃は箒に隙を生み出す。するとラウラは不適に笑みを浮かべて、上へと飛ぶ。そこには

「なっ!？」

ラウラの後方からはレーゲンストライカーへと換装し、ゲイボルグを箒へと向けているスウェンが。

「もらった」

そしてゲイボルグから砲弾が放たれ、箒は直撃した……

※

「だく!! 勝てねえ!!」

食堂で机に突っ伏し項垂れている一夏。ちょうど夕食をとっており、皆それぞれ定食を食べている。珍しくスウエンはカレーではなく、焼き魚定食を食べていたことに驚かれたのは別の話。対する箒は腕を組みながら不機嫌そうに

「お前の行動が単調すぎるのが悪いんだろう、一緒に組む身になれ」

「ぐっ……」

そう指摘を受け更に表情を悪くし、傍にいる鈴音とセシリアも苦笑いをせざる負えない。ラウラはそんな一夏に

「ふん、貴様等のような連携がまともに取れない奴らが、私と隊長のタッグに勝てるわけなからう」

「それにISの相性もあるしね。白式と打鉄は完全な近接タイプ、それに対してノワールとレーゲンは遠近と両立できる万能機だから相手も少し悪かったのもあるかも」

隣に座っているシャルロットもラウラに次いで言う。

「お前ら二人は幼馴染なのだから、少しは連携は出来るものだと思
んでいたのだがな。見当違いか」

「うっ……」

スウエンの思わぬ言葉に一夏と箒はぐうの音も出ない。

「しかしラウラさんとスウエンさんの連携は凄いですわね、何と言
いますか……呼吸が合っていると云うのが相応しいですわ」

「まあ……正直なところ、ラウラと組みやすいのは確かだ。ラウラ
は俺の動きに合わせてくれるし、足並みも揃えられる。俺の足りな
いところを補ってくれているからな」

「そ、そんな……隊長こそ動きに合わせてくれるからこそ、私が初
めて動けるのであって、私はそこまで言われるほどでは……」

頬を赤らめラウラは下を向きながらに言う。するとシャルロットが
思い出したかのように

「そういえば色々あって今まで聞けなかったけど、何でラウラはスウェンの事を『隊長』って呼んでるの？」

「あ、それ私も気になった」

「俺もだ、何でだ？」

皆からの視線がスウェンに集まり、スウェンは表情を変えずに

「そうだな、聞かれなかったから教えていなかったが……まずお前はシュバルツェ・ハーゼという部隊について知っているか？」

「シュバルツェ・ハーゼ？えっと、どっかで聞いたような……」

「ドイツのIS配備特殊部隊の事ですわよ、一夏さん。ドイツ国内の10機のISの内、3機を保有している実質ドイツ最強の部隊と呼ばれてますわ」

「オルコットの言う通りだが、少し訂正すべきところがある。ドイツ国内のISの内、もう3機ほど我が部隊に託された」

「3機も!？」

「……すげえな、シュバルツェ・ハーゼって……」

思わず一夏は呆けた顔をするが、スウエンは構わず話を進める。

「そのシュバルツェ・ハーゼの現隊長がラウラだ」

「そうなんですの!？」

「そりゃあんな事言ったら怒るのも頷けるわね……」

過去に鈴音とセシリアがラウラに対して言った言葉を思い出し、自
粛気味に小さく言う。ラウラは「そして」と繋げると

「部隊を育て上げ、私をここまで強く成長させていただいたスウエ
ン隊長こそが、前隊長なのだ」

「!？」

「ス、スウエンが隊長……!？」

一夏達は驚愕する。それもそのはず、シュバルツェ・ハーゼは世界
が認める有数の部隊。そんな部隊の前隊長が男、ましてやスウエン
であったという事に驚きを隠せない。

「だがあくまでも前隊長、だからな。今は普通の軍人だ……もう隊長でもなんでもない」

「それでも私は『隊長』と今まで通り呼ばせていただきますよ」

「……勝手にしろ」

半ば諦め掛けたかのようにスウェンはため息を吐く。

「ラウラがスウェンをそこまで慕う理由、わかった気がするよ」

「フフ……つまりだ、私と隊長の間には切っても切れぬ絆があるのだ、お前が入り込む隙間などないぞ？」

「むっ！ そ、そんなことないよ！僕だって……」

後半の方がよく聞き取れずラウラはいじの悪い笑みを浮かべながら

「どうした？聞こえんぞ？」

「う、うく……」

「全く、ラウラ、そこまで……すまない、席をはずす」

「「え？」」

突然スウェンは食器を持って立ち上がり、食器置き場へと置き何処かへと駆けていった。

「どしたのかしらスウェンさん？」

「何か用事でも思い出したんじゃない？」

「隊長……」

※

「簪」

「？」

食堂を飛び出したスウェンは廊下で簪を呼び止める。

「何か用？」

「ああ、明日の放課後少し手を貸して欲しい。お前の都合がよければなのだがな」

「……別に良いよ、予定ないし」

「それは助かる……そうだ、あと……」

「？」

スウェンは一息置くと

「付き合って欲しい」

「……え？」

第三十八話『勘違いのお買い物』

「付き合ってほしい」

スウェンにそう言われて、最初は頭が真っ白になった。突然のこと過ぎて頭が回らなかったというか……スウェンがそんなことを言うとは思わなかったとか色々考えたけど……

付き合ってほしいっていう意味は

「買物の事だったんだね……」

土曜日の10時頃、誰にも聞こえないほどの小さな声で呟いた。私は今、スウェンとの待ち合わせ場所にした街の広間に向かっている。今日の格好は何時もの制服。寮をでて、本音にそんな格好で何処に行くの？と聞かれたけど……とりあえず買い物って言った。

そして広間につくとスウェンは既に居た、しかも制服姿で。スウェンの私服ってそういえば見たことがないような……

スウェンは私に気づくと此方に歩いてくる。待たせちゃったかな……

…

「ごめん……待ってた？」

「いや、俺もつい先程来たところだ」

「なら……良かった」

って、このやりとり……ま、まるで恋人みたいな……ううん、これはただの買い物、スウェンと私はただの友達だけ。

「どうした、簪」

「な、なんでもない……」

「そうか。それではデパートまで案内頼む」

「うん……」

私はスウェンの横に立ち、街へと歩いていった。

「……」

朝、スウェンが突然街に行くって言ってたから、ほんとには他の人の日常を尾行するだなんて、僕はしたくないけど……あのスウェンが街に行くなんて珍しいから怪しんで着いてきた……

ってあの子誰！？スウェンと仲良さそうに並んでるよ！？

しかも簪って恐らく名前。スウェンは基本的に他の人の事を苗字で呼ぶのに……。

ラウラならともかく、僕だって名前でもらったの結構時間かかったのに、あの子は普通に呼んでもらってる……スウェンとどういう関係なんだろ……。

「む……気になるよお……」

あ！いけない、このままじゃ見失っちゃう！そうして僕のスウェンの追跡が始まった。

※

「む……気のせいかな？」

少しだけ背後に気配を感じ、そちらに意識を移すスウエン。すると
簪が

「ね、ねえ、スウエン」

「何だ？」

「どうしてデパートに案内してほしい、だなんて私に頼んだの？ク
ラスの子にでも頼めば良かったのに……」

スウエンは暫し考え、直ぐに言葉に出す。

「お前くらいしかこのような事を頼める相手が居なかった……とい
ったところか」

「私……くらい？」

「ああ」

「そ、そうなんだ……」

簪はスウェンに表情を見られないように下を向く。街並みを見ながらスウェンは感慨深く

「このように街へと来るのは初めてだな、何時も休みとなれば格納庫かアリーナか自室に居たからな」

「……スウェンって実は引きこもりじゃないよね？」

「変なことを言うな、俺は引きこもり等ではない」

「冗談だよ……真に受けないで」

「……お前はどうかなのだ？」

「え？私？……私は……何時も格納庫に……」

「俺と変わらないな」

「そう……だね」

似た者同士、と言った所であろう。とスウエンは思う。

「そういえばスウエンは何でデパートに行きたいの？」

「来週、臨海学校があるだろう。その為に水着を買わねばならない。学校指定の物で構わないと思ったんだが、女子連中に海を甘く見ない方がいいと訳のわからん事を言われてな」

「そういうことだったんだね……なら最初にそう言ってくれれば勘違いしなかったのに」

「？ 何か言ったか」

「……何も。そろそろつくよ」

こうして歩いていると、この街で一番大きなデパートへと辿り着いた。

スウエン達はデパートに入っていた……まさか……まさか……

「で、デート!?!」

男の人と女の子が一緒にデパートだなんてそうしか考え……いい、いや……スウェンに限って……そんなこと。で、でも……

「あれ、シャルロットじゃん」

「え？」

後ろから呼び掛けられてそちらを向くと、一夏と箒と一緒に居た。

「何してんだ？」

「べ、別に何もしてないよ!買い物でもしよーかなーと思ってね」

「そっか、俺達もなんだけどシャルロットも一緒にどうだ？」

「む」

……いや一夏、箒と二人きりなのに僕を誘うのはどうかと思うんだ

けどなく……ほら、箒凄く睨んでるよ。

「ごめんね、遠慮しとくよ」

「うーん、わかった。じゃ俺達行くから、またな」

「それではな」

「うん」

一夏と箒はデパートへと向かった。……は！スウエン達見失った！

※

「ふむ……」

スウエンは水着売り場に来るや否や、腕を組んで悩んでる。スウエンの視線の先にあるのは灰色と黒色に白いラインの入った水着、ど

ちらにするか迷ってるみたい。

「……スウェン、悩みすぎ」

「すまない、こう言った買い物は初めてでな。どちらにするか決められないんだ」

またスウェンは静かに悩み出した。スウェンって本当に黒色とか灰色とかの渋めの色が好きだよね……けどスウェンなら……

「スウェンなら……黒が似合うと思うよ」

「そうか？ならばこれにしよう」

そう言ってスウェンは黒の水着を手を取った。

「いいの？悩んでたの直ぐに決めちゃって」

「ああ、お前が似合うと言ってくれたんだ。無下には出来ない」

至って真面目な……というよりも何時も通りの表情でスウェンは言

うけど。

「すまないな、簪。付き合わせてしまった」

「ううん、私も新しいの買いたかったし」

手に持った袋をスウェンに見せながら私は言う。そしてスウェンと一緒にレジに向かう。

「お！よお、スウェン！」

「！？」

陽気な声でスウェンの事を呼ぶ男子……織斑 一夏……。

「スウェン」

「何だ？」

「先帰るね」

私は逃げるように、スウエンに顔を合わせずにその場から離れた。

「……簪」

「あれ、今の子って」

「4組の更式簪、俺の友人だ」

「ほう、4組か……一夏を見てまるで逃げるように行ったが……一夏、お前はまた何かしたのか？」

ジト目の箒に焦りながら一夏は

「いや知らねえって！俺初めて会ったし！……あ、そういえばさつきシャルロットと会ったぞ」

話を反らすかの如く一夏は言う。

「シャルロットが？……まさか先程の気配は……フツ、全く」

スウエンは軽く笑う。一夏達は何故か全くわからない様子だ。するとスウエンは手にした水着を持ち、元あった場所へ向かった。

※

「はぁ……」

結局スウエン達を見つけることが出来ずに、寮に帰ってきた。今でも思い出せる、デパートに向かうスウエンは何処か楽しそうな表情をしていた。僕はあんなスウエンを見たことないや。

部屋に戻ると

「帰ってきたか、シャルロット」

椅子に座ってスウエンはコーヒーを飲んでいた。

「随分とお楽しみだったみたいだね」

「まあ、楽しくなかったと言えば嘘になるな」

「そう良かったね」

スウェンに対して冷たい反応しか出来ない……僕って最低だ、あの子に嫉妬しちゃって……どうスウェンと話せば――

「シャルロット、明日は空いているか？」

「え？……えっと、うん、予定は無いけど……」

「なら明日、街へと一緒に行かないか？ 臨海学校の為に水着を買いに行きたいのでな」

「今日買いに行ったんじゃないの？」

「俺としたことが、財布を忘れてしまってな……買えなかったんだ」

「そっか……一緒に、二人きり？」

横目で見るとスウェンはこくりと頷いてくれた。

「そうだな……もしあれならラウラも——」

「いや！二人で行こう！一緒に行こう！」

「あ、ああ……」

二人きり……スウェンと二人きり……これをチャンスにしなきゃ！
……あの子の事も気になるけど、今は明日の事だけを考えないとね！

「はっ！？何故だ……何故か先を越されような気がするぞ！！」

一方のラウラは何かを察知したようだ……。

第三十九話『二人きり』

「はぁ……」

開幕大きなため息を吐いてしまった僕。今日は何と言ってもスウエンと二人きりのショッピング。

隣にはデパートへ一緒に向かっているスウエン……この状況はとても嬉しい事なだけど……。

僕がなんでこんなに不安かと言うと、十分前に遡る。

「〜♪」

鼻唄混じりに僕は寮の廊下を軽い足取りで歩いていく。昨日、一緒に居た娘が誰かとスウエンに聞いてみたけど

「友人だ」

としか言っていなかった。スウエンの事だから詮索されるのが嫌いだろうし僕も問い詰めるつもりは無い。それよりも今日は――

「随分と機嫌が良さそうだな、デュノア」

「勿論だよ！今日はスウェンと二人きりで――」

……はっ！？今気づいた、目の前に仁王立ちしているラウラの事に。
ラウラは維持の悪そうな笑みを浮かべて僕の隣に立つ。

「そうか、隊長と……それでは……な」

そうして何処かに行ったんだけど、凄く嫌な予感しかしないよ……

「……シャルロット、大丈夫か？」

「え？」

「先程から浮かない表情をしているが……体調でも悪いのか？」

「違うよ！ほら！昨日良く寝れなかったから少し眠いなーって！」

両手をブンブン振りながらスウェンにそう言う。

「そうか。無理はするな」

「うん、ありがとね、心配してくれて。スウェンは優しいや」

「俺が優しい？……どうだろうな、俺なんかよりもお前の方が優しい性格をしている」

「え？ぼ、僕の方が？」

「ああ、俺が保証する……むむ」

気づけばデパートは直ぐ目の前に。けど日曜日だからか人の数が昨日よりも多い。

「混んでいるな」

「まあ日曜日だからね、天気もいいし絶好のショッピング日和だよ」

「……」

するとスウェンが僕に手を差し出した。え？え？何？

「こうも人が多くては離れる危険もある、手を掴んでいればその心配も無くなるだろう」

「ええ！？手繋いでもいいの！？」

「良いも悪いもあるか、早くしろ」

「うん……」

そのままスウェンの手を掴む。うわ……僕の心臓、凄くドキドキしてる……スウェンに気づかれないかな？

「行くか」

手を繋いだまま、僕とスウェンはデパートへと。うん、やっぱりスウェンは優しいよ。僕が保証する♪

※

ドイツ軍上層部会議室にて。円状のテーブルにはそれぞれ、ドイツ軍の将軍等のトップクラスの人物が集まっていた。その中にはゲルハルト、シュハイクもいる。

「シュハイク大佐、先日現れた天輪について報告を」

促されたシュハイクは席を立つ。

「天輪は我が国内の研究施設を襲撃し、死傷者も数人……天輪は索的範囲外へと姿を消した。奴を見失ったのは手痛い、変わりに面白い事がわかった」

「面白い事？」

「奴が襲った施設は……VTシステムを研究していた」

その言葉に部屋はざわつく。

「しかも此度のラウラ・ボーデヴィツヒのレーゲンに仕組みられていたものは其処で開発されたものだ」

「まさかVTシステムが……本格的に施設状況を洗い直さねばならんな」

「ふん！あの近辺の管轄はザルバ、貴様だろう！貴様も関与してゐるのではないのか？」

白い髭を撫でながらに言う一人の將軍。ザルバと呼ばれた初老の男は反論する。

「確かにあの近辺は私の管轄だ！VTシステムの施設があることを知らなかった非は認める、だが私は関与していない！」

「どうだろうな、貴様は然程信用——」

「喧しい！！」

そのシュハイクの怒声と共に部屋は静まり返る。

「内部の者で争う暇などはない、今我らがすることは次にもし天輪が襲撃して来たときに、いかに迅速に対応するかだ」

「シュハイクの言う通りだな」

今まで黙っていたゲルハルトは口を開き始める。

「奴の力は凶りしれん。下手すりゃ黒ウサギ隊でも苦勞すんのは必死だ」

「……」

ジトツとシュハイクは睨むが、ゲルハルトはそれを無視し

「だがな、こっちには切り札があんだろ」

皆が互いに顔を見合わせる。

「スウェン・カル・バヤンか……」

「そう、あいつは恐らく前よりも圧倒的に力を付けた……それこそ」

「私に勝るとも劣らない強さを持っているに相違ない」

うんうんと何度もシュハイクは頷く。

「最悪の場合はスウェンを本国に帰還させる事もあり得る。基本は我ら黒ウサギ隊に事態は任せてもらうことになるが、異論はあるか？」

「……」

無言。ゲルハルトはよしと呟き

「さて、んじゃ会議はお開きだ」

※

「老害どもめ、所詮は役立たずの烏合の衆か」

シュハイクは苛立ちつつ、通路を歩いていると端末がなる。それを見たと表情を更に曇らせ

「私だ。一般通信で掛けてくるなど何度もいつているだろう。ああ、奴は私の隊で面倒を見ることになった。あれの存在は計画にも邪魔になるだろうよ……わかった、切るぞ」

通話を切り、もう一度端末を仕舞おうとするが再び端末は鳴る。

「今日は随分と……む、これは……」

※

水着売り場へとやってきたスウェンとシャルロット。

「俺は買うものを既に選んでいる。お前も選んでくるといい」

「うん、そうなんだけど……」

「どうした？」

「僕あんまりこういうの選んだことないからさ、スウェンが似合うと思うのを選んでほしいかなーって」

「……」

暫しスウェンは沈黙する。

「ダメかな？」

「……俺もあまりよくわからん。厳選したものを持ってこい、話はそれからだ」

「うん！」

意気揚々とシャルロットは駆けていく。

「我ながら妙なことを頼まれたものだ」

「それじゃ着替えるね」

「ああ」

2着の水着を持ったシャルロットは試着室のカーテンをしめ、着替え始める。布の擦れる音が聞こえるがスウェンは気にもせず、時を待つ。音がやむと

「お待たせ」

カーテンが開けられると鮮やかな水色の水着を着たシャルロットが。

「どうかな？」

「……悪くはないと思うが、あまりお前と合わないのではないか？」

「それじゃもうひとつの着るね」

再びカーテンが閉められると今度は先程よりも早く終わる。開けられたカーテンから覗くのは、晴れやかな黄色の水着、シャルロットの髪の色も際立ってより明るく見える。スウエンは「ほう」と腕を組んでそれを見る。

「……スウエン見すぎ、エッチ」

「いや、すまない。やはりお前はそういう明るい色が似合っているな」

「ホント！？それじゃこれにするね！」

「いいのか？まだ時間はある、他に選んでも……」

「ううん、せっかくスウエンが似合うって言うてくれたんだもん、これにするよ」

スウエンは先日の簪とのやり取りを思いだし軽く笑う。

「そうか、ならいい。それで……」

隣の試着室に視線を移し

「お前は何時までそうして隠れている？」

「え？」

すると隣の試着室のカーテンが開くと、そこにはラウラが居た。

「ええ！？」

「……隊長、何時からお気づきに？」

「ここに来てからだ、ここそ着いてくるのはあまり関心はしない」

「申し訳ありません……」

「まあいい……せっかくだ、女子生徒なら女子生徒らしくシヨツピングの一つでも経験しておくといい」

「……はい？」

更に咎められると思ったラウラだったが、思わず呆気に取られる。

「お前は水着を持っているか？」

「学園指定のものなら」

「ふむ、シャルロット、すまないがラウラの水着を選んでやってくれ」

「僕が？」

「適任だろう、頼む」

「……はあ、スウェン、ズルい。そう頼まれると断れるのも断れないよ。わかった、ラウラが何でいるのかは置いておくとするよ」

「恩に着る、俺は少しよるところがあるのでな、あとは頼んだ」

そう言うとスウェンは何処かへと歩いていった。ラウラは申し訳なさそうな表情をしながら

「デュノア、本当にすまない、隊長とお前が二人きりと聞いて居てもたってもいられなくなった……」

「んーまあそうだよね、僕でもそうしたかもしれないし、気にする必要はないよ」

「デュノア……ありがとう」

「よし、それじゃスウェンが驚く位似合うのラウラのために選んじょうよ！」

「ああ！頼む！」

※

シャルロット達と別れたスウェンは本屋へと足を運んでいた。品揃えも中々で、あちこちへと目が移る。そしてふと立ち止まったのは星に関するコーナーだ。

「……星か」

思い出すのは本国に居る義妹、リズだ。

「戻るときに何か買ってきてやるか」

いざ歩き出そうとしたが

「きゃ！」

「っ……っ」

スウエンは誰かとぶつかってしまい、相手の少女はその場へと尻餅を着いてしまう。

「申し訳ない、大丈夫か？」

「いえ、こっちが前を見てなかったので、ごめんなさい」

少女に手を差し伸べ、それをとり少女はありがとうございますと、立ち上がる。スウエンはその少女の容姿を見て数秒固まる。美しい

長い銀髪と紫の瞳。何とも言えない違和感にスウエンは駆られる。

「何か？」

「……いや、すまなかったな」

その横を通りすぎ、少女はスウエンの後ろ姿を見やる。

「あの方が私の……とても素敵な御方ではありませんか」

※

「ふっふっふ……完成！！」

高らかに声をあげる天災こと籐ノ之束。

「スーくんもきっと喜んでくれるよね！」

束の目の前には独特なユニットの搭載された、全体が黄金色をした何かが鎮座している。

「この『束さんゴールデンエクストリームストライカー』をプレゼントしたら！！！」

ネーミングについて言及されるのは後のことになるだろう。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~2656

IS 《インフィニット・ストラトス》 ～星を見ぬ者～
2015年08月06日 19時31分発行